

角川つばさ文庫

しんやく
新訳

ナル

ア

こく
王

もの
物語

1
ライオンと魔女と

洋服だんす

シエス
C・S・ルイス・作
かわいしゅういちろう
河合祥一郎・訳
ナルタク
Nardack・絵

Kadokawa
Tsubasa
Bunko

悪い魔女は、四人兄妹の三番目のエドマンドに

魔法のターキッシュ・デライトをあげました。

それは、あまくて、ふんわりとした、

でも、死の呪いのかかったお菓子でした。

ほかの兄妹たちもつれてきなさい。

そしたら、もっと食べさせてあげるわ。

映画にもなった、

史上最高のファンタジー!!





しんやく
新訳

こくものがたり

ナルニア国物語

①ライオンと^{まじょ}魔女と^{ようふく}洋服だんす

シー エス

C・S・ルイス・作

かわいしょういちろう

河合祥一郎・訳

ナルダク

Nardack・絵



**The Chronicles of Narnia,
The Lion, the Witch and the Wardrobe
by C. S. Lewis 1950**



こくものがたり
ナルニア国物語①の
あらすじ

この物語は4人の
兄妹たちが両親とはなれ、



エドモンド

ルーシー

ピーター

スーザン

いなかの古い家にあずけられた
ことからはじまります。

家の主の教授は変わり者で、
子どもたちは好きに
すごせました。

★
だからみんな
遊びほうだい！

ある日、4人はそれぞれ
家の空き部屋を探検することに。

なにかしら？
このたんす…

ルーシーがみつけた
洋服だんすの扉のむこうは――

★
人のことは
ほっといて
やりなさい

★
教授



ふしぎな国
ナルニアでした。

きみ、
人間かい!?

白の魔女に
みつかったら
たいへんだ!!

タムナスさん

ルーシーはタムナスさんと
なかよくなりますが…

ありがとう

これでぼくら
友だちだね

つぎにみんなで訪れたとき、
タムナスさんの家は
燃やされていました。

ひどいわ!

なにかしら
この紙…

この家の住人を
人間と交流した罪で
逮捕する。
白の魔女

わたしの
せいだわ!

見つけたら
殺せ!

4人は魔女に
追われる身に…

ルーシーたちはタムナスさんを
すくいだす冒険に出ます。

おくさん

まずは
腹ごしらえよ

森の王アスランなら
力になってくれる！

ビーバーさん

子どもたちよ

やがてアスランと
出会い――

きみたちが
ナルニアの王と
なるのだ

アスラン

4人の兄妹のなかに
うらぎりものがある！

困難を乗り越え――

子どもたちは、
魔女に戦いを
挑みますが……

さあ！

ナルニア国物語
はじまります！！

しょう かい
キャラクター紹介



エドマンド

した ばん
下から二番めの
ひねくれもの。最初に
しろ まじょ で あ
白の魔女と出会う。



スーザン

うえ ばん
上から二番めの
やさしいおねえさん。



ルーシー

した いもうと
いちばん下の妹。
とびら
ナルニアへの扉を
あける。

アスラン

せい もり おう
聖なる森の王で、
さいきょう
最強のライオン。



ピーター

ちやうなん
たよりになる長男。
エドマンドから
きら
嫌われている。

アスラン
と
にん きやう だい
4人の兄妹
(アダムとイブの
こどもたち)



しろ まじょ
白の魔女

じしやう
自称「ナルニアの
じやおう
女王」。四人の命を
ねらう。



タムナスさん

こしから下(した)がヤギの
フーン。ルーシーと
とも
友だちになる。



ビーバーさん

タムナスさんの
ゆうじん
友人。四人を
にん
たすけてくれた。



きやうじゆ
教授

にん
四人をあずかった、
ふうがわりな
おじいさん。

もくじ

- 1 ルーシー、洋服だんすのなかへようふく
- 2 タムナスさんのお茶会ちやかい
- 3 エドマンドと洋服だんすようふく
- 4 ターキツシュ・デイトライト
- 5 とびらのこちらにもどつてみると
- 6 森のなかへもり
- 7 ビーバー夫妻との一日ふさい いちにち
- 8 うらぎりもの
- 9 魔女の館でまじよ やかた
- 10 魔法が解けはじめるまほう と

- 11 アスランは近いちか
- 12 ピーターの初陣ういじん
- 13 時の始まりからある、深遠なる魔法とき しんえん まほう
- 14 魔女の勝利まじよ しょうり
- 15 時がはじまるより前の、もつと深遠なる魔法とき まえ しんえん まほう
- 16 石像に起こったことせきぞう お
- 17 白ジカ狩りしろ が

訳者あとがきやくしゃ

ナルニア国物語②巻のお知らせこくものがたり かん し

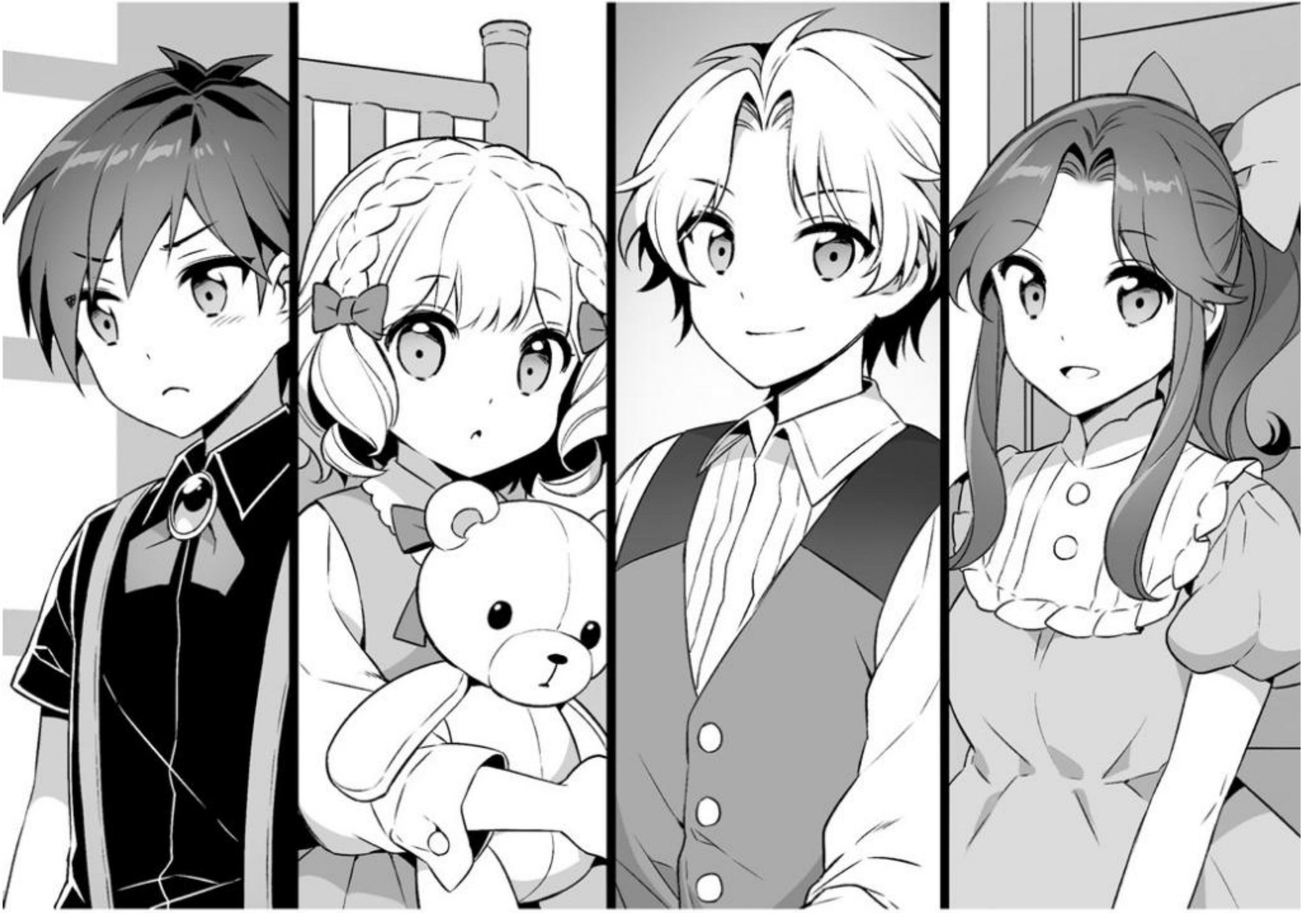
ルーシー、洋服だんすのなかへ

むかし、ピーター、スーザン、エドマンド、ルーシーという名前の四人の子どもがおりました。

これからお話するのは、戦時中、この四人のきょうだいが空襲をのがれて、ロンドンから遠くはなれた疎開先にやってきたときに起こった物語です。

きょうだいがあずけられたのは、年長いた教授のおやしきでした。もよりの駅から十六キロもはなれていて、いちばん近い郵便局に行くのに三キロも歩かなければいけないという、たいへんな田舎でした。教授にはおくさんがおらず、とても大きなおやしきに、家政婦さんのマクレーデイさんと、三人のお手伝いさんといっしょに住んでいました。（お手伝いさんの名前はアイビー、マーガレット、ベティといいます。が、このお話にはあまり出てきません。）

教授はとてもお年をめしていらして、頭はもちろん、顔までぼさぼさの白髪でおおわれていました。子どもたちは教授のことがすぐに好きになりましたが、最初の晩、子どもたちを出むかえに玄関に出ていらした教授が、あんまりふうがわりだったものですから、いちばん小さなルーシーは少しこわくなってしまうましたし、下から二番めのエドマンドは笑いたくなくて、それをごまかすのにずっとはなをかむふりをしていなければなりませんでした。



おやしきに着いた最初の日の晩、教授におやすみなさいを言つて二階にあがつたとたん、男の子たちは女の子たちの寝室にやつてきて、みんなでこんな話をしました。

「やったね、こいつはいいぞ」と、お兄さんのピーターが言いました。「すごいな。あのおじいちゃん、ぼくらの好きなようにやらせてくれそうだ。」

「どうやら、いい人のようだわね」と、お姉さんのスーザンも言いました。

「ちえ、やめろよ！ そんな言いかた、するなつて！」

そう言つたのは、弟のエドマンドです。つかれているのに見栄を張つて、へつちや、なふりをしています。そんなときエドマンドは決まつて不きげんでつつけんどんになるのです。

「どんな言いかた？」と、スーザン。「ともかく、あなたはもう寝る時間よ。」

「お母さんみたいな言いかたしてさ」と、エドマンド。「ぼくに寝ろだなんて、なにさまのつもりだい。お姉ちゃんこそ、寝ればいいじゃないか。」

「みんな寝たほうがいいんじゃない？」と、妹のルーシーが言いました。「ここでおしやべりしてるのが聞こえたら、しかられちゃう。」
「だいじょうぶさ」と、ピーターが言いました。「この家じゃあ、だれもぼくらのすることなんか気にしちやいないよ。どうせ、聞こえないしね。ここから下の食堂まで行くのに十分はかかるし、とちゅうに階段や廊下がどれだけあるかわからないくらいなんだから。」

「あの音、なあに？」ふいにルーシーが、たずねました。

こんなにとつともなく大きな家はじめてでしたし、長い廊下がずつとつづいていて、どのドアをあけてもがらんとした部屋があると考えただけで、ルーシーはなんだかこわくなつてしまったのでした。

「ただの鳥だよ、ばかだな」と、エドマンド。

「フクロウだ」と、ピーター。「ここは、鳥にはすばらしいところだろうな。さて、ぼくはもう寝るよ。そうだ、あしたは探検しに出かけよう。こんなところには、いろんな生き物がいるだろうよ。来るとちゅうの山を見たら？ それと、森も？ ワシがいるだろうな。シカもいるね。タカも。」

「アナグマも！」と、ルーシー。

「キツネも！」と、エドマンド。

「ウサギさんも！」と、スーザン。

ところが、翌朝になつてみると、ざあざあ降りの雨で、窓の外を見ても、山や森どころか、庭に水が流れているようすさえ見えないのでした。

「ちえ、そりやあどうせ雨降りだろうよ！」と、エドマンドは言いました。

それは、みんなが教授といっしょに朝ごはんをいただいたあと、子ども部屋として使いなさいと言われた部屋にあがつてきたときのことでした。天井の低い細長い部屋で、窓がふたつならんでいて、別の壁にも窓がふたつありました。

「ぶつぶつ言わないの、エド」と、スーザン。「きつと一時間もすれば晴れるわよ。それまでにやることなら、いろいろあるわ。ラジオもあるし、本だつてどつさり。」

「それよりも、ぼくは、家のなかを探検するぞ」と、ピーターが言いました。

これにはみんな大賛成でした。こうしていよいよ、あの冒険がはじまったのです。

どこまで行っても行きどまりにならないくらい大きな家でしたから、思いもよらない場所があちこちにありました。

手はじめに、いくつかドアをあけてみたら、なんてことはないお客さま用寢室だったりしましたが、そのうちに、ずらりと絵がならんでかかっている、ずいぶん細長い部屋に出て、そこには、よろいかぶとが、ひとそろい立ててありました。そのつぎの部屋には、ぐるりと一

面に緑のかべ紙がはつてあつて、すみにハープ（豎琴）が置いてありました。

その先の三段の階段をおりてから五段あがると、二階の小さな廊下に出て、そこにならぶドアのひとつはバルコニーに通じており、ほかのドアをあけると、ひとつづきの部屋に出ました。部屋から部屋へドアでつながっているのです。どの部屋にも本がぎっしりならんでいました。たいていはかなり古い本で、教会にある聖書より大きな本も何冊もありました。

そのすぐあとにのぞいた部屋は、がらんとしていて、大きな洋服だんすが一棹あるきりでした。とびらの内側に鏡がついている古いタイプのたんすです。その部屋には、ほかに、なんにもありませんでした。ただ、窓の下枠にアオバエの死骸があるきりでした。

「なんにもなし！」

ピーターが言つて、みんなはまたぞろぞろと部屋を出ていきました。ルーシーをひとりのこして。

ルーシーがとどまつたのは、たんすのとびらをあけてみたらどうかしらと思つたからです。どうせ、かぎがかかっているに決まつているでしょうけれど。

ところが、おどろいたことに、とびらは、すんなりあくではありませんか。あけたひょうしに、虫よけのし、う、のう、（防虫剤）の玉がふたつ、ころころとこころがり出てきました。



なかをのぞいてみると、コートが何着もつりさがっていました。たいていは長い毛皮のコートです。ルーシーは、毛皮のにおいをかいだり、さわったりするのが大好きでした。ですから、さっとたんすのなかに足をふみ入れると、コートのあいだに入って、顔をすりつけてみました。もちろん、とびらはあけっぱなしにしたままです。だって、たんすのなかに閉じこめられたりしたら、おばかさんですからね。さらにおくへ入ってみると、手前のコートの列のむこうに、もう一列コートがならんでいるのに気づきました。そこまで来ると、もうまっ暗でしたから、たんすのおくにおでこをぶつけないように、手を前につき出しておきました。もう一歩ふみこみ——さあ、もう今にも

指先^{ゆびさき}がたんすのうしろの板^{いた}にさわるわと思^{おも}いながら、さらに二、三歩^{さんぽ}おくへ入^{はい}っていきました。けれども、いつまでたつても、なんにもさわりません。

「ものすごく大き^{おお}なたんすなんだわ！」

ルーシーは、やわらかなコートをかきわけながら、どんどんおくに進^{すす}みました。すると、足^{あし}の下^{した}でなにかザクザクふみしめているような感^{かん}じがありました。

「虫^{むし}よけの玉^{たま}かな？」

そう思^{おも}って、かがんでさわってみました。でも、足^{あし}もとにあつたのは固^{かた}くてつるつるのたんすの木^きの床^{ゆか}ではなく、ふわふわ、さらさらと歩いて、すごく冷^{つめ}たいものでした。

「あれえ、おかしいな。」

ルーシーは、もう一、二歩^{ふたぽ}、おくへ進^{すす}んでみました。

つぎの瞬間^{しゅんかん}、顔^{かお}や手^てにふれているのは、やわらかな毛皮^{けがわ}ではなく、固^{かた}くてごつごつして、チクチクさえするものだとなりました。

「まあ、木^きの枝^{えだ}みたい！」

ルーシーはさけびました。

そのとき、前^{まえ}のほうに光^{ひかり}が見^みえました。たんすのおくの板^{いた}があるはずの数^{すう}センチ先^{さき}ではなく、それよりもずっとむこうのほうでなにかが光^{ひか}っているのです。冷^{つめ}たくてふわふわしたものがルーシーに降^ふりかかっています。

気づ^きいてみると、ルーシーは真夜中^{まよなか}の森^{もり}のなかに立^たっていて、足^{あし}もとには雪^{ゆき}がつもり、空^{そら}から雪^{ゆき}が降^ふっているのです。

ルーシーは少^{すこ}しこわいとは思^{おも}いましたが、これはいったいどういうことかしらと知^しりたくてたまらなくなつて、わくわくしてきました。肩^{かた}ごしにふりかえると、暗^{くら}い木々^{きぎ}の幹^{みき}のあいだから、あけっぱなしのたんすのとびらがまだ見^みえていましたし、たんすがあつたがらんと

した部屋^{へや}さえ、ちらりと見る^みことができました。（もちろん、とびらはあけてきたんでしたね。たんすのなかから出^でられなくなったりしたら、ほんとにおばかさんですもの。）たんすのむこうは、あいかわらず昼間^{ひるま}のようでした。

「なにかへんなことになったら、いつでも帰^{かえ}れるわ。」

ルーシーは、そう思^{おも}うと、ザクザクと雪^{ゆき}をふみしめながら進^{すす}み、前のほうにある光^{ひかり}にむかつて森^{もり}のなかを歩^{ある}いていきました。

十分^{じゅうぶん}ほどすると、光^{ひかり}のところに着^つきました。それは街灯^{がいとう}の明^あかりでした。ルーシーは街灯^{がいとう}を見^みあげながら、どうして森^{もり}のまんなかに街灯^{がいとう}があるのかしらとふしぎに思^{おも}いました。これからどうしようかなと考^{かんが}えていると、パタ、パタ、とこちらへ近づ^{ちか}づいてくる足音^{あしおと}が聞^きこえてきました。やがて、森^{もり}のなかから街灯^{がいとう}の光^{ひかり}のなかへあらわれたのは、まったくふしぎなひとでした。

そのひとは、ルーシーよりほんの少し^{すこ}だけ背^せが高^{たか}くて、かさを手^てにしていきました。かさの上^{うえ}にはまっ白^{しろ}に雪^{ゆき}がつもっています。こしから上^{うえ}は人間^{にんげん}のようでしたが、あしはやぎのあしそっくりで、つやつやと黒^{くろ}い毛^けが生^はえていました。そしてなんと、足先^{あしさき}はやぎのひづめになっ
ていました。

しつぽもありましたが、ルーシーには最初^{さいしよ}しつぽがあるとわかりませんでした。というのも、しつぽは、雪^{ゆき}の上^{うえ}を引きずらないように、かさを持^もっているほうの腕^{うで}にきちんとかけてあつたからです。首^{くび}には赤^{あか}いウール（毛糸^{けいと}）のマフラーが巻^まかれ、はだもかなり赤^{あか}みがかつて
いました。

そのふうがわりな、かわいい小^{ちい}さな顔^{かお}には、短^{みじか}くとがつたあごひげが生^はえていて、巻^まき毛^げの頭^{あたま}からは二本^{ほん}の角^{つの}が顔^{かお}を出^だしていました。額^{ひたい}
の両側^{りょうがわ}に角^{つの}が生^はえていたのです。

片方^{かたほう}の手^てには、さつき言^いったように、かさを持^もっていましたが、もう片方^{かたほう}の手^てには茶色^{ちやいろ}の小包^{こづつみ}をいくつかかかえていました。雪道^{ゆきみち}で小包^{こづつみ}
をかかえているようすを見ると、いかにもクリスマスのお買^かい物^{もの}をしてきたところのように見^みえました。

このひとは、フオーン（こしから下^{した}がやぎの、神話^{しんわ}に出^でてくる人物^{じんぶつ}）でした。そして、ルーシーを見^みると、びくつとしたあまり、持^もって

いた小包^{こづつみ}をぜんぶ落^おつことしてしまいました。

「うわあ、びっくりした！」

フオーンは、すつとんきような声^{こえ}をあげました。



2

タムナスさんのお茶会ちやかい

「こんばんは」と、ルーシーは言いました。

でも、そのひとは小包こづつみをひろうのに大いそがしで、最初さいしょは返事へんじをしてくれませんでした。ひろいおえると、フォーンはルーシーにひよいと頭あたまをさげました。

「こんばんは、こんばんは。」フォーンは言いました。「失礼しつれいですが——あれこれうかがおうというわけではないのですが——あなたはひよつとすると、イブのむすめさんじゃないでしょうか。」

「あたしの名前なまえはルーシーよ。」

相手あいてがなにを言っているのかよくわからないまま、ルーシーは答えました。

「でも、あなたは——失礼しつれいですが——あのう、いわゆる、女の子おんなこ、ではありませんか？」
フォーンはルーシーにたずねました。

「もちろん、女の子おんなこよ。」

「じゃあ、人間にんげんなんですね？」

「もちろん、人間にんげんよ。」

まだ少しわけのわからないまま、ルーシーは答えました。

「そりやそうですね、そりやそうですね」と、フォーン。「おろかなことを申しました。これまで、アダムのむすこさんにも、イブのむすめさんにも、お目にかかったことがなかったものですから。じつにうれしい。それに——」

そのときフォーンは、なにか言っではいけないことを言いかけて、あぶないところでそれに気づいたかのように、言葉を切りました。

「いやあ、うれしい、うれしい。」フォーンはつづけました。「自己紹介させてください。ぼくは、タムナスと申します。」

「お会いできてうれしいわ、タムナスさん」と、ルーシー。

「ひとつおたずねしてもよろしいでしょうか、イブのむすめのルーシーさん」と、タムナスさんは言いました。「ナルニアへはどうやっていらつしやったのですか？」

「ナルニア？　なあに、それ？」

「ここはナルニアの国なんです、今いるここが。この街灯から、東の海のケア・パラベルという大きなお城にいたるまで、ぜんぶナルニアなんです。あなたは——西の荒れた森からいらしたのですか？」

「あたし——あたし、空き部屋にある洋服だんすを通ってきたのよ」と、ルーシーは答えました。

「ああ！　子どものところに地理をもつと勉強しておけばよかった。」タムナスさんは、とてもゆううつそうな声で言いました。「そういった外国のことを知っているべきでしたが、今となってはもうおそい。」

「あら、たんすは国なんかじゃないのよ。」ルーシーは、笑いだしそうになりながら言いました。「つい、この裏にあるの——と思うけど——よくわかんない。むこうは夏なの。」

「ところが、ナルニアは冬。ずいぶん長いあいだ冬のままです。さあ、こんな雪のなかで立ち話なんてしていたら、かぜをひいてしまします。永遠の夏が支配する遠い国《アキベヤー》にある、かがやける都市《ヨウ・フクダンス》からいらしたイブのむすめさん、ぼくのうち

で、お茶をめしあがりませんか？」

「どうもありがとうございます、タムナスさん。でも、もう、おうちに帰らなくちや。」

「その角を曲がつてすぐなんですよ、ぼくのうちは。それに、あつたかいだんろの火も燃えてますし——トーストも——油づけいわしも——ケーキもあります。」

「それは、ご親切にありがとうございます。じゃあ、ちよつとだけ。」

「ぼくの腕をお取りくだされば、イブのむすめさん」と、タムナスさんは言いました。「ふたりでかきに入つていきます。そう、それでいいです。さあ——行きましょう。」

こうしてルーシーは、このふしぎな生き物と、まるで幼なじみであるかのように腕を組んで、森のなかを歩いていきました。

あまり進まないうちに、地面がごつごつして、岩がごろごろしているところへ出て、それから小さな丘をいくつかのぼつたりおりたりしました。ある小さな谷底へおりと、タムナスさんは急に曲がつて、とてつもなく大きな岩に、まるでそのまま入つていくかのように歩いていきました。「あ、ぶつかる」という最後の瞬間に、そこがほら穴の入り口なのだとルーシーにはわかりました。タムナスさんは、ルーシーをそのなかへ案内しようとしてくれていたのです。

なかに入るとすぐ、燃えさかるたきぎの明かりがまぶしくて、ルーシーは目をしばたたきました。タムナスさんは、かがんで、小さな火ばしで、燃えているたきぎを一本取り出すと、ランプに火をともしました。

「すぐですからね。」

そう言うと、タムナスさんは、さつと、やかんを火にかけました。

ルーシーは、こんなにすてきなところには来たことがないと思いました。

赤みがかった岩でできた小さなほら穴は、かわいていて、きれいにしてありました。じゅうたんのしかれた床に、小さなすがふたつあ

りました。「ひとつはぼくの、もうひとつはお客さま用」と、タムナスさんは言いました。それから、テーブルがあり、食器だがあり、だんろのかざりだがあり、その上のはうには白ひげを生やした年老いたフォーンの絵がかかっていました。

部屋のすみにあるドアは、きつとタムナスさんの寢室に通じているんだらうと、ルーシーは思いました。

かべの本だには本がぎっしりつまっていました。タムナスさんがお茶のしたくをしているあいだ、ルーシーは本をながめてみました。

『森の精シレノスの生涯と書簡』、『妖精とその伝統』、『人間、僧侶、森番——民間伝説研究』、『人間は伝説上の生き物か?』といった本がならんでいました。

「さあどうぞ、イブのむすめさん！」フォーンが言いました。

それは本当にすばらしいお茶の時間でした。

おいしい茶色の半熟卵がふたりそれぞれに一個ずつあって、油づけいわしをのせたトーストをいただくと、つぎにバターをぬったトーストが出て、そのつぎはハチミツをぬったトーストが出て、そのうえ砂糖のかかったケーキまで出てきました。

ルーシーがもう食べるのはけっこうと言うと、タムナスさんはお話をしてくれました。森の生き物についてのすばらしいお話です。真夜中のフォーンたちのおどりの話や、泉に住む妖精たちや森に住む木の精ドリユアスたちが出てきてフォーンたちのおどりにくわわつ



た話とか、つかまえたなら願い事をかなえてくれるというまつ白なシカを追って、長い隊列を組んで狩りをした話とか、森のはるか地下にある深い坑道やほら穴に住む荒々しい“赤いこびとたち”といったしよにパーティーや宝探しをした話などをしてくれたのです。

それから、森じゅうが緑となる夏には、老いた森の精シレノスが太ったロバに乗ってフォーンのところへやってきて、酒の神バツコスも来たりすると、森じゅうの小川に、水ではなくて酒が流れて、森のみんなは何週間にもわたってお祝いをしたものだと言ってくれました。

「今じゃ、いつまでも冬になってしまいましたかね。」

タムナスさんは、むつつりとつけくわえました。それから、自分で自分を元気づけるために、食器だにあつた箱から、わらでできているような、ふしぎな小さな横笛を取り出して、ふきはじめました。

そのメロディーを聞くと、ルーシーは泣きたいような、笑いたいたいような、おどりだしたいような、しかもねむたいような気分になり、いつになつてしまいました。はつと気がついて、タムナスさんに声をかけたときには、もう何時間もたっていたにちがいありません。

「ああ、タムナスさん——ごめんなさい、その曲は大好きなんだけど——でも、ほんと、あたし、おうちに帰らなくちゃ。ほんのちよつとだけのつもりだったのに。」

「今となつては、もうだめですよ。」

フォーンは笛を置いて、ルーシーにむかつてとても悲しそうに首をふりながら言いました。

「だめですって？」

ルーシーはとてもこわくなつて、飛びあがりました。

「どういふこと？ いそいでおうちに帰らなきや。みんな、あたしのこと、心配してるわ。」

でも、ルーシーは、そのあとすぐに、「タムナスさん！ いったいぜんたい、どうしたの？」と、たずねることになりました。だって、タムナスさんの茶色の目にはうるうると涙がいつぱいうかんでいて、やがてその涙がほおを伝つて流れはじめ、鼻の先からぽたぽたしたた

り落ちて、とうとうタムナスさんは顔を両手にうずめて、おいおいと泣きだしてしまつたのですから。

「タムナスさん！ タムナスさん！」

ルーシーは、こまりきつて言いました。

「泣かないで！ 泣かないで！ どうしたの？ だいじょうぶ？ ねえ、タムナスさん！ どうしたのか教えて。」

でも、タムナスさんは、胸が張りさけんばかりに泣きつづけました。ルーシーがタムナスさんのところへ行つて、その体に腕をまわして、ハンカチを貸してあげても、泣きやみませんでした。

タムナスさんは、ただハンカチを受けとると、それでひたすら涙をぬぐい、びしょびしょで使いものにならなくなると、両手でぎゅつとしぼるものですから、あつというまにルーシーの立っているあたりは水びたしになつてしまいました。

ルーシーは耳もとで大声を出して、タムナスさんをゆさぶりました。

「タムナスさん！ ねえ、泣かないで！ さあ、すぐ泣くのをやめなさい！ はずかしくないの、大きなフォーンのくせして。いったい、なにを泣いてるの？」

「ええん——ええん——ええん！」タムナスさんは、すすりあげました。「ぼく、悪いフォーンだから、泣いているんですよお。」

「あなたは、ぜんぜん悪いフォーンなんかじゃないわ。あなたは、とってもいいフォーンよ。あなたみたいなすてきなフォーンに、あたし、会つたことないもの。」

「ええん——ええん——もし、ごぞんじだったら、そうは、おつしやらない、でしょう。」

タムナスさんは、むせび泣きながら答えました。

「ぼくは悪いフォーンなんです。世界がはじまって以来、こんな悪いフォーンは、いなかつたと思います。」

「だけど、なにをしたつていうの？」ルーシーは、たずねました。

「ぼくの老いた父は、ほら、」と、タムナスさん。「あそこのだんろのかざりだなの上の絵がそうですが、父だったら、こんなことは決してしなかったでしょう。」

「こんなことって？」

「ぼくがしたようなことです。白の魔女につかえるということです。そうです。ぼくは、白の魔女の手下にさせられているんです。」

「白の魔女？　だあれ、それ？」

「だれって、ナルニアじゅうを思いどおりにしているやつですよ。ずっと冬のままなのも、あいつのせいです。ずっと冬なのに、クリスマスは来ない。ひどいでしょ！」

「それはひどいわ！　でも、そんな人のために、あなた、なにをしてるの？」

「そこが、いちばんひどいところなんです。」

タムナスさんは、低いうめき声をあげて言いました。

「ぼくは魔女につかえる人さらいなんです。それがぼくの正体なんです。ぼくをごろんなさい、イブのむすめさん。このぼくが、かわいそうな罪のない子どもと森のなかで会って、ぼくになんの悪いこともしていないその子と友だちになるふりをして、自分のほら穴に招待するのは、ただその子をねむらせ、白の魔女にさし出すためだなんて、ぼくがそんなことをするようなフォーンだと信じられますか？」

「信じられないわ。あなたは、そんなこと、絶対しないと思うわ。」

「でも、したんです。」

「だったら――」

ルーシーは、とてもゆっくりと言いました。（だって、本当のことが言いたかったけれど、タムナスさんの気持ちを傷つけたくはありませんでしたからね。）

「だったら、それはとてもいけないことだわ。でも、あなたは悪かったとおもっているんだから、もう二度としないでしょ。」
「イブのむすめさん、おわかりにならないのですか？　むかしやったことを話しているんじゃないんです。今、まさにこの瞬間に、しているんです。」

「それって、どういうこと？」

ルーシーは、まっ青になつてさけびました。

「あなたがその子どもなんですよ。」

タムナスさんは、言いました。

「ぼくは、森でアダムのむすこかイブのむすめをみつけたら、つかまえて引きわたすようにという命令を、白の魔女から受けているんです。そして、あなたが、ぼくが会った最初の人間の子どもなんだ。だから、ぼくはあなたの友だちになったふりをして、お茶にさそい、あなたがねむりこけるまで待つてから、魔女のところに教えに行こうとしていたんです。」

「でも、そんなこと、しないでしょ、タムナスさん」と、ルーシー。「しないわよね？　ほんと、ほんとにそんなこと、しちやいけないわ。」

すると、タムナスさんは、また泣きだしながら言いました。

「そうしないと、かならずばれて、ぼくはしつぽをちよん切られ、角を切り落とされ、ひげをぬかれ、ぼくのこのきれいに割れたひづめの上で魔法の杖をふられて、駄馬のおぞましい固いひづめみたいなものに変えられてしまうんだ。それに、魔女がいつもより怒っていたら、ぼくは石に変えられて魔女の家に石像として飾られてしまう。ずうつといつまでも、ケア・パラボルの四つの玉座がうまるまで。そんなの、いつのことになるか、だれにもわからないし、そんなことが起こるかどうかさえわかったもんじやないのに。」

「それは本当にお気のどくだとは思うけれど、タムナスさん、」と、ルーシー。「どうか、おうちに帰らせてちょうだい。」

「もちろん、そうします。もちろん、そうしなくちゃいけない。ようやく、それがわかりました。あなたにお会いするまで、人間がどのようなものか、知らなかったんです。もちろん、あなたを魔女に引きわたしたりはできません。あなたとお知りあいになった今となつては、ね。でも、すぐに出かけなきゃ。あなたを街灯のところまでご案内しましょう。そこから、《アキベヤー》国の《ヨウ・フクダンス》町への道はおわかりになりますね？」

「わかると思うわ」と、ルーシー。

「できるかぎり、そつとまいりましょう。森じゅう、あいつのスパイだらけですからね。木のなかにだって、あいつの味方をするやつがいるんです。」

ふたりは立ちあがり、お茶のカップやお皿をそのままテーブルにのこして、タムナスさんの家を出ました。タムナスさんはもう一度かさをさして、ルーシーに腕を貸し、ふたりは雪のなかへ出ていきました。

帰りは、このほら穴にやってきたときとは、てんでちがいました。ひとことも口をきかずに、そそくさと、できるかぎりの早足で歩いたのです。タムナスさんはいちばん暗いところばかり歩きました。ルーシーは、またあの街灯のところまで来ると、ほつとしました。

「ここから先の帰り道はわかりますか、イブのむすめさん？」と、タムナスさんは言いました。木々のあいだから目をこらしてみると、遠くに昼間の光のような木もれ日が見えました。

「ええ」と、ルーシーは言いました。「洋服だんすのとびらが見えるわ。」

「では、できるだけ早くおうちにお帰りなさい。そして——もしできたら、ぼくがしようとしたことを、ゆ、ゆるしてくださいますか？」

「それはもちろんよ。」

ルーシーはフォンと心をこめてあくしゅして言いました。

「あたしのせいで、あなたがひどい目にあわなければいいけど。」

「さようなら、イブのむすめさん。もしかして、このハンカチ、もらってもいいでしょうか？」
「どうぞどうぞ！」



ルーシーはそれだけ言^いって、かなたにある昼^{ひる}の光^{ひかり}にむかって、全速^{ぜんそく}力で走^{はし}りだしました。

すると、やがてごつごつした枝^{えだ}にあたる感^{かん}じがなくな^なって、ふわふわの毛皮^{けがわ}にふれ、足^{あし}にはザクザクとした雪^{ゆき}ではなく、つるつるの木^きの板^{いた}が感^{かん}じられました。

ルーシーは、いつのまにか、たんすから飛^とび出^だして、この冒険^{ぼうけん}がそもそもはじまった、あのがらんとした部^へ屋^やにもど^もど^どつていたのです。うしろ手^でとびらをしつかりと閉^しめると、ルーシーは息^{いき}をぜいぜいさせながら、あたりのようすを見^みまわしました。外^{そと}はまだ雨^{あめ}が降^ふっていて、廊下^{ろうか}ではみんなの声^{こえ}がしています。

「ただいま！」ルーシーは、さけびました。「ただいま。帰^{かえ}ってきたわ。あたし、だいじょうぶよ！」

エドマンドと洋服だんす

がらんとした部屋から廊下に走り出たルーシーは、ほかの三人を見つけました。

「だいじょうぶよ。」もう一度言いました。「あたし、帰ってきたの。」

「いったい、なんのこと、ルーシー？」

スーザンがたずねたので、ルーシーはびつくりしました。

「だって、あたしがどこに行っちゃったんだろうって思ってたんじゃないの？」

「どうせ、かくれてたんだろ？」と、ピーター。「かわいそうなルー。かくれてたのに、だれにも気づいてもらえないなんて！ みんなに

さがしてもらいたかったら、もつと長くかくれてなくちゃ。」

「でも、何時間も何時間もいなかったのよ」と、ルーシー。

三人は顔を見あわせました。

「いかれちゃった！」エドマンドが自分の頭を指の先で軽くたたいてみせながら、「すっかりいかれちゃった」と言いました。

「こういうことだい、ルー？」と、ピーター。

「だからね、朝ごはんのすぐあとでたんすに入っただけ。それから、あたし、何時間も何時間も帰ってこなくて、お茶をぐちそうになったり

して、いろんなことが起こったの。」

「ばかなこと言わないの、ルーシー」と、スーザンが言いました。「私たちがあの部屋から出てきたのはついさっきのことです、それまであなたもいつしよだったじゃないの。」

「ばかなことを言ってるわけじゃないよな」と、ピーター。「お話をこしらえて楽しんでるんだろ、ルー？ おもしろいじゃないか。」

「ううん、ピーター、ちがうの」と、ルーシー。「あの——あれは魔法のたんすなのよ。なかには森があつて、雪が降っていて、フオーンがいて、魔女がいて、ナルニアっていうところなの。見に来て。」

ほかのみんなはどう考えてよいかわかりませんでした、とにかくルーシーがあんまり興奮しているので、あとについてさっきの部屋までもどつてみました。

ルーシーがまっ先に部屋に飛びこんで、たんすのとびらをさつとひらいてさけびました。

「ほら！ なかに入って自分で見てみるといいわ。」

スーザンがなかに頭をつつこんで、毛皮のコートをかきわけながら言いました。

「なによ、おばかさんね。ふつうのたんすじゃないの。見てごらんさ！ あそこにおくの板があるわ。」

それからみんながのぞきこんで、コートをかきわけました。

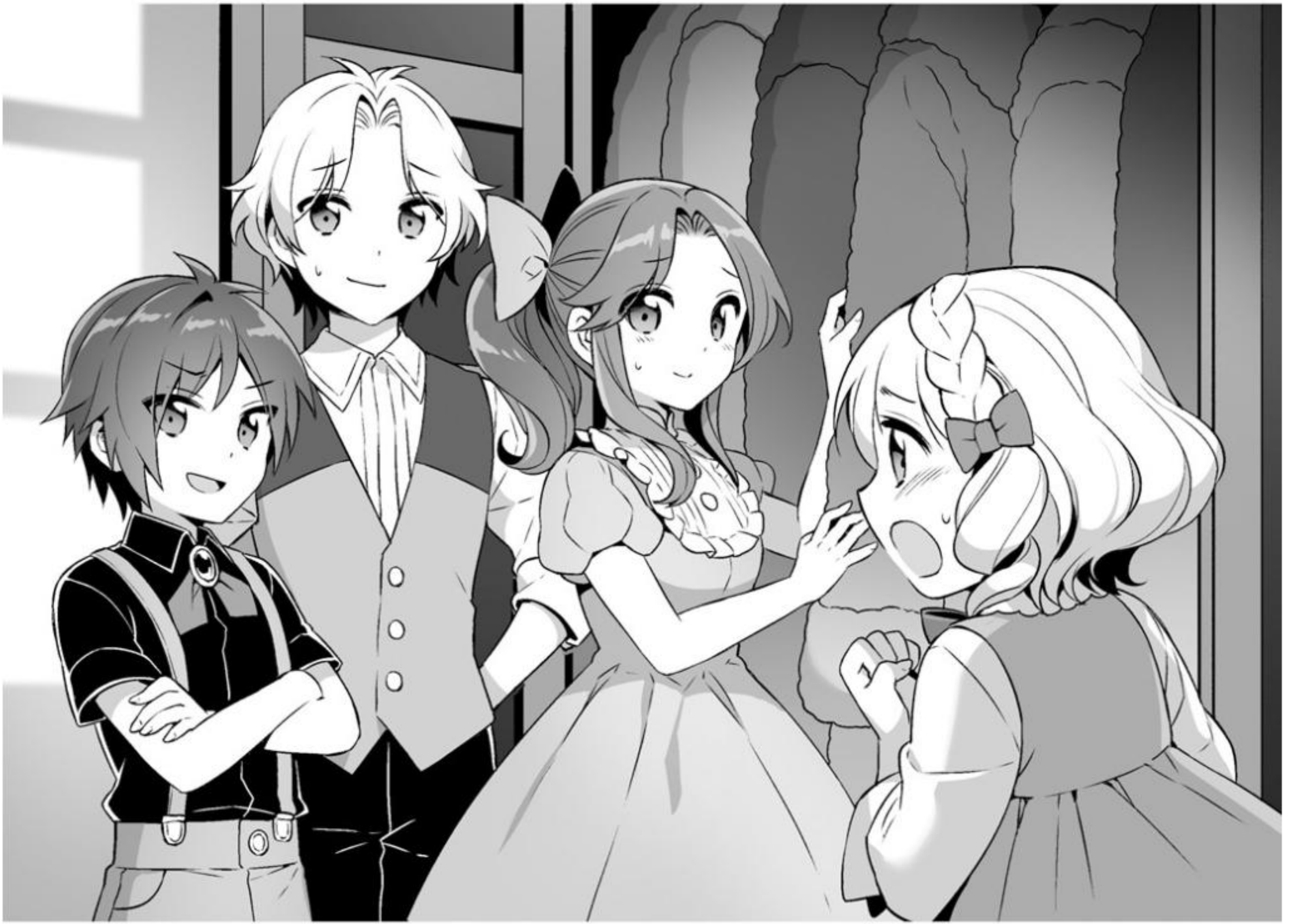
そして、みんな見たのです——ルーシー自身も見ました——なんの変つてもないたんすを。

森もなければ、雪もなく、たんすのおくには板があつて、板にはフック（服やぼうしをかける鉤）がならんでいました。ピーターはなかへ入つて、こぶしでとんとんとたたいて、板が固いことをたしかめました。

たんすから出てきたピーターは言いました。

「一ぱい食わせたな、ルー。すっかりひつかかったよ、やられたね、ちよつと信じかけちゃったもんね。」

「ひっかけたんじゃないの」と、ルーシー。「ほんとにほんとなの。さつきは全然^{ぜんぜん}ちがつてたんだもん。うそじゃないよ。約束^{やくそく}する。」
「もういいよ、ルー」と、ピーター。「やりすぎだよ。みんなに一^{いっ}ぱい食^くわせたんだから、もうおわりにしたらいいじゃないか。」



ルーシーは顔をまっ赤にして、なにか言おうとしましたが、なんと言っているかわからず、わっと泣きだしてしまいました。それから数日間、ルーシーはひどく落ちこんでいました。

なにもかもじょうだんでしたと言う気になれたら、すぐにでもみんなと仲直りできたのでしようけれど、ルーシーはとても正直な女の子でしたし、自分が正しいこともわかっていましたから、そんなことを言う気にはなれませんでした。

みんなから、ルーシーはうそをついていて、それも見えすいたうそをついていると思われるのは、とてもつらいことでした。

上のふたりのきょうだいはルーシーを悲しませるつもりはなかったのですが、ときどきいじわるをするエドマンドは、このときもいじわるをしました。ルーシーのことをあざけったりからかったりして、家じゅうのほかの戸だなに別の新しい国を見つけたかなんて聞くのです。さらにくやしかったのは、こんなことさえなかったら楽しくすごせたはずの、いいお天気の日がつづいたことです。朝から晩まで外に出て、水浴びをしたり、魚つりをしたり、木のぼりをしたり、野原に寝ころがったりして、みんなは楽しんだのですが、ルーシーだけは、なにをしてもあまり楽しめませんでした。

そうこうしているうちに、つぎの雨降りの日がやってきました。

その日は、午後になっても雨があがるようすがなかったので、かくれんぼをすることにしました。スーザンが鬼になつて、みんながかくれようとして、ぱつとちりぢりににげたたん、ルーシーは、たんすがある部屋に入りました。

たんすのなかにかくれようと思つたわけではありません。そんなことをしたら、みんなまた、あのいやなことを話しはじめるに決まっています。

でも、もう一度だけ、なかをのぞいてみたい、とルーシーは思いました。というのも、このころには、ナルニアもフォーンも夢だったのではないかしらと自分でも思いはじめていたからです。

おやしきはとても大きくて入り組んでいて、あちこちにかくれる場所がありましたから、たんすをのぞいてからでも、よそにかくれる時

間はあると思つたのです。しかし、たんすの前まで来ると外の廊下から足音が聞こえたものですから、どうしたつてたんすに飛びこんでとびらを閉めるよりほかありませんでした。

けれども、とびらをぴつたりと閉めたりはしませんでした。だつて、たとえ魔法のたんすでないにしろ、たんすから出てこれなくなつたりしたら、いけませんものね。

さて、聞こえてきた足音は、エドマンドの足音でした。

エドマンドは、部屋に入つてきたとき、ちょうどルーシーがたんすのなかにかくれるのが見えたので、すぐに自分もなかに入ろうと思ひました——とくにいいかくれ場所だからというわけではなく、妹がでつちあげた国のことで、妹をからかつてやろうと思つたのです。

エドマンドは、たんすのとびらをあけました。いつものようにコートが何着もぶらさがつていて、虫よけ玉のにおいがして、まっ暗でしんとしていて、ルーシーの姿は見えません。

「ぼくのことを、つかまえに来たスーザンだと思つてゐるんだな。それで、おくのほうでじつとしてゐるんだろう。」

エドマンドは、たんすのなかへ飛びこみ、とびらをぴたりと閉めました。そんなことをするのはいけないのだと忘れてしまつていたのです。

それから、暗やみのなかで、手探りでルーシーをさがしはじめました。すぐに見つかると思つてゐたのですが、おどろいたことに、見つかりません。とびらをまたあけて、光を入れようと思つたのですが、とびらも見つかりません。

これはこまつたことになつたと思ひ、あちこち無我夢中で手探りをし、大声でさげびしました。

「ルーシー！ ルー！ どこにゐるんだ？ ここにゐるのはわかつてゐるんだぞ。」

答えはなく、エドマンドは自分の声がへんなひびきかたをしていることに気づきました。たんすのなかの声ではなく、まるでひろい場所での声みたいでした。それに思ひがけず寒いことにも気がつきました。と、そのとき、光が見えました。

「よかった。とびらが自然にひらいたんだ。」

エドマンドは、ルーシーのことはすっかり忘れて、光のほうへ行ってみました。たんすのとびらがひらいたとばかり思っていたのですが、がらんとした部屋におり立つかわりに、こんもりした暗いモミの木々のかげから、森のまんなかのひらけた場所へと出てきたのでした。

足の下にはサクサクとしたかわいた雪があつて、木々の枝にはたつぷり雪がつもっていました。頭上には晴れた冬の朝に見られるような青白い空がひろがっています。エドマンドのまつすぐ前のほう、木々のあいだには、今まさにのぼろうとしている朝日がまつ赤に明るく輝いていました。

なにもかもがしーんと静まりかえつていて、まるでこの世にエドマンドひとりつきりになつてしまつて、ほかに生き物がいないかのよう
に思えました。木々にはコマドリ一羽、リス一匹いませんし、森は見わたすかぎりどこまでもひろがつています。エドマンドは、ぶるつと
体をふるわせました。

そういえばルーシーをさがしていたんだっけ、とエドマンドは思い出しました。それに、これまで「でっちあげの国」などとからかつて、
ルーシーになんてひどいことをしてしまつたんだろうと思いました。でっちあげどころではなかったのです。ルーシーはどこかすぐ近くに
いるにちがいないと思つて、エドマンドはさげびました。

「ルーシー！ ルーシー！ ぼくも来たよ——エドマンドだよ。」

返事はありません。

「いろいろひどいこと言つちやつたから、怒っているんだ。」

自分が悪かつたとみとめるのはいやでしたが、このふしぎな、寒くて静かな場所にひとりぼつちでいるのはもつといやでしたから、エド
マンドはまたさげんでみました。

「ねえ、ルーつたら！ 信じてあげなくてごめんよ。ずうつときみが正しかつたんだってわかつたよ。出てこいよ。仲直りしよう。」

やはり返事はありません。

エドマンドはひとりごとを言いました。

「女の子つてのは、これだからな。どつかでむくれていて、ゆるしてやるもんですかつて思っているんだな。」

エドマンドは、もう一度あたりを見まわしました。あまりぞつとしないところだからうちに帰ろうと心に決めかけたとき、森のずつとおくから、シャンシャンと鈴の音が聞こえてきました。耳をすましているうちに音はどんどん近づいてきて、ついに二頭のトナカイに引かれたそりが、すうつと目の前にあらわれました。

トナカイは、がっしりした小馬ほど大きく、その毛は雪でさえかなわないくらいまっ白でした。枝分かれしている角は金ぴかで、朝日をあびて、まるで燃え立つようにかがやいていました。そりを引くために体につけたベルトは深紅の革でできていて、ずらりと鈴がついていました。

そりに乗ったトナカイの御者は、太ったこびとで、立ちあがっても一メートルもなさそうでした。こびとは、ホッキョクグマの毛皮を身にまとい、てっぺんから長い金色のふさかざりが一本ぶらさがっている赤い頭巾をかぶっていました。ひざをおおいかくすほど大きなひげは、ひざかけのかわりになっていました。しかし、こびとのうしろ、そりのまんなかにあるずっと高い席にすわっていたのは、まったく感じのちがう人でした。

それは、エドマンドが見たことのあるどんな女性よりも背の高い、りっぱそうな女の人でした。

その人は、やはり白い毛皮をのどもとまで身にまとい、右手にはすらりと長い金色の杖を持ち、頭には金色の冠をいただいていました。その顔は白く——単に青白いのではなく、その白さといったら、雪か、紙か、ケーキを飾る砂糖のようで、ただ、くちびるだけはまっ赤でした。高慢で冷たくきびしいところをのぞけば、美しい顔でした。



鈴^{すず}をシャンシャンと鳴^ならし、こびとがむちをびしりと打ち^うち、そりが雪^{ゆき}をはねあげながらエドマンドの前^{まえ}へすべりこんでくるようすは、なかなかの見^みものでした。

「とまれ！」

女^{おんな}の人が言^いい、こびとがトナカイをあまりにするどく引^ひっぱったので、トナカイたちはもう少^{すこ}しでしりもちをついてしまうところでした。それから、体^{からだ}を立て直^たし、くつわをかんだり、ブルルと鼻息^{はないき}をたてたりして立^たっていました。こおりつくような空^{くう}気のなかで鼻^{はな}からふき出^だされる息^{いき}は、まるで煙^{けむり}のように見^みえました。

「して、そのほうは、何者^{なにもの}か？」

女^{おんな}の人は、エドマンドをじろりと見^みて言^いいました。

「ぼく、あの、な、名前はエドマンドです。」

エドマンドはかなりどぎまぎして言いました。にらまれてぞつとしたのです。

女の人は顔をしかめると、

「それが女王への口のききかたか」

と、さつきよりもきびしい顔つきで言いました。

「失礼いたしました、女王陛下、ぞんじあげなかったものですから。」

「ナルニアの女王を知らぬと？」女の人はさげびました。「ふん！ 今後は知らぬとは言わせぬ。だが、もう一度聞く——そのほうは、何

者か？」

「ごめんなさい、陛下」と、エドマンド。「どういふことでしょうか。ぼくは学校に通っていて——えっと、通っていたんですが——今は

夏休みなんです。」

4

ターキツシュ・デイルライト

「だから、おまえは、なんなのだ？」と、女王^{じょおう}はふたたびたずねました。「大き^{おお}くなりすぎたこびとがひげを切り落^おとしたのか？」
「いえ、陛下^{へいか}」と、エドマンド。「ひげなんか生^はえたことはありません。ぼくは子どもです。」

「子ども！ アダム^このむすこということか？」

エドマンドはなにと言^いわずにじつと立^たっていました。あんまりにも頭^{あたま}がこんがらがってしまつて、質^{しつもん}問^いの意味^みがわからなかったのです。
「なんにせよ、ばかであることはわかつた。はきはきと答^{こた}えよ。さもなければ、怒^{おこ}るぞ。そちは人間^{にんげん}か？」

「はい、陛下^{へいか}」と、エドマンド。

「どのようにして、わが領土^{りょうど}に入^{はい}りこんだ？」

「あのう、陛下^{へいか}、洋服^{ようふく}だんすから来^きました。」

「洋服^{ようふく}だんす？ どういうことだ？」

「あの——とびらをあげたら、ここに来^きてたんです、陛下^{へいか}。」

「は！」

女王^{じょおう}は声^{こえ}をあげると、エドマンドに、というよりは自分^{じぶん}にむかつて言^いいました。

「とびら、とな。人間界にんげんかいからのとびら、とな！　そのようなことを聞いたことがある。これで、なにもかもだいなしになるかもしれん。だが、こいつはひとりきり。しかも、わけなくあしらえそうだ。」

そう言いながら女王じよおうは立ちあがって、エドマンドの顔かおを燃えるような目めでじつと見つめました。同時に女王じよおうは、杖つえを高くかけました。エドマンドは、女王じよおうがなにかおそろしいことをするのだとわかりましたが、どうにも動くことができません。まさにエドマンドがもうだめだとあきらめたそのとき、女王じよおうはふと考えかんがを変えたように見えました。

「かわいいそうな子ね。」

女王じよおうは打うって変かわった声色こわいろで言いました。

「ずいぶんと寒さむそうだったこと！　いらつしやい。わたくしといつしよに、そりにすわりなさい。マントをかけてあげますよ。お話はなししましよう。」

エドマンドは、この人ひとのそばにすわりたいとは少しも思おもいませんでしたが、いやだとも言いえませんでしたので、そりにあがって女王じよおうの足もとにすわりました。

すると女王じよおうは、毛皮けがわのマントでエドマンドの体からだをすっぽりくるんでくれました。

「なにかあたたかい飲み物ものはいかがかしら？」

「ええ、おねがいします、陛下へいか。」

エドマンドは、歯はをがちがちさせながら言いました。

女王じよおうは包つつみのどこからか、銅どうでできているように見える、とても小さなびんを取り出だしました。それから、腕うでをのばして、びんからほんの一いってき、そりのわきの雪ゆきの上うへにしずくをたらししました。

一瞬いっしゆん、そのしずくが空中くうちゆうでダイヤのようにかがやくのを、エドマンドは見みました。

でも、それが雪にふれた瞬間、シューと音がして、宝石がちりばめられたコップがたちのぼる湯気のなかにあらわれました。なかには、なにかがいつぱい入っています。こびとはきつとそれを取りあげ、おじぎをしてニヤリと笑みをうかべてエドマンドに手わたしました。あまり気持ちのよい笑顔ではありませんでした。

そのあたたかい飲み物をすすりはじめると、エドマンドはずいぶんおちつきました。今まで味わったことのないような、ふんわりと泡だった、とてもあまいもので、足先まであたたまりました。

しばらくして、女王が言いました。

「なにも食べないで、飲んでばかりというのもつまらないわね、アダムのむすこさん。なにがいちばん食べたい？」
「ターキッシュ・デライトをおねがいます、陛下。」

エドマンドは言いました。（ターキッシュ・デライトというのは、もちもちとした、トルコのあまい砂糖菓子です。）

女王がもう一てき、びんから雪の上にたらすと、またたくまに、緑の絹のリボンがかかった丸い箱が出てきました。

あけてみると、最高級のターキッシュ・デライトがぎっしりつまっています。どれも、あまくて、なかまでふんわりして、エドマンドはこんなにおいしいものを食べたことはありませんでした。すっかり体があたたまって、とても気持ちがよくなりました。



エドマンドが食べているあいだ、女王は質問をしつづけました。はじめのうちは、エドマンドは口にもものが入っているのにお話するのは失礼だということを忘れないようにしていたのですが、やがてそれも忘れて、ターキッシュ・デライトをほおばれるだけほおばれることに夢中になり、食べれば食べるほどもっと食べたくなり、どうして女王がそんなに根ほり葉ほりたずねるのか考えてみることにすらしませんでした。

こうして、女王は聞き出したのです——エドマンドには兄がひとり、姉がひとり、妹がひとりいること、そして妹はすでにナルニアに来てフオーンと出会ったこと、それから、四人の兄弟姉妹以外だれもナルニアのことを知らないことを。

女王は、とくに兄弟姉妹が四人であることに興味をもったようで、なにかにつけては、そのことをたずねました。

「本当に、あなたたちは、ちょうど四人なのね？ アダムのお兄さんとお姉さんと妹さんにとっても会ってみたいわ。ここに連れてきてくれない？」

そして、エドマンドは、ターキッシュ・デイトを口いっぱいにほおびながら、こう答えた。

「ええ、さっき言ったとおりです。」

「陛下」と、つけくわえることも、エドマンドは忘れたのですが、女王はもはや気にしていないようでした。ついにターキッシュ・デイトを食いつくしてしまつて、エドマンドはからっぽの箱をじつと見つめ、女王が「もつとほしい？」と、たずねてくれないかとねがいました。

たぶん女王はエドマンドの考えていることぐらいわかっていたのでしよう。

だつて、エドマンドは知りませんでした、これは魔法のターキッシュ・デイトであることを女王はよく知っていたからです。いつたん食べてしまうと、もつともつとほしくなつてとまらなくなり、食べていいとなつたら、いつまでも食いつづけて最後には死んでしまうという魔法のお菓子なのです。

でも、女王は、それ以上くれませんでした。そのかわり、こう言つたのです。

「アダムのお兄さん、わたくし、あなたのお兄さんとお姉さんと妹さんにとっても会ってみたいわ。ここに連れてきてくれない？」

「いいですよ。」

エドマンドは、からっぽの箱をまだ見つめながら言いました。

「もどつてきてくれたら——もちろん、みんなをつれてきたらということよ——そしたら、またターキッシュ・デイトをあげましょう。」

今はだめ。この魔法は一度きりなの。わたくしの館だと、そうではないけれど。」

「これから、おたくにうかがうわけにはいかないんですか？」と、エドマンド。

はじめてそりに乗ったときは、どこか知らないところへつれていかれて、もう二度ともどつてこれないのではないかとこわかったのに、今は、こわかったことさえ忘れていました。

「すてきなところよ、わたくしの館は」と、女王。「きつと気に入るわ。ターキッシュ・デイトでいっぱいのお部屋がいくつもあるの。それに、わたくしには子どもがいないから、すてきな男の子がほしいの。王子として育てて、わたくしが死んだらナルニアの王さまにした。王子になったら、金の冠を頭にいただいて、一日じゅうターキッシュ・デイトが食べほうだいよ。あなたみたいにかしこくて、かつこいい子には会ったことがないわ。できたら、あなたに王子になってほしい。いつか、ほかのみんなをつれてきてくれたら、ね。」

「今じゃいけないのですか。」

エドマンドの顔はすっかり赤くほてつていて、口も指もべとべとでした。女王がどう言おうと、かしこそうにも、かつこよきそうにも見えませんでした。

「あら、今あなたをつれていってしまったら、あなたのお兄さんやお姉さんや妹さんに会えなくなってしまうじゃない。あなたのすてきなきょうだいにとつても会いたい。あなたは王子さまになって——いつかは王さまになる。それはわかったわね。でも、宮廷人や貴族も必要でしょ。あなたのお兄さんを公爵にして、姉妹を公爵夫人にしてあげましょう。」

「あんなやつら、たいしたことありません。それに、どっちにしろ、いつだつてつれてこられます。」

「ああ、でもいったんわたくしの館に入ってしまうと、みんなのことを忘れてしまうかもしれない。あんまり楽しくて、わざわざ呼びに行くのがいやになってしまうわ。だから、今は、自分の国にもどつて、あらためてまたいらつしやい、みんなといっしょにね、わかったわね。みんなといっしょじゃなきゃ、もどつてきちやだめですよ。」

「でも、自分の国への帰りかたがわかりません。」
エドマンドがべそをかくと、女王が答えました。

「かんたんよ。あの街灯が見える？」

女王は杖をあげて指しました。エドマンドはふりかえって、ルーシーがフォーンと出会ったまさにあの街灯を見ました。

「あそこをこえて先へ行けば、人間界へもどれます。こんどは、反対側をぐらんさい。」

女王は逆の方角を指しました。

森の上のほうにふたつの小さな丘があるのがわかりますか。」

「あ、はい」と、エドマンド。

「わたくしの館は、あのふたつの丘のあいだにあります。ですから、こんど来るときは、街灯を見つけてから、あのふたつの丘をさがして、

森をまっすぐ歩いてくればいいのです。でも忘れないで——みんなをつれてこなければだめですよ。ひとりで来たりしたら、とても怒りま

すからね。」

「がんばります。」

「それから、みんなには、わたくしのことは話さなくてよろしい。わたくしたちふたりだけの秘密にしておいたほうがおもしろいでしょう？

おどろかせるといいわ。ただ、だまってみんなをふたつの丘へつれてきなさい。あなたみたいなかしこい子なら、なにか言いわけを

考え出せるでしょう。みんなでわたくしの館まで来たら、『ここにはだれが住んでいるのかなあ』とかなんとか言えばよろしい。それがい

ちばんです。妹さんがフォーンに会ったのなら、わたくしについてへんな話を耳にしているかもしれないけれど——わたくしのところへ来

たくなるようないやな話をね。フォーンっていうのは、あることないこと言いますからね、さて——」

「どうかおねがいです」と、エドマンドがだしぬけに言いました。「家に帰るとちゅうで食べるターキッシュ・デイルイトをひとつだけでも

「ええませんか？」

「だめ、だめ」と、女王は笑いだしました。「つぎのときまで、がまんしなきや。」

そう話しながら女王はこびとにそりを出すように合図しましたが、そりでみるみる遠ざかっていきながら、女王はエドマンドに手をふつてさけびました。

「またこんどね！ またこんど！ 忘れないで。早くいらつしやい。」
エドマンドが、まだそりのあとをじつと見つめていると、だれかが自分の名前を呼ぶのが聞こえました。あたりを見まわしてみると、森の別のところからルーシーがこちらへやってきます。

「ああ、エドマンド！ じゃあ、あなたもここに入ってきたのね！ すばらしいでしょ？ さあ、これで――」

「わかったよ。きみの言うとおりで、あれはやっぱり魔法のたんすだった。なんだったら、ごめんなさいって言うってもいいよ。でも、いつたい今までどこにいたんだい？ あちこちさがしたのに。」

「あなたも来ているってわかってたら待ってたわよ。」

ルーシーはあまりにうれしくて興奮していたので、エドマンドの話しかたがぶつきらばうで、その顔がひどく赤らんでおかしなことに気がつきませんでした。

「あたしね、今フォーンのタムナスさんのところでお昼をいただいていたのよ。あのひと、元気だったわ。あたしをにがしたのに、白の魔女からひどい目にあわされなかったんですって。だから、魔女には見つからなかったんじゃないか、心配したけどだいじょうぶじゃないかっておつしやってたわ。」

「白の魔女だって？」と、エドマンド。「だれ、それ？」

「ものすごくひどい人」と、ルーシー。「自分のことをナルニアの女王って呼んでるんだけど、ちつとも本当の女王なんかじゃないの。」

フオーンたちも、木の精ドリユアスたちも泉の精ナーイアスたちも、こびとたちも動物たちも——少なくともいい人たちはみんな——あの人をきらっているわ。でも、あの人はみんなを石に変えたりして、なんでもひどいことができるの。しかも、魔法をかけてナルニアをずっと冬にしてしまったのよ——いつまでも冬なのにクリスマスは来ないの。トナカイに引かせたそりを乗りまわして、片手に杖を持って、頭には王冠をいただいているの。」

あまいものを食べすぎてとうに気分が悪くなっていたエドマンドは、たった今お友だちになった女の人が危険な魔女であるとわかって、ますますいやな気分になりました。それでも、やっぱり、あのターキッシュ・デイルイトをなによりももう一度食べたくてしかたなかったのです。

「そんな白の魔女の話、だれから聞いたんだい？」

「フオーンのタムナスさんよ。」

「フオーンの言うことなんか、あんまりあてにならないよ。」

エドマンドは、ルーシーよりもフオーンのことを知っているかのように言いました。

「そんなこと、だれが言ってるの？」

「みんな知っているとき。だれにでも聞いてごらん。でも、こんな雪のなかにつっ立っているのはおもしろくないね。うちに帰ろう。」

「そうね、帰りましょう」と、ルーシー。「ああ、エドマンド。あなたも来てくれて、あたし、とってもうれしい。こんどこそ、みんな信じてくれなくっちゃね、ふたりも来たんだから。楽しくなるわあ！」

でも、エドマンドはひそかに、自分にとってはルーシーほど楽しいことにはならないだろうと思っていました。

みんなの前でルーシーが正しかったことを、みとめなければならぬでしょうし、みんなはきつとフオーンや動物たちの味方をするでしょう。

でも、エドマンドは、すでに半分以上、魔女の側についているのです。みんなでナルニアのことを話すようになったら、なんと言ったらいいのでしょうか。どうやって秘密をまもったらいのでしょうか。

そうこうするうちに、ふたりはかなりの道のりを歩いてきていました。すると、ふつと、木々ではなくコートにかこまれていると感じ、つぎの瞬間、ふたりは、あのがらんとした部屋のたんすの外に立っていました。

「あら、ひどい顔色よ、エドマンド。気分でも悪いの？」

「だいじょうぶ」

と、エドマンドは答えましたが、だいじょうぶではありませんでした。とても気分が悪かったのです。

「じゃあ、行きましょ。みんなを見つけてましょ。話したいことが、いっぱい！ みんなでいつしよにこのなかに入ったら、どんなすばらしい冒険になるかしら。」

とびらのこちらにもどつてみると

まだかくれんぼがつづいていたので、エドマンドとルーシーがほかのふたりを^みつけるまで少し^{すこ}時間がかかりました。でも、ついにみんながそろったとき（それは、たまたま、よろいかぶとのある^{ほそなが}細長い部屋^{へや}ででした）、ルーシーがせきを切^きったように話^{はな}しはじめました。

「ピーター！ スーザン！ ほんとなのよ。エドマンドも^み見たんだから。たんすを^{とお}通つて行ける国^{くに}がほんとにあるの。ふたりともなかに入^{はい}ったの。エドマンドとあたし、森^{もり}のなかでばったり会^あつたのよ。さあ、エドマンド、ふたりに話^{はな}してよ。」

「どういふことだい、エド？」と、ピーターがたずねました。

さて、ここからこの物語^{ものがたり}のなかでいちばんいやらしいところにさしかかります。

それまでエドマンドは気分^{きぶん}が悪^{わる}くて、むつとしていて、ルーシーが正^{ただ}しかったことにいらいらしていました。が、じつはどうしたらいいのかまだ心^{こころ}を決^きめかねていました。ピーターからいきなりこう問^とわれて、エドマンドはむらむらつと、思^{おも}いもよらない、ひきょうなことをしてしまつたのです。

ルーシーをうらぎることにしたのです。

「話^{はな}して、エド」と、スーザンが言^いいました。

するとエドマンドは、ルーシーよりもずっと年上であるかのような、たいそうえらそうな顔つきをすると（本当は、たったひとつちがいのですが）、ふつと鼻で笑って言いました。

「うん、そう、ルーシーとぼくは遊んでたんだ——たんすのなかに国があるってお話がほんとだってことにしてね。もちろん、じょうだんさ。そんなの、ほんとにあるわけないもん。」

かわいいそうなルーシーは、エドマンドをちらりと見ると、部屋からかけだしていつてしまいました。

どんどんいやな人になってきていたエドマンドは、してやったりと思つて、すぐにこうつづけました。

「ほら、また出ていつちやつた。どうしたんだろうね？　ちっちゃい子はこれだからこまるよ、いつだつて——」

ピーターがつかみかからんばかりにエドマンドのほうにむき直つてどなりつけました。

「おい、だまれ！　ルーがたんすについてわけのわからないことを言いはじめてから、おまえ、ずいぶんルーにひどいことを言いつづけてるけど、こんどは、ルーといっしょになつてごっこ遊びをやったあげく、知らんぷりをするわけか。ただ、いじわるしてやろうと思つてそんなことしたんだろうな。」



エドマンドは、たいそうめんくらって言いました。

「だって、そんなのあるはずないじゃないか。」

「もちろん、あるはずないことさ」と、ピーター。「まさにそこが問題なんだ。ルーは、ぼくらとこのやしきに来るまで完ぺきにふつうだった。ところが、ここに来てからというもの、頭がおかしくなっちゃったか、さもないや、とんでもないや、そつきになっちゃった。けど、どっちにしろ、おまえがルーをからかって、はやしたてたかと思うと、こんどはいつしよになつて調子を合わせるっていうのは、いったいどういうつもりなんだ？」

「だって——ぼくは——ぼくは——考えたんだけど——」

エドマンドは、なんと言つていいのかわかりませんでした。

「おまえはなんにも考えちゃいないのさ」と、ピーター。「いじわるしたただけだ。おまえはいつも小さい子にひどいことをする。これまでも学校でそうしていたのを見たぞ。」

「もうやめて」と、スーザン。「あなたたちふたりでけんかを始めたってなんにもならないわ。ルーシーをさがしに行きましょう。」

ずいぶんあちこちさがしてから、ようやく見つけたとき、ルーシーがずっと泣いていたのはだれの目にも明らかでした。それもしかたのないことです。みんなでルーシーにいろいろと言葉をかけてあげましたが、ルーシーはがんとして自分の話を曲げずに、こう言いました。

「みんながどう思おうと関係ないわ。なんて言われようと気にしない。教授に告げ口したっていいし、お母さんに手紙を書いたっていいし、なんでも好きにすればいいわ。あたし、あそこでフオーンに会ったんだから——そのまま、あそこにいればよかった。みんな、ひどいわ、ひどい！」

おもしろくない晩でした。ルーシーは落ちこんでいるし、エドマンドはこんなはずじゃなかったと感じはじめていました。上のふたりは、ルーシーがおかしくなってしまったと本気で考えはじめていて、ルーシーが寝てからずいぶんあとに廊下でひそひそと立ち話をしたのでし

た。

その結果、つぎの日の朝、これは本当に教授になにもかもお話ししなければならぬということになりました。

「先生が、ルーが本当におかしくなつたとお考えになるなら、お父さんに手紙を書いてくださるだろう」と、ピーターは言いました。「もう、ぼくたちの手には負えないよ、これは。」

そこで、ピーターとスーザンは書斎へ行つてドアをノックしました。教授は「お入り」とおっしゃつて、立ちあがつて、ふたりにいすをすすめ、なんでも話を聞こうとおっしゃつてくれました。

そして、教授は顔の前で両手の指先をぴたりと合わせてすわったまま、じつと耳をかたむけ、ふたりがすっかり話しおえるまでいつさい口をはさみませんでした。そのあと、ずいぶん長いことだまつていらつしやいましたが、やがて、せきばらいをなさると、ピーターもスーザンも夢にも思わなかつたことをおっしゃいました。

「どうして、妹さんの話が本当ではないとわかるのかね？」と、おたずねになつたのです。

「あの、でも——」

スーザンが口をひらきましたが、そこで言いよどみました。

教授のお顔のようすから、本気でそうおたずねになっていることがわかったからです。
そこで、スーザンは気をひきしめてこう言いました。

「でも、エドマンドは、ふたりでごっこ遊びをしていたただけだと言ったんです。」



「そこだね」と、教授^{きょうじゆ}。「そこはたしかにぜひともよく考^{かん}えねばならん。慎重^{しんちやうかんが}に考^{かんが}えることが必要^{ひつよう}だ。たとえば——こう質^{しつもん}問^{もん}してもよければ——きみたちのこれまでの経^{けい}験^{けん}から、弟^{おとうと}さんと妹^{いもうと}さんのどちらがより信^{しん}頼^{らい}できると思^{おも}うかね？　つまり、どちらが、よりうそをつかないか？」

「そこがまさにへんなところなんです、先生^{せんせい}」と、ピーター。「こんなことにならなければ、いつだつてうそをつかないのはルーシーだつたんですから。」

「きみはどう思^{おも}うかね？」

教授^{きょうじゆ}はスーザンのほうをむきました。

「あの」と、スーザン。「ふつうなら、私^{わたし}もピーターと同じ^{おな}ように答^{こた}えるところですが、こんなことはありえないと思^{おも}うので——つまり、森^{もり}だとか、フオーンだとか、そんなこと。」

「それはどうだろうか」と、教授^{きょうじゆ}。「いつも信^{しん}頼^{らい}できると思^{おも}つていた人^{ひと}をうそつき呼^よばわりすることは、とても深刻^{しんこく}なことだ。じつに深刻^{しんこく}なことだよ。」

「うそをついてるわけじゃないと思^{おも}うんです」と、スーザン。「どこかおかしくなつてしまつたんじゃないか、と。」

「頭^{あたま}がおかしくなつたのかもしれないということかね？」

教授^{きょうじゆ}は、たいへん冷^{れい}静^{せい}におつしやいました。

「ああ、それなら心^{しん}配^{ぱい}はいらない。あの子^このようすを見^みても、話^{はなし}をしても、あの子^この頭^{あたま}がまともなことは明^{あき}らかだ。」

「でも、それなら——」

と、スーザンは言^いいかけてだまりました。大人^{おとな}の人^{ひと}がこんなふう^{はなし}に話^{はなし}をするなんて思^{おも}つてもいかなかったので、どう考^{かんが}えたらよいのかわからなくなつたのです。

「論理だよ！」

教授は、なかばひとりごとのようにおっしゃいました。

「最近の学校じゃどうして論理を教えんのだろうかね？ 可能性は三つしかない。妹さんがうそをついているか、おかしくなったか、本当のことを言っているか、だ。妹さんがうそを言わないことは、きみたちが知っており、頭がちゃんとしていることは明らかだ。ということ
は、なにかほかの証拠が出てこないかぎり、本当のことを言っていると考えざるをえない。」

スーザンは教授の顔をまじまじと見つめ、その表情からじょうだんをおっしゃっているのではないと確信しました。

「でも、どうしてそんなことがありますか、先生？」と、ピーター。

「なぜ、そんなことを言う？」と、教授。

「だって、第一に」と、ピーター。「本当だとしたら、どうしてみんな、あの洋服だんすのところに行っても、そんな国なんか見つけられないんでしょう？ だって、みんなで見たときは、なにもなかったんですから。ルーシーだって、そのときは、ないってみとめました。」

「だから、どうだと言うんだね？」と、教授。

「だって、先生、もし本当なら、いつだってそれはそこにあるわけでしょう。」

「そうかね？」

教授のお言葉に、ピーターはなんといいのかすっかりわからなくなりました。

「でも、そんな時間はありませんでした」と、スーザン。「たえそんなところがあつたとしても、ルーシーがどこかに出かけてもどつてくる時間なんてなかったんです。私たちが部屋から出たその瞬間に、私たちを追いかけてきたんですから。一分もたっていないませんでした。それなのに、あの子は何時間もいなかったふりをしたんです。」

「それこそまさに、妹さんの話が本当かもしれないと思わせるところだね」と、教授。「もしこのやしきにどこか別世界に通じるドアがあ

るとしたら（それにいいかい、このやしきはとてもふしぎなやしきで、わしだつてあまりよくは知らんのだよ）——そして、もし、かりにだよ、妹さんが別世界に行つたとしたら、その別世界にはまったく別の時間が流れていたとしてもおかしくはなからう。だから、そこにどんなに長いこといても、こちらの時間にしたら、これっぽっちもかからんというわけだ。いっぽう、あの子の年で、そんな考えを自分で思いつける女の子はそうはおらんだらう。もしごっこ遊びをしていたのだとすれば、それなりに長い時間かくれてから、出てきてその話をしただらうよ。」

「でも、先生、本当に別世界がありうるとおっしゃるんですか」と、ピーター。「この家のどこにでも、ついその角を曲がつたあたりに——みたいな感じで？」

「それが最も可能性が高い。」

教授はそうおっしゃつて、メガネをはずしてふきながら、ぶつぶつとひとりごとをつぶやかれました。

「まったく、最近の学校じゃ、なにを教えているのやら。」

「でも、どうしたらいいんでしょう？」

スーザンがたずねました。会話が要点からずればじめてるように感じたのです。

教授はふつと顔をあげてきびしい表情でおっしゃいました。

「おじょうさん。だれもまだ提案したことのない計画がひとつあつて、それは試してみる価値がある。」

「为什么呢？」と、スーザン。

「人のことはほつといてやりなさいということだ。」

それが、三人の会話のおわりとなりました。

この話し合いのあと、ルーシーはたいへんすごしやすくなりました。ピーターは、エドマンドが妹にちよつかいを出さないように気をつ

けましたし、ルーシーにしても、また、ほかのだれにしても、洋服だんすを話題にしたいとはぜんぜん思いませんでした。ふれてはいけない話題となったわけです。

ですから、しばらくのあいだ、冒険はすっかりおわってしまったように思えました。でも、そうではなかったのです。

この教授のおやしきは——教授ご自身さえよくごぞんじなかったわけですが——とても古いことで有名で、イングランドじゅうの人がやってきては見せてくれとたのむほどでした。ガイドブックにのっていて、歴史書にも書かれているような家だったのです。

それもそのはずで、この家にまつわるお話はいろいろあつて、今こうしてお話しているよりもずっとふしぎなお話さえあつたのです。観光客の一行が到着して、家を見せてくれと言つてくると、教授はいつもおゆるしになり、家政婦のマクリーデイさんが家のなかを案内して、絵であるとか、よろいかぶとであるとか、図書室にあるめずらしい本であるとかの説明をしました。

マクリーデイさんは子ども好きではなく、お客さんに家のなかを順々に説明している最中にじやまされたりするのがいやで、子どもたちが来たあくる日の朝に（ほかのたくさんの注意といつしよに）、「私がお客さんをご案内しているときは、じやまをしないように気をつけてくださいよ」と、スーザンとピーターに念をおしていたのでした。

「まるで、ぼくたちのうちのだれかが、午前中の半分をぼうにふつて、見知らぬ大人たちのあとをついてまわりたがつてゐるみたいな言いかたじゃないか！」

エドマンドが文句を言い、ほかの三人も同感でした。これが、二度めの冒険のきつかけとなりました。

三人の話し合いから、いく日かたつたある朝のことです。ピーターとエドマンドが、よろいかぶとをながめながら、これつてばらばらにできるかなあと考えていたとき、女の子たちがふたりのいる部屋にかけこんできて言つたのです。

「気をつけて！ マクリーデイさんと団体さんがやってくるわよ。」

「ダッシュだ！」

ピーターが言^いうと、四人^{にん}はその部屋^{へや}のいちばんはしのドアから飛^とび出^だしました。ところが、緑^{みどり}の部屋^{へや}をぬけて図書室^{としよしつ}に入^{はい}ったところで、だしぬけに前^{まえ}のほうから声^{こえ}が聞^きこえてきました。マクリーデイさんが観光客^{かんこうきやく}の一行^{いっこう}をつれて裏階段^{うらかいだん}からあがつてきたにちがいありません。前階段^{まえかいだん}からあがつてくるとばかり思^{おも}っていたのに、そうではなかったのです。

そのあとは、みんなの頭^{あたま}がおかしくなってしまったのか、それともマクリーデイさんがみんなをつかまえようとしていたのか、あるいはなにかこのおやしきの魔法^{まほう}がはたらきだしてみんなをナルニアへ送^{おく}りこもうとしていたのか、わけのわからないことが起^おきました。どこに行^いつてもマクリーデイさんがあとからついてくるではありませんか。

ついにスーザンが言^いいました。

「ああ、もう、あの観光客^{かんこうきやく}つたら！　ここよ——あの人^{ひと}たちが通^{とお}りすぎるまで、洋服^{ようふく}だんすの部屋^{へや}に入^{はい}りましょう。ここまでは追^おつてこないわ。」

ところが、部屋^{へや}に入^{はい}ったとたん、廊下^{ろうか}から声^{こえ}が聞^きこえて——しかも、だれかがドアをがちやがちやいわせました。そして、ドアの取^とっ手^てが回^{まわ}るのが見^みえたのです。

「急^{いそ}げ！　ここしかない。」

ピーターは、たんすをパツとあけました。四人^{にん}ともそのなかへどつとなだれこみ、はあはあ息^{いき}を切^きらしながらその暗^{くら}やみにすわりました。ピーターはとびらを閉^とじましたが、ぴつたりと閉^とじたりはしませんでした。なぜなら、もちろん、ピーターは覚^{おぼ}えていたのです。きちんとしている人^{ひと}なら当然^{とうぜん}覚^{おぼ}えているように、たんすのなかに自分^{じぶん}を閉^とじこめたりしてはいけないってことをね。

やがてスーザンが、言^いいました。

「マクリーデイさん、早^{はや}くあの人^{ひと}たちをつれてつてくれないかしら。すつごく、きゅうくつになってきたわ。」

「おまけに、しょうのうのにおいで鼻^{はな}が曲^まがりそうだ」と、エドマンド。

「コートのポケットにいつぱいつまってるんじゃないかしら」と、スーザン。「虫^{むし}がつかないように。」

「ぼくの背^せ中^{なか}を、なんか、つつついてる」と、ピーター。

「それに、寒^{さむ}くない？」と、スーザン。

「そういえば寒^{さむ}いね。それに、ちえつ、ぬれてるぞ。どうなってるだ、ここ？　ぼく、なんだかぬれてるところにすわってる。どんどんびしょびしょになつてくるよ。」

ピーターは、なんとか立^たちあがろうとしました。

「出^でようよ。みんな、行^いっちゃったよ」と、エドマンド。

「あれーえ！」

急にスーザンが声^{こえ}をあげたので、どうしたのと、みんなはたずねました。

「私^{わたし}がもたれかかっているの、木^きよ」と、スーザン。「それに、見て！ 明^あかりがついたわ——むこうのほうに。」

「うわっ、ほんとだ」と、ピーター。「それにござんよ、あそこ——あそこも。あたり一面^{いちめん}に木^きが生^はえてるよ。しかも、このぬれてるのは、雪^{ゆき}だ。結局^{けっきょく}、ルーシーの言^いった森^{もり}にみんなで来^きたってわけだ。」

もはや、まちがいつこありませんでした。

四人^{にん}の子^こどもたちは、目^めをばちくりさせて、冬^{ふゆ}の日^{にっ}光^{こう}をあびて立^たっていたのです。

みんなのうしろにはコートがハンガーにかかっている、目^めの前^{まえ}には雪^{ゆき}をかぶった木^き々^ぎがありました。

ピーターはすぐにルーシーのほうをふりかえりました。

「ルーのこと、信^{しん}じてあげられなくてごめん。謝^{あやま}るよ。仲^{なか}直^{なお}りのあくしゅ、してくれる？」

「もちろんよ。」

ルーシーはピーターとあくしゅしてあげました。

「それで、これからどうする？」と、スーザン。

「どうって？ 森^{もり}を探^{たん}検^{けん}しに行く^いに決^きまつてるじゃないか」と、ピーター。

「うわあ！ すごく寒^{さむ}い。あのコート、着^きない？」と、スーザンが足^{あし}ぶみをして言^いいました。

「ぼくたちのじゃないよ。」

ピーターが、どうかなあというふうに言^いいました。

「だれも気^きにしないわよ」と、スーザン。「この家^{いえ}の外^{そと}へ持^もち出^だそうってわけでもないし。たんすの外^{そと}に出^だすことにさえならないと思う^{おも}わ。」

「それは思^{おも}いつかなかったよ、スー」と、ピーター。「もちろん、言^いわれてみれば、そのとおりだ。もとあったところにもどしておけば、

だれもコートを失敬したなんて言えないもんね。それに、この国は、どこもかしこもたんすのなかにあるわけだし。」

みんなはただちにスーザンのとても気のきいた計画を実行しました。着てみると、コートはかなり大きすぎてかかとまであつたので、コートというよりは王さまのローブのように見えました。でも、ずっとあたたかくなりましたし、おたがい新しいかつこうが似合つていて、あたりのようすにもふさわしいように思えました。

「北極探検隊ほっきょくたんけんたいがここができるね」と、ルーシー。

「ごっこ遊びあそびなんかしなくたって、十分わくわくするよ。」

ピーターは、みんなより先に森のほうへ進みながら言いました。

頭の上あたま うえにはどんよりと黒っぽい雲がかかっていて、夜になる前にもっと雪が降りそうでした。

しばらくして、エドマンドが言いはじめました。

「ねえ、もっと左ひだりに行かなきゃだめなんじゃないかな、街灯のところへ行くんなら？」

自分がこんな森に来了ことなどないふりをしなければならぬことを、エドマンドはすっかり忘れていたのです。この言葉が口から出た

とたん、エドマンドは今まで自分がうそをついていたことがばれてしまったと気がつきました。

みんな、立ちどまり、エドマンドをじろりと見ました。

ピーターが、ぴゅーと口笛をふきました。

「やつぱりここに来てたんだな。あ那时候、ルーはここでおまえに会ったと言ったのに——それなのに、おまえはルーがうそを言っている

と言いい張はった。」

その場が、しーんと静まりかえりました。

「まったく、いじわるな人でなしの子どもの中なかでも、おまえは——」

ピーターは肩をすくめて、それっきりもうなにも言いませんでした。たしかに今さらなにを言ってもしかたなさそうでしたので、すぐに四人は旅をつづけました。でもエドマンドは、こつそり心のなかでつぶやいていたのでした。

「このしかえしはみんなにしてやるからな。すましやがつて、自分こそ正しいと思ってる気取り屋たちめ。」

スーザンができるだけ話題を変えようとして言いました。

「ところで、どこにむかつてるの？」

「ルーに先に歩いてもらったほうがいいね」と、ピーター。「ルーにはその資格があるもの。どこへつれていってくれる、ルー？」

「タムナスさんに会いに行くのはどうかな」と、ルーシー。「みんなにお話ししたすてきなフォーンだよ。」

みんなはこれに賛成して、元気よく足をあげて歩きだしました。

ルーシーは道案内がじょうずでした。最初は、道がわかるか不安だったのですが、こつちにあるへんてこなかつこうをした木とか、あつちにある切り株とか、つぎつぎに目印を思い出して、みんなを地面がでこぼこしているところまでつれていき、それから小さな谷を通つて、ついにタムナスさんのほら穴のまきに入り口のところまで案内できたのです。ところが、そこにはびっくりするようないひどいことが待ち受けていました。

入り口のドアは、ちようつがいからねじりとられていて、こなごなにされていました。ほら穴のなかは暗くて寒く、じとつとして、数日間だれもいなかった場所のにおいがしました。雪が戸口からふきこんで床につもっており、なにか黒いものとまざっていました。それはだんろにあつた木のもえかすや灰であることがわかりました。

どうやら、だれかが火のついたまきを部屋じゆうにけちらして、ふみ消したようです。陶器が床の上にこなごなに割れており、フォーンのお父さんの絵はナイフでずたずたに切りぎざまれています。



「こりや、かなりめちやめちやだな」と、エドマンド。「こんなところに来てもしようがなかったね。」

「これはなんだろう？」と、ピーターがしゃがんで言いました。

じゅうたんごとつらぬかれて床に釘づけにされていた紙に気がついたのです。

「なにか書いてある？」スーザンがたずねました。

「うん。書いてあるみたいだ」と、ピーター。「でも、この暗さじゃ読めないな。外に出よう。」

みんなは外に出て、ピーターがつぎのような言葉を読みあげるのを取りかこんで聞きました。

この家に以前住んでいたフォーンのタムナスは逮捕され、ナルニア国女王にしてケア・パラベル城主、ローン諸島の女帝などなどであるジェイディス陛下への反逆罪のかどで、および上記陛下の敵をかくまい、スパイを保護し、人間と交友をもったかどで、裁判を待つものである。

署名 秘密警察長官モーグリム

女王陛下万歳！

子どもたちはたがいに顔を見あわせました。

「この国が好きになれるか自信ないわ」と、スーザンが言いました。

「この女王つてのはだれだい、ルー？ 女王のこと、なにか知らないかい？」と、ピーター。

「ほんとの女王じゃないの。」ルーシーは答えました。「ひどい魔女なの。白の魔女。みんな——森に住むみんな——きらってるわ。この国全体に魔法をかけて、ずっと冬にしてしまったのに、クリスマスは来ないの。」

「ねえ、これ以上先に行かないほうがいいんじゃない？」と、スーザン。「だって、ここはそれほど安全でもないみたいだし、あんまり楽しそうなところでもないでしょ。それにどんどん寒くなってきたのに、食べる物、なんにももってこなかったじゃない？　おうちに帰ったほうがいいんじゃないかな？」

「ああ、でも、帰れないわ、帰れない。」ふいにルーシーが言いました。「わからない？　帰れないわよ、こんなことになってしまったんだもの。かわいそうなタムナスさんがこんな目にあつたのは、あたしのせいだもの。あたしを魔女からかくしてくれて、帰り道を教えてくれたの。女王の敵をかくまい、人間と交友をもつたっていうのは、そのことよ。あたしたち、タムナスさんを助けに行かなくちゃ。」

「あたしたちに、なにができるって言うんだい！」と、エドマンド。「食べる物もなんにもないっていうのにさ！」

「だまれ——おい！」と、まだエドマンドにとても腹をたてていたピーターが言いました。「スーザンはどう思う？」

「気は進まないけど、ルーの言うとおりね」と、スーザン。「これ以上進みたくはないし、こんなところに来なければよかったと思うけれど、そのなんとかさんのために、なんとかしてあげなきゃいけないと思うわ。つまり、そのフォーンのために。」

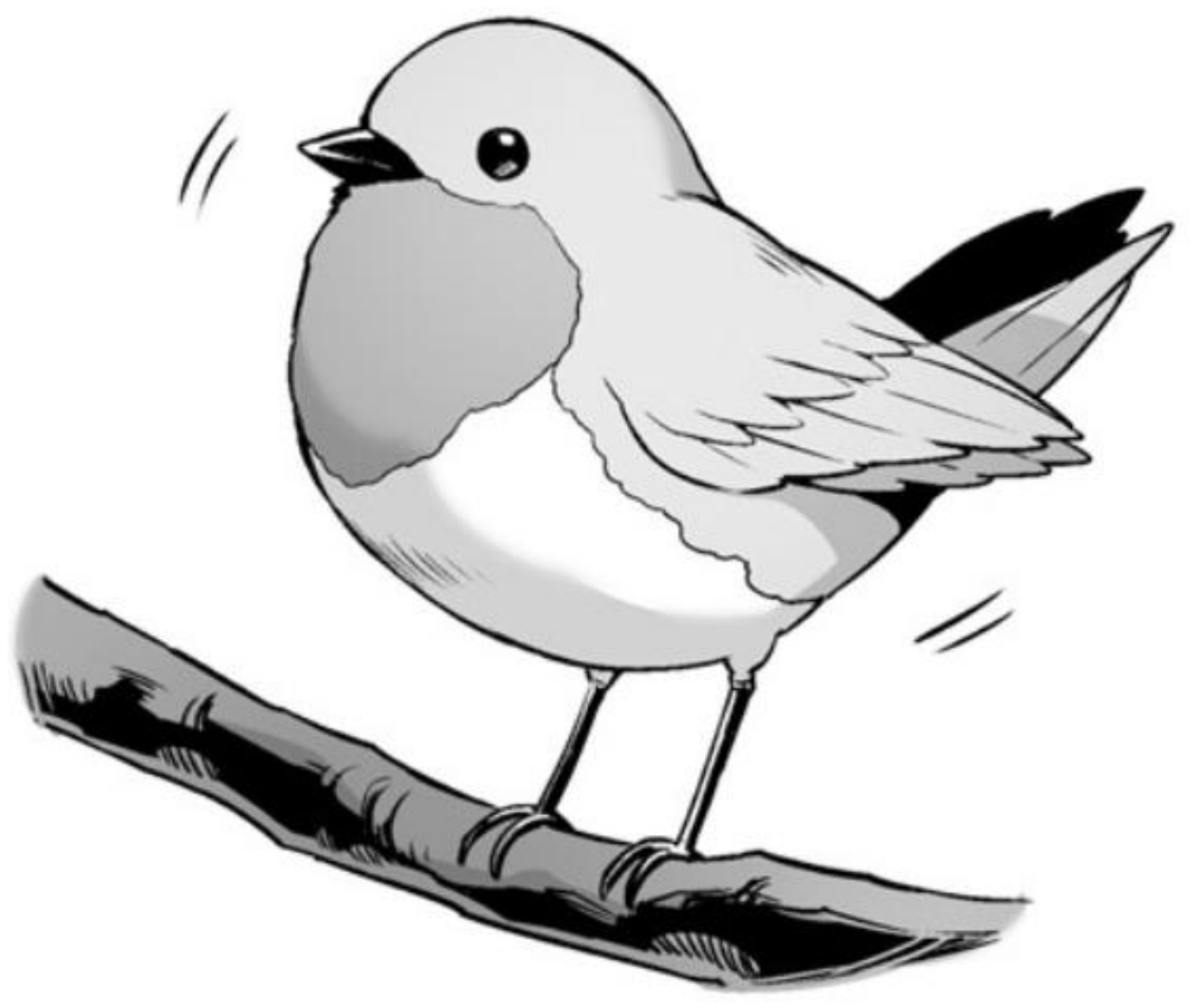
「ぼくもそう思う」と、ピーター。「食糧がないというのはたしかに問題で、いったんもどって食糧置き場からなにかもってきたいとも思いうけれど、一度この国を出てしまうと、またもどってこられるかわからないからね。先に進むしかないだろう。」

「そうね」と、ふたりの女の子が言いました。

「そのかわいそうなひとがどこにとらわれているのか、わかりさえすればなあ！」と、ピーター。

これからどうしたらいいだろうと、みんながまだ考えているときに、ルーシーが言いました。

「見て！　コマドリだわ、あんなに胸が赤い。小鳥なんて、ここで見るの、はじめてよ。そうだわ！　ナルニアじや、小鳥って話せるんじゃないかな！　あたしたちに、なにか言いたそうにしてるもの。」



そこでルーシーは、コマドリにむかって言いました。

「ねえ、教えてくれない？ フォーンのタムナスさんは、どこにつれていかれたの？」

話しかけながら、ルーシーは小鳥に一歩近づきました。小鳥はパツと飛びのきましたが、ただとなりの木の枝へうつただけでした。そこにとまって、みんなが話していたことがわかってるかのようになり、しげしげとみんなを見つめているのです。

四人の子どもたちは、思わず小鳥のほうに一歩、歩みよっていきました。するとコマドリはまたつぎの木までにげて、もう一度みんなをじつと見つめるのです。（こんなに赤い胸をして、明るい目をしたコマドリは、ほかにいないでしょう。）

「ねえ、思うんだけど、」と、ルーシー。「この小鳥、あたしたちについてこいって言っているんじゃないかしら。」

「だと思う」と、スーザン。「ピーターはどう思う？」

「まあ、ついていつてみようじゃないか」と、ピーターは答えました。

コマドリはすっかり事情をこころえていたようでした。木から木へと、いつも子どもたちの数メートル先を進みながら、みんながついてこられるくらいのところで待つていてくれるのです。こうして、小鳥は少しずつ丘の下の方へみんなをつれていきました。コマドリが枝にとまるたびに、雪がぱらぱらと枝から雨のように落ちました。やがて頭の上の雲が晴れて、冬の太陽が顔を出すと、あたり一面の雪がまぶしいほどきらきらかがやきました。

こんなふうにして三十分ほど、女の子ふたりが先頭に立つて歩いてきたところで、エドマンドがピーターに言いました。

「ねえ、いつまでもえらそうにするのをやめて、ぼくに口をきいてくれるのなら、いいこと教えてやってもいいよ。」

「なんだい？」ピーターはたずねました。

「しー！ 大きな声を出すなよ」と、エドマンド。「女の子たちをこわがらせちゃいけないからね。だけど、ぼくたちが今してることがどういうことか、わかってるの？」

「どういうことだ？」ピーターは、ささやき声にまで声を落として言いました。

「ぼくらがあとをついていつているあの鳥のこと、ぼくらはなんにも知らないだろ。あの鳥がどっちの味方か、どうやったらわかるんだい？ わなにおびきよせようとしているのかもしれないじゃないか？」

「ばか言うなよ。だって——コマドリっていうのは、ほら、どんなお話でも、いつだっていい鳥だよ。コマドリが悪いほうの味方ってことはないよ。」

「じゃあ、正しいほうってどっちだい？ フォーンが正しくて、女王が（そう、女王じゃなくて魔女だって話もあるけど）いい女王じゃなくて悪い魔女だってどうしてわかるんだい？ どっちがどっちか、ぼくたちには、なんにもわかつちやいないんだ。」

「フォーンは、ルーシーを助けてくれた。」

「フオーンがそう言ってるだけだろ。だけど、それがほんとだってどうしてわかるんだい？ それにさ、ここから家へどうやって帰ればいいのか、だれか知っている人はいるのかい？」

「しまった！」と、ピーター。「そいつは思いつかなかった。」

「そのうえ、夕ごはんにもありつけないだろうね」と、エドマンドは言いました。

7

ビーバー夫妻ふさいとの一日いちにち

男おとこの子たちこがうしろのほうでこそそこ言いあっていると、女おんなの子たちこがとつぜん「あつ！」と、さけんで立たちどまりました。「コマドリが！」ルーシーがさけびました。「コマドリが。飛とんでいっっちゃった。」そうなのです——飛とんでいって見えなくなってしまったのです。

「さあて、これからどうする？」エドマンドは「言いわんこつちやない」と言いわんばかりに。ピーターをちらりと見みました。

「しっ！ 見みて！」と、スーザン。

「なに？」と、ピーター。

「あそこ。なにかが木きのかげで動うごいたわ。左ひだりのほうへ。」

みんな、目めを皿さらのようにしてじつと見みながら、おちつかない気持きもちになっていました。

「ほら、また動うごいた。」スーザンがすぐに言いいました。

「さつきも見みえたよ」と、ピーター。「まだ、あそこにいるね。あの大きおおな木きのうしろにかくれてる。」

「なんなの？」

ルーシーが、びくついた声こえにならないよう、とてもがんばりながらたずねました。

「なんだかわからないけど、」と、ピーター。「ぼくらをさけている。見られたくないんだ。」

「おうちに帰りましょう」と、スーザン。

おうちに帰ろうとスーザンが言ったとたん、みんな心のなかで、あつと思いました。先ほどの章のおわりでエドマンドがピーターにささやいたことに気づいたのです。そう、みんなは道にまよってしまったのです。

「あれ、なんなのかな？」ルーシーがたずねました。

「そうね——動物みたいね。」

そう答えたスーザンが、こんどはさげびました。

「見て！ 見て！ 早く！ あそこよ。」

こんどこそはつきり見えました。毛でおおわれ、長いひげを生やした顔が、木のかげからこちらをのぞき見ていたのです。でもこんどは、すぐに引っこみませんでした。それどころか、その動物は、ちょうど人間が静かにと合図をするときのように、前足の指を一本くちびるにあてたのです。それから、ひよいと顔はまた消えてしまいました。子どもたちはみんな息をのんで立ちつくしました。

しばらくすると、この見なれぬ動物は木のかげから出てきて、だれかに見られてやしないかというように、きよろきよろとあたりを見まわしてから、「しー」と言つて、自分が立っている森のおく深いところへついてくるように手まねきすると、もう一度消えました。

「わかった」と、ピーター。「ビーバーだ。しつぽが見えた。」

「ついてこいつて言ってるわよ」と、スーザン。「しかも、音をたてるなつて。」

「そうだね」と、ピーター。「問題は、ぼくらがそうすべきかどうかということだ。どう思う、ルー？」

「いいビーバーだと思う」と、ルーシー。

「へえ、どうしてわかる？」と、エドマンド。

「ついていってみない？」と、スーザン。「だって、こんなところにつつ立ってたって、しょうがないし、私、お夕飯が食べたい。」
このときビーバーが、また木のかげからひよっこり顔を出して、いっしょけんめい手まねきしました。

「ようし」と、ピーター。「行ってみよう。みんな、はなれるな。かりに敵だとわかってても、相手はビーバー一匹だから、ぼくら四人なら、だいじょうぶなはずだ。」

そこで子どもたちはみんな一団となって木のところまで行つて、その裏にまわりこんでみると、そこにはちゃんとビーバーがいました。でも、あいかわらずあとずさりしながら、しわがれたかすれ声でささやくのです。

「もつとおくまで、ずつとおくまでどうぞ。こつちです。見通しがきくところは安全ではありませんからな！」

こうして、ビーバーがみんなをつれていくところは、四本の木がくつついて生え、枝がかさなりあつて暗がりとなり、雪が入りこめずに茶色の地面と松のおち葉が足もとに見えているところでした。そこまで来ると、ようやくビーバーはみんなに話しはじめました。

「あなたがたは、アダムのおむすこさんと、イブのおむすめさんですか？」

「そういうことになると思います」と、ピーター。

「しっ、しー！」と、ビーバー。「そんなに大きな声を出さないでください。ここだって、安全ではないんです。」



「なにをそんなにこわがっているんですか」と、ピーター。「ここには、ぼくたちしかいませんよ。」

「木がいます」と、ビーバー。「連中は、いつも聞き耳をたてています。たいていはこっちの味方なんですが、われわれのことをあの、人に通報する木もいるんです。あの人って、だれだかおわかりですよね。」ビーバーは話しながら何度かうなずきました。

「こっちの味方、なんて言っても」と、エドマンド。「きみがぼくらの味方かどうか、どうやってわかるんだい？」

「無礼な態度を取るつもりではありませんが、ビーバーさん、」ピーターがつけくわえました。「でも、おわかりでしょうが、おたがい、知らないわけですから。」

「ごもつとも、ごもつとも。これが、私があなたがたの味方だという印です。」

ビーバーは小さな白いものをかかげて、みんなに見せました。みんなは、おどろいてそれを見つめました。ふいにルーシーが言いました。

「あつ、それ、そうよ、あたしのハンカチ——かわいそうなタムナスさんにあげたの。」

「そうです。かわいそうなやつです。いよいよ逮捕されるっていう前に、感づいたんですね。これを私にわたしてくれました。自分の身になにか起きたら、私があなたがたにここでお会いして、お連れするように、と。行き先は——」

ここでビーバーの声はすうつと聞こえなくなり、ビーバーはとてもなぞめいたようすで、一、二度うなずきました。それから、子どもたちに分のまわりにできるかぎり近づくように合図し——みんなの顔が、ビーバーのひげでこちよこちよとくすぐられるほど近くに寄ったところで——低い声でこう言いそえました。

「アスランが動いたという話です。ひよつとすると、もう上陸なさったかもしれない。」

そのとき、とても奇妙なことが起こりました。

子どもたちのだれも、アスランがだれかなんて、みなさんと同じぐらい知らなかったのですが、ビーバーがこの言葉を発したとたん、四

人^{にん}には、なにかががらりと変わる感^{かん}じがしたのです。

ひよつとすると、みなさんも、夢^{ゆめ}を見^みているとき、意味^{いみ}のわからない言^{こと}葉^ばを聞^きいて、夢^{ゆめ}のなかでは、なんだかとても大切^{たいせつ}な意味^{いみ}があるように感^{かん}じたことがあるでしょう。ひどくこわい感^{かん}じがして夢^{ゆめ}全体^{ぜんたい}が悪^{あく}夢^むになったり、あるいは一生^{いっしょう}忘れ^{わす}られないすばらしい夢^{ゆめ}になつてしまふほど、言^いいようもないくらいすてきな感^{かん}じがして、もう一度^{いちど}その夢^{ゆめ}のなかにもどりたいたなんて思^{おも}つたりしたこともきつとあるでしょう。まさに今^{いま}、子^こどもたちはそんな感^{かん}じになつたのです。

アスランの名^な前^{まえ}を聞^きいたとたん、子^こどもたちのだれもが、胸^{むね}がどきつとするの^のを感^{かん}じました。

エドマンドは、ぞくぞくつと、わけのわからないおそれ^{おそれ}を感^{かん}じました。ピーターは、急^{きゅう}に勇^{ゆう}氣^きがわいてきて冒^{ぼう}険^{けん}がしたくなりました。スーザンは、なにかおいしそうなにおいか、楽^{たの}しい音^{おん}樂^{がく}の一^{いっ}節^{せつ}が自^じ分^{ぶん}のそばを流^{なが}れたように感^{かん}じました。そしてルーシーは、朝^{あさ}、目^めをさましてみると、今日^{きょう}からずつとお休^{やす}みなんだとか、夏^{なつ}がはじまるんだとか氣^きがついたときのよう^{よう}にうれしく感^{かん}じました。

「それで、タムナスさんは？」と、ルーシー。「どこにいるの？」

「しつ、しー」と、ビーバー。「ここではだめです。みなさんを、ちゃんとお話^{はな}しで^できる場^ば所^{しょ}にご案^{あん}内^{ない}して、お食^{しょく}事^じもお出^だしします。」
こうなると、エドマンドは別^{べつ}として、ビーバーを信^{しん}頼^{らい}するこ^ことをためらう人^{ひと}はいませんでした。エドマンドですが、みんな「お食^{しょく}事^じ」という言^{こと}葉^ばを聞^きいて、とてもうれしかったのです。

そこでみんなは、この新^{あた}ら^らしいお友^{とも}だちのあとに急^{いそ}いでついでにきました。ビーバーはおどろくほどの早^{はや}足^{あし}で、森^{もり}のうっそうとしたところばかりを通^{とお}つて一^じ時^{かん}間^{いじ}以上^{いじょう}も先^{さき}に立^たつて進^{すす}みました。みんな、おなかがぺこぺこになつてつかれはてたそのとき、ふいに目^めの前^{まえ}の木^こ立^{だち}がまばらになつて、急^{きゅう}な下^{くだ}り坂^{さか}があらわれました。一分^{ふん}後^ご、みんなはひらけた空^{そら}の下^{した}に出^でており（まだ太^{たい}陽^{よう}は照^てっていました）、すばらしい景^け色^{しき}を見^みおろしていました。

みんなが立^たつていたのは、せまくて急^{きゅう}な谷^{たに}の入^いり口^{ぐち}でした。谷^{たに}底^{ぞこ}にはかなり大^{おお}きな川^{かわ}があり、こおっていなければ流^{なが}れていたはずでした。

みんなの足もとには、この川をせきとめるダムがありました。それを見たとき、みんな、ビーバーはダムをつくるものだと思いで、このビーバーさんがつくったのだと思いあたりました。ビーバーさんの顔にちよつとけんそんするような表情がうかんでいることにも気がつきました。自分がつくった庭にお客さんが来てくれたときとか、自分が書いた物語をだれかに読んでもらっているときに人がうかべるような表情です。

ですから、スーザンが「なんてすてきなダムでしょう！」と言ったのは、ごくふつうの礼儀からだったのですが、ビーバーさんは、こんどは「しー」とは言わず、「いやあ、なに、たいしたことありません！ それにまだ、すっかり完成してはいないんですよ」と言いました。ダムの上流には深い池があるはずでしたが、今はもちろん一面に深緑色の氷が平らに張っていました。ダムの下流は、ずっと低くなっていて、やはりこおっていました。平らではなく、寒気がやってきたまさにその瞬間の形のまま、泡だち波打ってこおっていました。また、ダムから水がしたたり落ちたり、ほとばしり出ていたりしたところは、きらきらとかがやくつららが連なつてかべのようになっており、まるでダム一面が、まっさらの砂糖でできた花や花輪や花かざりでおおわれているようでした。

そのまんまに、ダムの上に少しつき出すようにして、巨大なハチの巣のような形をしたへんてこな小さな家が建っていました。屋根の穴からは煙がたちのぼっていましたので、それを見ると（とりわけ、おなかですいていると）料理をしているのだなと思つて、ますますおなかですいてしまうのでした。

みんなが気づいたのはそれぐらいでしたが、エドマンドは別のことに気がつきました。

この川は少し下流のほうで、よその小さな谷間から流れ出た小川と合流していたのです。その谷を見あげると、ふたつの小さな丘が見えました。それはあのととき、街灯のところで白の魔女とさよならしたときに、魔女が指して教えてくれたあのふたつの丘にほぼまちがいありません。

すると、ここからほんの一キロ半ぐらいのところにある、あの丘と丘のあいだには魔女の館があるにちがいないと、エドマンドは考えま

した。とたんに、ターキッシュ・デライトのことが思い出され、それから王さまにしてあげると言われたことが思い出されました。（「ぼくが王さまになったら、ピーターはどんな顔をするかな」と、エドマンドは思いました。）そして、おそろしいことをいろいろ思いえがいたのでした。

「着きましたよ」と、ビーバーさん。「うちのかみさんが、どうやらみなさんをおむかえする準備をしているみたいですな。ついてきてください。でも、気をつけて、すべらないように。」

ダムの上は歩けるほどひろかったのですが、氷でおおわれていたので、人間にとつてはあまり歩きやすいところではありませんでした。それに片側は、こおった池が同じ高さでひろがつていましたが、反対側は、ずっと下にある川まで落ちこんでいて危険でした。

このダムの上を、みんなはビーバーさんについて一列になつて川のまんなかまで行きました。川をずうつと見あげること、ずうつと見おろすこともできる、その場所に、家の玄関がありました。

「ただいま。見つけたよ。こちらがアダムのむすこさんとイブのむすめさんだ。」

そう言つてなかへ入つていくビーバーさんにつづいて、みんな、なかへ入りました。

なかへ入るとまずルーシーは、カタカタという音に気がつきました。そこでルーシーが目にした最初のものは、やさしそうなビーバーのおばさんがすみのほうにすわつて、糸を口にくわえて、いそがしくミシンをかけている姿でした。カタカタという音は、ミシンの音だったのです。

ビーバーのおばさんは、子どもたちが入つてくると、すぐに手をとめて立ちあがりました。

「とうとう来てくれましたね！」

おばさんは、しわだらけの年老いた両の前足をさし出しながら言いました。

「ようやつと！　こんな日まで生きていられるなんてねえ！　さあさ、じゃがいもがゆであがつて、やかんがピーと鳴っていますよ。あな

た、お魚をとつてきてくださいな。」

「とつてくるともさ。」

ビーバーさんがそう答えて家から出ていくと、ピーターがついていきました。ふたりは、深い池に張った氷の上を通つて、毎日おので切りあけておいてある氷の穴のところまで行きました。ふたりは、バケツを持つていきました。ビーバーさんは、静かに穴のすぐそばにすわつて、冷えこむことなど気にならないようすで、じつと目をこらして穴のなかをのぞきこみました。それから、いきなり前足を穴のなかにつっこむと、「だるまさんがころんだ」と言うより速く、みごとなマスをさつとつかまえたのです。それを何度もくりかえして、やがて大漁となりました。

いっぽう、スーズンとルーシーは、ビーバー夫人を手伝つて、やかんにお水を入れたり、テーブルに食器をならべたり、パンを切つたり、オーブンにお皿を入れてあたためたり、家の片すみにあるたるからビーバーさんのために大ジョッキにビールをついだり、フライパンを火にかけて油をあたためたりしました。

ルーシーは、ビーバーさんのおうちは、タムナスさんのほら穴とはぜんぜんちがうけれど、とても気持ちのいい小さなおうちだと思ひました。ここには本も絵もなく、ベッドのかわりに、船みたいに寝るための板がかべにくつついていました。天井からは、ハムや、たばねた玉ねぎがぶらさがつており、かべにかかつていたのは、ゴム長ぐつ、レインコート、おの、大ばさみ、スコップ、こて、しつくいを運ぶ道具、つりぎお、魚捕りの網、大きな袋などでした。テーブルクロスはとても清潔でしたが、かなりごわごわしていました。

ちようどフライパンがいい感じにジュージューいいはじめたときに、ピーターとビーバーさんが魚を持って入つてきました。どれもビーバーさんが外できれいにさばいたものばかりです。

とりたての魚を揚げるにおいがどんなにおいしそうだったか、おなかをすかせた子どもたちがどんなに待ちきれなかったか、そしてビーバーさんが「さあ、もうすぐできますよ」と言うまでに、みんなどんなにおなかがぺこぺこになつてしまったか、みなさんもおわかりで

しよう。

スーザンが、ゆでたじやがいものお湯ゆを捨て、水気みずけを切きったおいものを空からっぽのなべにもどして調理用ちようりようのコンロのわきに置おき、水分すいぶんをとばしてほくほくにしているあいだ★、ルーシーはビーバー夫人ふじんを手伝てつだって魚さかなのフライをお皿さらに盛もりつけましたから、数分すうぶんもしないうちに、みんなはこしかけを引ひきよせ（ビーバーさんのおうちにあるのは、だんろのそばにあるビーバー夫人用ふじんようの特別なとくべつゆりいす以外いがいはみんな三本ぼんあしのこしかけでした）、ごちそうにありついたのでした。

子どもたちにはクリームのようにこつてりしたミルクの入はいったコップがあり（ビーバーさんはずっとビールでした）、濃い黄色きいろのバターのととても大きなかたまりがテーブルのまんなかにもドンとあつて、そこからみんな好きすなだけバターを取とって、じやがいもにつけて食たべたのです。

子どもたちは思おもいました——つい三十分前さんじつぷんまえにとれたばかりの活いきのいい川魚かわぎかなを、三十秒前びようまえにフライパンからお皿さらにうつしたばかりの揚げたてでいただくほど、おいしいものはない、と。まったくそのとおりです。

お魚さかなを食たべおえると、ビーバー夫人ふじんが、思おもいがけず、オーブンから大きなマーマレード・ロールを持もってきてくれました。できたてで湯ゆ気を立たてているほどあつあつで、すばらしくねっとりしたデザートでした。そのときにやかんを火ひにかけてくれましたから、みんながマーマレード・ロールを食たべおわるころには、お茶ちやをいれる用意よういができていました。



こうして、それぞれ、お茶のカップを手^てに、自分のこしかけをうしろへさげて、かべにもたれかかって、全員^{ぜんいん}が大満足^{だいまんぞく}の深^{ふか}いため息^{いき}をついたのでした。

「さあて。」

ビーバーさんは空^{から}になつたビールのジョッキを押^おしやり、お茶^{ちや}のカップを引きよせながら言^いいました。

「パイプに火^ひをつけて一服^{いっぷく}させてもらうよ——さて、これで本題^{ほんだい}に入^{はい}れるわい。また雪^{ゆき}が降^ふってきたな。」

ビーバーさんは、窓^{まど}を見^みあげながらつけくわえました。

「こりや好都合^{こうつごう}だ。これならたずねてくるお客^{きやく}もいなかろうて。それに、だれかにあとをつけられていたとしても、足^{あし}あとが消^きえるからな。」

「さあ」と、ルーシー。「タムナスさんになにが起こったのかお話ししてくださいな。」

ビーバーさんは首をふりながら言いました。

「ああ、ひどい話だ。まったくもって、ひどいこった。警察に連行されたんだな、まちがいない。それを見ていた小鳥が教えてくれたよ。」

「でも、どこにつれていかれたの？」ルーシーがたずねました。

「そうさな。連中は、最後に目撃されたとき、北を目指していた。それがどういうことか、だれにだってわかる。」

「わからないわ、私たちには」と、スーザン。

ビーバーさんは、かなり気がめいたようすで首をふりました。

「残念ながら、魔女の館につれていかれたということさ。」

「タムナスさんをどうしようというのかしら、ビーバーさん？」ルーシーはあえぎました。

「そうさな。たしかなことはわからんが、あそこにつれこまれたら、まず出てこられん。石像だ。あちらこちら、石像だらけだそうだ——」

中庭から、階段から、広間からぜんぶ。みんな変えられちゃったんだ——」

ビーバーさんは言いよどみ、ぶるつと身ぶるいしました。

「——石に。」

「でも、ビーバーさん」と、ルーシー。「なんとかできないの？——いいえ、なんとしても助けなくっちゃいけないわ。そんなのあんまりだし、みんなあたしのせいなんだもの。」

「そりやあ、助けたいのはやまやまだけど」と、ビーバー夫人。「でも、魔女の意に反してあの館にしのびこんだら、生きて出ではこれがないのよ。」

「なにか作戦を立てられないんでしょうか？」と、ピーター。「たとえば、なにかに変装するとか、なにかに化けて——物売りでもなんでも——魔女がいなくなるまで見はつて——さもないや、ええい、なにか方法があるはずだ。フォーンは危険を冒して妹を助けてくれたんです、ビーバーさん。そのフォーンに——そんな——そんなことされるのをだまつて見ているわけにはいきません。」

「しかたないよ、アダムのおむすこさん」と、ビーバーさん。「ほかのひとならともかく、あなたにできることはない。だが、今やアスランが動きだしている——」

「そう、そう！ アスランのことを教えてください。」

いろいろな声がいっぺんに言いました。というのも、もう一度あのふしぎな感覚が——春の最初のおとずれのような、吉報のような感じが——したからです。

「アスランってだれですか？」

スーザンがたずねました。

「アスランがだれかって？」と、ビーバーさん。「えつ、知らないの？ 王さまですよ。森全体を支配している。でも、あんまり森には、

いらつしやらないけどね。私の代も、私の父の代にも、森には、いらつしやらなかつた。でも、おもどりになったという知らせが入ったんです。今この瞬間にナルニアにいらつしやる。ちゃんと白の女王をやっつけてくださるでしょう。タムナスさんを救うのは、あなたがたで

はなく、アスランですよ。」

「アスランは石にはされないんだ？」と、エドマンド。

「まったくもって、アダムのむすこさんよ、なんてことを言いだすやら！」

ビーバーさんは大笑いして答えました。

「あのかたを石にするですって？ あいつにできることといったら、二本の足で立ってアスランの顔を見すえるくらいが関の山。いや、それすらできないんじゃないかな。いえいえ。アスランはこのあたりの古いわらべ歌にあるように、すべてをもとどおりにもどしてくださいませよ。」

アスラン ラララ 正義の味方

ガオウと ほえれば 悲しみ 消える

むき出す 牙に 冬は死に

たてがみ ゆらら 春が来る

アスランに会えばわかりますよ。」

「でも、アスランに会えるのかしら？」スーザンが聞きました。

「だって、イブのむすめさん、そのためにみなさんにここに来ていただいたんじゃないやありませんか。アスランに会えるところにみなさんをお連れするのが私の役目なんです」と、ビーバーさん。

「ア——アスランって、人間？」ルーシーがたずねました。

「アスランが人間だつて！ とんでもない。」

ビーバーさんはきつぱりと言いました。

「森の王であり、偉大なる海のかなたの皇帝のご子息です。百獣の王つて聞いたこと、ありませんか？ アスランは、ライオンです——りっぱな、偉大なライオン。」

「まあ！」と、スーザン。「人間かと思つてた。あの——あぶないかしら？ ライオンに会うのつて、ちよつとびくびくものだけど。」
「そりやあそうですよ、あなた。」ビーバー夫人が言いました。「アスランの前に出て、ひざががくがくしないような人がいたら、ものすごく勇敢か、単なるばかりですよ。」

「じゃあ、あぶないの？」と、ルーシー。

「あぶないかつて？」と、ビーバーさん。「今、かみさんが言つたこと、聞いてなかったのかね？ だれがあぶないなんて言つたね？ もちろんあぶないさ。でも、よいかたなんだ。王さまだからね。」

「会つてみたいな」と、ピーター。「いざつてときになつて、こわくなつちやうかもしれないけど。」

「そうだとも、アダムのむすこさん！」

ビーバーさんが、どすんとテーブルを前足でたたいたので、コップやお皿ががちやがちやと鳴りました。

「会つてもらおう。できればあした、あなたがたは石舞台でアスランに会うようにとの伝言が入っているんだ。」

「それ、どこなの？」と、ルーシー。

「私が教えてあげるさ。ここからずっと川をくだつていったところだ。つれて行ってあげよう！」

「でも、そのあいだ、かわいそうなタムナスさんはどうなるの？」と、ルーシー。

「あのひとをできるだけ早く助けるためにも、アスランに会わなくちゃならん。いったんアスランといっしょになつたら、行動開始だ。も

ちろん、あなたがたもいつしよじやなきやだめですよ。それも、別の古い歌にあるからね。

アダムの肉とアダムの骨、すなわち人間の男と女が

ケア・パベルの玉座についたとき

それが悪しき時代のおわるとき

だから、アスランがあらわれ、あなたがたも来た今となつては、いよいよ悪しき時代のおわりが近いってことなんですよ。だれも思い出せないくらいむかしの話だけど、以前このあたりにアスランがいたそうです。しかし、あなたがた人間の仲間だれひとりとして来たことはなかった。」

「そこがわからないんです、ビーバーさん」と、ピーター。「だって、魔女だって人間なんじゃないんですか？」

「私にはそう信じさせたがっていますがね」と、ビーバーさん。「そうして、それを根拠に女王だと主張している。でも、イブのむすめなんかじゃない。あいつは、あなたがたの父祖アダムの——（ここでビーバーさんはおじぎをしました）——あなたがたの父祖アダムの最初の妻、リリスと呼ばれる女の血すじで、このリリスというのは幽鬼の仲間でした。あいつの母は幽鬼で、父は巨人なんです。いやいや、あの魔女には、本当の人間の血なんか一てきだってありやしない。」

「だから、骨のずいまで悪いやつなんですよね、あなた」と、ビーバー夫人。

「そうだよ、おまえ。」夫のビーバーさんは答えました。「人間には、いい人と悪い人と両方いる。（あなたがたのことを言っているんではありませんよ。）でも、人間のふりをしながら人間でないものには、悪いやつしかいないんです。」

「いいこびとなら知っていますけどね」と、ビーバー夫人。

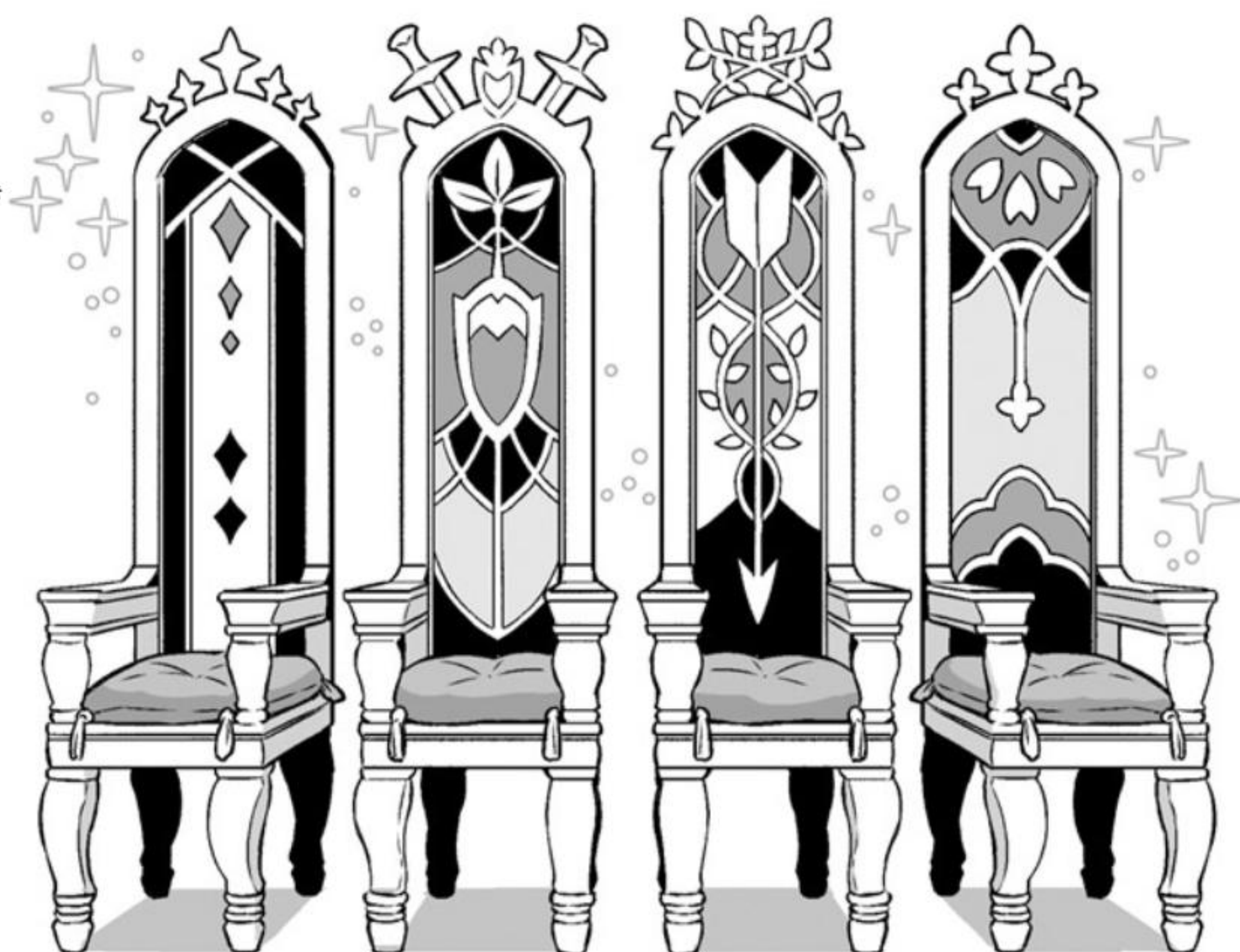
「そりゃあ、私^{わたし}だって知^しっている」と、夫^{おつと}のビーバーさんが言^いいました。「でもごくわずかだね。しかも、そういうのにかぎって、人間^{にんげん}に似^にていない。だけど、たいていのところ、いいかね、人間^{にんげん}になりかけていてまだなっていないものとか、かつては人間^{にんげん}だったけれど今^{いま}はちがうとか、人間^{にんげん}のはずなのにそうじゃないとか、そういうものに出^で会^あったら、相手^{あいて}から目^めをはなさず、手^ておのに手^てをのばさなきゃならん。まあ、そういうわけで、魔女^{まじよ}はいつもナルニアに人間^{にんげん}はいないかと見^みはつているんだ。もう何年^{なんねん}も、あなたがたのことを警戒^{けいかい}している。あなた^{あなた}がたが四人^{にん}いると知^しったら、いよいよもってあぶなくなるね、あの魔女^{まじよ}は。」

「どうしてですか？」ピーターがたずねました。

「もうひとつ予言^{よげん}があつてね」と、ビーバーさん。「ずっと遠^{とお}く、ケア・パラベル——というのは、この川^{かわ}が流^{なが}れこんでいる海岸^{かいがん}にある城^{しろ}で、本当^{ほんとう}なら国^{くに}全体の首都^{しゅと}のはずなんだが——そのケア・パラベルに四つの玉座^{ぎよくざ}があつて、アダムのむすこふたりとイブのむすめふたりがその四つの玉座^{ぎよくざ}にすわれば、白^{しろ}の魔女^{まじよ}の支配^{しはい}がおわるのみならず、魔女^{まじよ}の命^{いのち}もおわると、はるかむかしのナルニアの言^いい伝^{つた}えに言^いわれているんだ。だから、ここに来^くるとちゅうも、ああやって気^きをつけなければならなかったんだよ。なにしろ、魔女^{まじよ}があなたがた四人^{にん}に気^きがつけば、あなたがたの命^{いのち}は、このひげがゆれるよりかんたんに、あつさりと消^きえちまうからね！」

子どもたちはいつしよけんめいビーバーさんのお話を聞いていたので、長いこと、そのほかのことに気がつきませんでした。けれども、ビーバーさんが話しおえて、みんながしんとしていたとき、とつぜんルーシーが言いました。

「ねえ——エドマンドはどこ？」



おそろしい沈黙が流れました。それから、みんなが口々にたずねあいました。

「最後にエドを見たのはだれ？　いつからいない？　表にいない？」

それから、みんなはドアのところに掛けていつて、外をのぞきました。

雪がどつさり、しんしんと降っていて、緑色だった池の氷は厚い雪の白い毛布をかぶって見えなくなってしまう、ダムของまんなか建っている小さな家からは、どちらの岸もあまりよく見えませんでした。みんなは外へ出ました。やわらかい新雪のなかにくるぶしまでずぼつと足をつっこみながら、家のまわりを四方八方さがしました。

「エドマンド！　エドマンド！」

みんな、声がかれるまでさけびましたが、みんなの声は、静かに降りつづける雪につつまれて消えてしまうように思え、こだまひとつかえつてきませんでした。

とうとうみんなが絶望して帰ってきたときに、スーザンが言いました。

「なんておそろしいこと！　ああ、こんなところ、来なきやよかった。」

「どうしたらいいんでしょう、ビーバーさん？」　ピーターが言いました。

「どうしたら？」

もう雪ぐつをはきにかかっていたビーバーさんは言いました。

「どうしたらだつて？　すぐに出かけなきや。一刻もむだにできない！」

「四つに分かれてさがしましょう」と、ピーター。「別々の方角に行くんです。エドを見つけたら、すぐにここにもどつてきて——」

「分かれてさがすつて、アダムのむすこさん？」と、ビーバーさん。「なんのために？」

「エドマンドをさがすために決まっていますよ！」

「さがす必要はないよ」と、ビーバーさん。

「どういうこと？」と、スーザン。「まだ遠くには行っていないわ。見つけなきや。さがす必要はないってどういうことですか？」

「さがす必要がないのは」と、ビーバーさん。「どこに行ったか、わかってるからさ！」

みんなはびつくりして目をみはりました。

「わからないかね？」と、ビーバーさん。「白の魔女のところに行ったんだよ。みんなをうらぎったんだ。」

「え、そんな——そんな、まさか！」と、スーザン。「そんなこと、エドがするはずないわ。」

「するはずがない？」

ビーバーさんが、三人の子どもたちをじろりときびしく見ながら言いましたので、みんなが言おうとしていたことは口に出る前に消えてしまいました。

みんなは、ふいにわかったのです。それこそまさにエドマンドがしたことだ、と。

「でも、道がわかるでしようか？」と、ピーター。

「あの子は前にこの国に来たことがあるかね？」ビーバーさんがたずねました。「この国でひとりきりになったことは？」

「あるわ」と、ルーシーがささやくように言いました。「ある。」

「そのとき、なにをしたとか、だれと会ったとか、話さなかったかい？」

「えつと、うううん、話さなかった」と、ルーシー。

「では、よく聞きたまえ」と、ビーバーさん。「あの子はすでに白の魔女と出会い、その味方となつて、魔女のすみかを教えてもらつたんだ。今まで言いたくはなかったんだが（あの子はあなたがたのきょうだいだしね）、はじめてあの子を見たとき、『うらぎりもの』だとすぐわかった。魔女といっしょにいて、魔女の食べ物を食べたことのある者のようすをしていた。ナルニアに長く住んでいるとわかるんだ。目

つきがちがうからね。」

「それでもやつぱり、さがしに行かなくちゃ。ひどいいじわるをするやつだとしても、ぼくたちのきょうだいなんです。それにまだ、子どもだし。」

ピーターが、ひどく息をつまらせたような声で言いました。

「魔女の館に行くですって？」と、ビーバー夫人。「あの子を救うにしろ、あなたたち自身を救うにしろ、唯一の方法は魔女に近づかないことだつて、わからない？」

「どういうこと？」と、ルーシー。

「だつて、魔女は、あなたたち四人をつかまえたくてうずうずしているのよ。（いつだつてケア・パラボルのあの四つの玉座のことを考えていますからね。）四人とも魔女の館に入ったら、むこうの思うつぼです。あなたたちがひとことも口をきかないうちから、魔女のコレクションに新しい像が四つくわえられるでしょう。でも、エドひとりしかつかまえられないなら、ずっとエドを生かしておくでしょう。おとりに使うためにね。のこりのみんなをつかまえるためのえさですよ。」

ルーシーが泣き声をあげました。

「ああ、だれか助けてくれる人はいないの？」

「アスランだけです」と、ビーバーさん。「会いに行きましょう。もうアスランにたよるしかありません。」

「ねえ、みなさん。」ビーバー夫人が言いました。「いつ、あの子はぬけ出したのかしら。とても大切なことなの。魔女にどんな告げ口をするかは、あの子がどれくらい私たちの話を聞いたかによるでしょ。たとえば、あの子がいなくなる前にアスランの話をしたかしら？ もししてなければ、安心できるわ。だつて、アスランがナルニアにやってきたことが魔女にばれず、私たちがアスランに会おうとしていると知られずにすめば、魔女は油断するでしょうから。」

「アスランのことを話^{はな}していたときに、あいつがいたかどうか、覚えてないなあ」と、ピーターが言^いいはじめたとき、ルーシーが口^{くち}をはさみました。

「いたわ。」がっかりしたようにルーシーは言^いいました。「覚えてない？ 魔女^{まじよ}はアスランも石^{いし}に変^かえられないのって聞^きいたのはエドよ。」

「ああ、そうだ。なんてこった！ しかも、まさにあいつが言^いいそうなことじゃないか！」

「ますますよくないね」と、ビーバーさん。「じゃあ、つぎはこれだ。アスランと会^あう場所は石舞台^{いしぶたい}だって話^{はな}したとき、あの子^こはまだここにいたかな？」

もちろん、だれひとり、この質問^{しつもん}に答^{こた}えられませんでした。

「なぜなら、もしここにいたなら、」と、ビーバーさんはつづけました。「魔女^{まじよ}は石舞台^{いしぶたい}にそりを走^{はし}らせ、そこへむかうわれわれの先回^{さきまわ}りをして、とちゅうでわれわれをつかまえるだろう。きつとわれわれは、アスランに会^あえなくなってしまう。」

「でも、魔女^{まじよ}がまずやるのは、そういうことじゃありませんよ」と、ビーバー夫人^{ふじん}。「私^{わたし}が知^しっているあの女^{おんな}だったら、そうじゃありません。私^{わたし}たちがみんなここにいとエドマンドが告^つげた瞬間^{しゅんかん}に、今晚^{こんばん}のうちにでも私^{わたし}たちをつかまえようと、ここへやってくるわ。あの子^こが三十分前^{さんじつぷんまえ}に出^でたとしたら、あと二十分^{にじつぷん}でここに来^くるわね。」

「そのとおりだ、おまえ」と、夫^{おつと}のビーバーさんは言^いいました。「ここからにげなきやならん。一刻^{いっこく}のゆうよもならん。」

魔女の館で

さてそれでは、エドマンドはいつたいたどうなつてしまつたのでしょうか。もちろんみなさん、知りたいですよ。

あるときエドマンドは、出された夕ごはんを食べたのですが、あまりおいしいとは思いませんでした。ターキッシュ・デイトのことばかり考えていたからです。悪い魔法の食べ物のおいし出ほど、おいしいふつうの食事の味をだめにしてしまうものはありません。

みんなの話もエドマンドの耳には入っていましたが、みんなが自分のことを無視して相手にしてくれないとひがんでいたので、やつぱりおもしろくありませんでした。無視なんてしていませんでした。エドマンドはそんなふうに思いこんでしまつたのです。

そのうちに、ビーバーさんがアスランのことを話すまで聞いていて、アスランと石舞台で会う計画もすっかり聞いてしまいました。そのときなのです、エドマンドがドアにかかつているカーテンのうしろにじりつじりつと入つていつたのは。

というのもアスランの名前を聞くと、なんとも知れぬこわい感じがしたからです。ちょうどほかのみんなには、なんとも知れぬ心あたたまる感じがしたのですが。

ビーバーさんが「アダムの肉とアダムの骨」の歌を歌つていたとき、エドマンドはとても静かにドアの取っ手を回してました。そして、ビーバーさんが、白の魔女は本当は人間ではなく、幽鬼と巨人から生まれたものだとき、もうエドマンドは外の雪のなかに出てしまつており、そつと、うしろ手でドアを閉めていたのです。

エドマンドが本当に自分のきょうだいを石に変えてしまいたいと思うほど悪い子だったなんて考えないでくださいね。ただターキツシュ・デイライトがほしくて、王子さまに（そしてやがては王さまに）なつて、自分のことを人でなしだなんて呼んだピーターを見かえしてやりたかっただけなのです。

魔女がみんなにとくにやさしくしなくてもかまわなかったし、エドマンドだけ特別あつかいにしてくれているのを絶対やめてほしくないとおもっていました。まさかみんなにとってもひどいことをするはずがないと思ひこもうとして、むりをしていたのでした。

「だって、女王を悪く言う人たちはみんな女王の敵だから、たぶん半分はうそつばちさ。ぼくにはとてもやさしくしてくれたし、とにかく、みんなよりずっとずっとやさしくしてくれた。きつと本物の女王さまなんだ。とにかく、おっかなーいアスランよりはずっとましさ！」
少なくともそんな言いわけを心のなかでしながら、エドマンドは魔女のところへ行つたわけです。でも、あまりよい言いわけではありませんでした。だって、本当のところは、エドマンドにもわかつていたのです。白の魔女は悪くて、ざんこくな人だ、と。

外に出て、まわりに雪が降っているのを見て、エドマンドが最初に気づいたことは、ビーバーさんの家にコートを忘れてきてしまったということでした。もちろん、今さら取りにもどるわけにもいきません。

つぎに気づいたのは、もう日がすっかり暮れていたということです。夕ごはんを食べはじめたのは三時ごろでしたが、冬は日が短いのです。エドマンドはそれを計算に入れていませんでした。

しかし、なんとかしなければなりませんでしたから、えりを立てて、ダムの上をすり足でわたつて（さいわいなことに、雪が降つたためにそれほどすべらなくなっていました）、川のむこう岸へ出ました。

ようやく川岸に着いたときには、事態は最悪でした。刻一刻と暗くなつてきていましたし、そのうえ、あたり一面雪が舞つて、一メートル先もはつきり見えないほどでした。しかも、道らしきものが一切なかったのです。

何度も深い雪のふきだまりのなかにつつぷして、こおった水たまりで足をすべらせ、たおれた木の幹にけつまずき、急な坂をころげ落ち、

むこうずねを岩でしたたかすりむき、びしよぬれで冷えきって、傷だらけになつてしまいました。

あたりはしんと静まりかえり、ひとりぼちでいることの心細さときたら、おそろしいものでした。もう少しでなにもかもあきらめてひきかえし、すっかり白状して、みんなと仲直りをしようと思うところでしたが、ふと、「ぼくがナルニアの王さまになつたら、まつ先にちゃんとした道を作ろう」と口にしたのがきっかけで、王さまになつたらなにをするかを考えはじめ、それでかなり元気を取りもどしてしまつたのでした。

どんなふうな宮殿に住もうかとか、自動車は何台がいいかとか、自分専用の映画館はどんなふうになつてゐるかとか、主な鉄道をどこに走らせるかとか、ビーバーにダムを作らせないためにどんな法律を作ろうかとか考え、それからピーターに思い知らせてやるための計画をいろいろ考えぬいて、もう少しで計画が完成するというそのとき、天気が変わりました。

まず、雪がやみました。それから急に風がふきだして、こごえるほど寒くなりました。おしまいに雲が流れ去つて、月が出ました。満月です。あたり一面の雪がすみずみまで照らし出され、まるで昼間のように、なにもかかがやきました。ただ、かげがくつきりと出て、不気味でした。

月が出てくれなかつたら、とうてい道がわからなかつたでしょうが、ちようどもうひとつの川に着く前に月が出てくれたので助かりました。もうひとつの川というのは――みなさんは覚えていますよね、（ビーバーさんの家にはじめて着いたときに）大きな川の下のように小さな川が流れているのをエドマンドが見た、あの川です。エドマンドは今そこまでたどりついて、それを上流にたどつていこうとしていたのです。

ところが、その川が流れている小さな谷は、さっきの谷よりもずっと急で、岩やしげみだらけだったので、まつ暗だつたらちつとも進むことができなかったことでしょう。月が出ていても、枝の下に身をかがめたときに大きな雪のかたまりがどきつと背中落ちてきて、全身びしよぬれになつてしまいました。こんなことが起こるたびに、エドマンドは、ピーターなんて大つきらいだと思つたのです――あたかも

それがピーターのせいであるかのように。

しかし、ついに、少し平らで、谷がひらけたところまでやってきました。月はいよいよ明るくかがやいています。そして川のむこう、ふたつの丘のあいだの、そんなに遠くない小さな平原のまんなかに、白の魔女の館にちがいないものが見えました。

館というのは、本当は小さな城でした。どこもかしこも塔のようで、針のようにするどく長くとがった尖塔がずらりとならんでいて、まるで大きな魔法使いのぼうしか道化のぼうしのように見ええました。それがきらきらと月明かりに照らされて、その長いかげが雪の上に不気味に落ちていました。エドマンドは、この城がこわくなってきました。

けれども、今さらあともどりなんてできません。エドマンドは、こおった川をわたって、城まで歩いていきました。動くものはなにもありませんし、かすかな物音ひとつしません。自分の足音でさえ、新しくつもった深い雪にのみこまれて聞こえません。エドマンドは、玄関を見つけようとして、城の角をひとつ、またひとつと曲がり、小さな塔をひとつ、またひとつと通りすぎて歩きつづけました。

ぐるりとまわって、ようやく玄関が見つかりました。玄関は巨大なアーチ（弓の形のように上がまるくなっている門）になっていましたが、大きな鉄のとびらはあいたままになっていました。

エドマンドはアーチのところまでしのびよって、中庭をのぞきこんでみました。すると、もう少しで心臓がとまるかと思うような光景が目にとびこんできました。

門のすぐ内側に、月明かりをあびて、大きなライオンがとびかからんばかりに身をかがめていたのです。



エドマンドは門のかげにかくれて、前に進むこともうしろにさがることでもこわくてできず、ひぎをがたがたふるわせていました。あまりにも長いあいだそこに立っていたので、おそろしきのせいでもなくとも、寒さのせいで、歯ががちがち鳴りそうでした。どれくらいそのままでいたのかわかりませんが、エドマンドには何時間にも思えました。

そのうちにとうとう、どうしてライオンはこんなにじつと立っているんだろうとふしぎに思えてきました——だって、最初に見たときから、一センチも動いていないのです。エドマンドは、思いきつて、できるかぎり門のかげから出ないようにしながら、少し近づいてみることにしました。

その立ち姿をよく見ると、ライオンはこちらのほうをぜんぜん見ていないことがようやくわかりました。「でも、こつちをふりかえつたらどうしよう？」と、エドマンドは思いました。じつのところ、ライオンはほかのだれかをじつとにらんでいたのです。それは、百二十センチぐらい先でライオンに背をむけているこびとでした。

「よし！」と、エドマンドは思いました。「こびとにおそいかかったときが、ぼくがにげるチャンスだ。」

でも、やっぱりライオンは少しも動きません。こびともです。

ここでようやくエドマンドは、白の魔女がひとを石に変えてしまうとみんなが話していたことを思い出しました。

ひよつとすると、これはただの石のライオンなんだ。

そう思ったとたん、ライオンの背中と頭のでっぺんに雪がつもっていることに気がつききました。もちろん、ただの石像にちがいはありません！ 生きている動物だったら雪をかぶったままではいるはずがないのです。

心臓が破れつするんじゃないかと思うくらいときどきしながら、エドマンドは、そうつとライオンに近づいてみました。わかっていても、ライオンにさわるのはこわくてしかたがなかったのですが、ついに、さつと手を出して、さわってみました。冷たい石でした。エドマンドがこわがっていたのは、やっぱりただの石像だったのです！

ああ、よかったとほつとする気持ちがとても強かったので、寒かったにもかかわらず、たちまち足先まで体があたたまり、同時に、とてもすばらしい考えを思いつきました。そのときは、すばらしいと思えたのです。

「きつと」と、エドマンドは考えました。「これつて、みんなが話していた、りっぱなライオンのアスランじゃないかな。魔女がとつにつかまえて、石に変えちゃったんだ。つまり、みんながアスランについてあれこれ考えていることはみんな、おじやんだ！　へっ、アスランなんかこわいもんか！」

そしてエドマンドは、石のライオンにむかつて、どんなもんだいというえらそうな態度を取りました。そして、とてもくだらない子どもじみたことをしました。ちびたえんぴつをポケットから取り出して、ライオンの口の上にひげをかき、目にメガネをかけたのです。そして、こう言いました。

「やあい！　ばかな老いぼれアスラン！　石になってらあ。ざまあみろ！　自分がすつごくかつこいいつもりだったんだろ？」
でも、顔に落書きをされても、大きな石のけものの顔は、やはりとてもいかめしく、悲しげで、気高く、じつと月明かりを見あげていましたので、からかつてもちつともおもしろくありませんでした。エドマンドは、向きを変えようと、中庭を歩きはじめました。

まんなかまで来てみると、チェスのゲーム中にチェス盤のあちこちにコマが立つように、あちこちに何十もの像が立っていました。森の精霊サテュロスやオオカミも石になっており、石のクマや、石のキツネや、石のオオヤマネコもいました。美しい姿の石は人間の女の人のかしらと思いましたが、本当は木の精でした。半人半馬のりっぱな姿や、つばきの生えた馬や、竜かなあとエドマンドが思った、によるにしろと長い生き物もいました。

どれもこれもまるで生きているようでありながら、かがやく冷たい月の光をあびてぴくりとも動かずに立っているのはとつてもふしぎな感じがしたので、中庭を通りぬけるのは、まったくうす気味の悪いことでした。

中央には、巨大な人間のようなかたちをした像が立っていました。木のように高く、いかめしい顔にひげをぼうぼうに生やし、右手に

大きなこん棒ぼうを持もっていました。ただの石いしの巨人きょじんであつて、生きてはいないのだとわかつていても、その前まえを通とおりたくはありませんでした。このとき、中庭なかにわのずっとむこうの入り口ぐちからかすかな明あかりがもれていることに気きがつかしました。近づちかづいてみると、石いしの階段かいだんが上うへにつづいていて、その先さきのドアがあいています。エドモンドは階段かいだんをあがってみました。戸口とぐちのしきいには、大きなオオカミがねそべっています。



「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

エドモンドは何度なんども自分じぶんに言い聞きかせました。

「石いしのオオカミなんだから、こわくない。」

そして、それをまたごうとして、片足かたあしをあげたときです。またたくまに、その巨大きょだいな動物どうぶつは立たちあがり、背中せなかの毛けを逆立さかだてて、大きな赤あか

い口をあけて、うなるような声で言ったのです。

「だれだ？　だれだ？　動くな、あやしいやつ。名を名乗れ。」

「すみません。」

エドマンドはふるえてしまつて、声がなかなか出てきませんでした。

「ぼく、エドマンドと言います。こないだ、森で女王陛下にお目にかかったアダムのむすこで、ぼくのきょうだいナルニアにやつてきたという知らせをもつてきたんです——みんな、すぐそのビーバーのうちにいます。じよ——女王陛下がお会いになりたいとおつしやつていたので。」

「女王陛下にお知らせしよう。そのあいだ、この戸口でじつとしている。命がおいしいならな。」

そう言つて、オオカミは、城のなかに消えていきました。

エドマンドはじつと待ちました。寒くて指先がじんじんと痛くなり、心臓がどきんどきんと鳴りました。やがてあの灰色のオオカミ、すなわち魔女の秘密警察長官モーグリムが、はずむようにもどつてきて言いました。

「入れ！　入れ！　女王のお氣に入りでよかったな——よかったかどうか、知らないが。」

そこでエドマンドは、オオカミの足をふまないようにとても氣をつけながら、城のなかへ入りました。

そこは、たくさんの柱が立ちならんだ長くて暗い広間でした。中庭と同じように、像がぎつしりならんでいました。ドアにいちばん近いところにあつた像は、とてもさびしそうな顔をした小さなフオーンでしたので、これがルーシーのお友だちなのかなとエドマンドは思いました。光は小さなランプ以外にはなく、ランプのすぐそばに白の魔女がすわっていました。

「やつてきました、陛下」と、エドマンドは、思わず前へ走り出て言いました。

「なぜ、ひとりで来た？」魔女はおそろしい声で言いました。「ほかの者たちもつれてこいと言つたはずだ！」

「どうか、陛下^{へいか}」と、エドマンド。「できるだけのこととはしたんです。近くまでつれてきました。川^{かわ}をあがったところにあるダムの上の小^{ちい}さな家^{いえ}に——ビーバー夫婦^{ふうふ}といっしょにいます。」

ゆつくりと、ざんこくそうな笑^えみが、魔^ま女^{じよ}の顔^{かお}にあらわれました。

「知^しらせとはそれだけか？」魔^ま女^{じよ}はたずねました。

「いいえ、陛下^{へいか}。」

エドマンドは、ビーバーさんの家^{いえ}を出^でる前^{まえ}に耳^{みみ}にしたことをすべて話^{はな}しました。

「なんと！ アスランが？」女^{じよ}王^{おう}はさけびました。「アスランが！ まことか？ うそなどつこうものなら——」

「ぼ、ぼくはみんなが言^いっていたことを、お、お伝^{つた}えしているだけです。」

エドマンドは、つつかえつつかえ言^いいました。

けれども、女^{じよ}王^{おう}はもはやエドマンドの言^いうことなど聞^きいてはおらず、手^てをたたきました。するとただちに、以^い前^{ぜん}いっしょにいたあのこびとがあらわれました。

「そりのしたくをせよ。」魔^ま女^{じよ}は命^{めい}じました。「鈴^{すず}のついていない馬^ば具^ぐをつけよ。」

魔法が解けはじめ

さて、ビーバーさん夫婦と三人の子どもたちの話にもどりましょう。

ビーバーさんが「一刻のゆうよもならん」と言ったとたん、みんなはコートに身をつつみはじめました。ただし、ビーバー夫人だけは別で、袋を取り出して、テーブルの上に置きながらこう言いだしたのです。

「さあ、あなた、あのハムをおろしてくださいな。これはお茶の袋、これはお砂糖、そしてマッチと。どなたか、あの角のつばからパンを二、三斤取ってくださいませんかしら。」

「なにをしているんですか、ビーバーのおくさん？」スーザンは、さげびました。

「みんなのための荷づくりですよ、おじょうさん。」

ビーバー夫人は、とても冷静に言いました。

「まさか、なにも食べる物も持たずに旅に出るだなんて思っていないでしょ？」

「でも、時間がないんです！　もう、今にも魔女がここに来ちゃう」

と、スーザンは、コートのえりのボタンをとめながら言いました。

「そう、私はそう言ったぞ。」

ビーバーさんも調子を合わせてくれました。

「よく言うわ」と、ビーバー夫人。「考えてもごらんなきいな、あなた。魔女がここに来るには、少なくともあと十五分はかかりますよ。」

「でも、できるだけ早く出発したほうがいいんじゃないやありませんか」と、ピーター。「魔女より先に石舞台に着くつもりなら？」

「それを忘れちゃいけないわ、ビーバーのおくさん」と、スーザン。「魔女はここをのぞいて、私たちが行ってしまうたあとだとわかれば、全速力で追いかけてくるわ。」

「そうでしょうね」と、ビーバー夫人。「でも、どんなにがんばったって、私たちが魔女より先に着くのはむりですよ。むこうはそりに乗っていて、こっちは歩きなんですからね。」

「じゃあ——もう、だめってこと？」と、スーザン。

「さあさあ、さわぎたてたりしないで、いい子だから」と、ビーバー夫人。「引き出しからきれいなハンカチを六枚ほど出してちょうだい。もちろん、だいじょうぶですよ。魔女より先に行き着けなくても、やりすごして、むこうの思いもよらないようなやりかたで、きつと着けますよ。」

「そのとおりだ、おまえ」と、ビーバーさんが言いました。「だが、もうこの話はおしまいにして、出かけよう。」

「あなたまでさわぎたてないでくださいよ。さあてと。これでいいわ。荷物が五つ。いちばん小さいのは、いちばん小さい人用ね。あなたのことよ」

と、ルーシーを見ながら、ビーバー夫人は言いました。

「ねえ、ほんとに、もう行きましようよ」と、ルーシー。

「そうね、もう、これでおわりにしますからね。」

ようやくビーバー夫人はそう答えると、雪ぐつをはくのをビーバーさんに手伝ってもらいました。

「ミシンはもつていくには重たすぎるわね？」

「ああ、重たすぎるよ」と、ビーバーさん。「ものすごく重たすぎる。まさか、にげている最中にミシンを使おうなんて考えているんじゃないだろうね？」

「あの魔女にいじられると思うだけで、いやなんですよ」と、ビーバー夫人。「こわされたり、ぬすまれたりするかもしれないし。」

「ねえ、おねがい、おねがい、おねがい、急いで！」

三人の子どもたちが言いました。

ついに、みんなは外に出て、ビーバーさんはドアにかぎをかけました。「時間かせぎになる」と言つて。）そして、みんなは、肩に荷物をかけて出発しました。

もう雪はやんでいて、月が出ていました。先頭はビーバーさん、そのあとがルーシー、つぎにピーター、それからスーザンで、最後にビーバー夫人というふうに、一列になって進みました。ビーバーさんは、ダムをわたり、川の右岸を歩き、川辺の林をぬけて、ひどいでこぼこ道を通っていきました。谷の両側の斜面が、月明かりに照らされて、ずっと上のほうまでよく見えました。

「できるかぎり低いところを通っていったほうがいい」と、ビーバーさん。「そりはここまでおりてこられないからね。魔女は上を通るしかないんだ。」

すわり心地のいいアームチェアに身をせずめて窓ごしにながめていたなら、すてきな景色と言えたことでしよう。こんなときでも、はじめのうち、ルーシーは景色を楽しんでいました。でも、歩きに歩き——そのうえ、さらに歩かなければなくなると——背中中の荷物がどんどん重く感じられ、ルーシーは、がんばりつづけるのはむりなんじゃないかしらと思いはじめました。

氷の滝やこおりついた川がきらきらしてきれいだったのも、ルーシーは見るのをやめてしまいました。木々につもった大きな白い雪ぼうしにも、まぶしい満月や満天の星にも、もう目をあげるのをやめて、ひたすら目の前の雪に目を落として、そこをパタ、パタ、パタ、パタ

といつまでもとまらないかのように進んでいくビーバーさんの小さな短い足だけを見つめていました。

やがて、月が見えなくなり、雪がまた降りはじめました。ルーシーはついに歩きながらうとうとするほどつかれてしまったのですが、ビーバーさんが川岸から右へそれて、急な斜面をのぼり、かなり深いしげみのなかへみんなをつれていこうとしていることに、ふと気がつきました。

はつと目をさましたルーシーは、ビーバーさんが斜面にある小さな穴に消えていくところを見ました。穴はしげみにかくれていて、いよいよ入ろうというところまで来ないと穴があることがわかりません。じつのところ、ビーバーさんが短い平らなしっぱだけ残して消えてしまったとき、ルーシーはなにが起こっているのかさっぱりわかりませんでした。

ルーシーはすぐに身をかがめて、ビーバーさんのあとについて、はつて穴に入りました。そのうしろから、はう音、ハアハアという息の音が聞こえて、まもなくほかのみんなも入ってきました。

「いったいどこですか、ここは？」

ピーターの声がしました。暗やみのなかで、つかれて青ざめているように聞こえました。（青ざめた声ってどんな声か、みなさんにわかるかというのですが。）

「いざというときのための、ビーバーの古いかくれ場所です」と、ビーバーさん。「絶対秘密の場所です。たいしたところじゃないけれど、数時間、ねむらなければね。」

「出発するとき、あんなにひどくさわぎたてないでくれたら、まくらぐらい持ってきたのに」と、ビーバー夫人。

タムナスさんのすてきなほら穴とは比べものにならないな、とルーシーは思いました。地面に穴があいているだけで、かわいていて土のにおいがします。なかは、かなりせまかったので、みんなが横になると、ひと山の服のかたまりのようになりました。そのせいもあり、また、長いこと歩いてあたたまっていたせいもあつて、みんなはほかほかと気持ちよくなりました。ほら穴の床がごつごつしてさえいなければ

ばよかったのですが！

それからビーバー夫人が暗やみのなかで小さな水筒を出してくれたのを、みんなでまわして飲みました。それは、飲むと、むせたり、ふき出したり、のどがひりひりしたりするような飲みものでしたが、飲みくだしてみると、ほかほかとあったかい感じがしてきて、みんな、とたんにねむりに落ちました。

起きたのは、ほんのつぎの瞬間のようにルーシーには思いましたが、実際には何時間もたっていました。少し寒くて、体がひどくこわばっていて、熱いおふろに入りたいなんて思いながらねむりからさめると、ほおが長いひげでくすぐられるのを感じ、目をあけると、寒々とした日光がほら穴の入り口からさしこんでいるのが見えました。

はつとして、すっかり目をさますと、ほかのみんなも目をさましていました。

じつは、みんな身を起こして、口と目を大きくあけて、ある音に聞き耳をたてていたのです。ゆうべ歩いているあいだ、ときどき聞こえた気がして、ずっと気になっていたあの音に。

それは、シャンシャンと鳴る鈴の音でした。

ビーバーさんはその音を聞くやいなや、いなずまのようにほら穴から飛び出していきました。

ひよつとすると、ルーシーがちよつと思つたように、そんなことをしてはいけなないと、みなさんも思つたかもしれませぬね？ でも、それはとても分別のある行動だったのです。姿を見られずに、しげみやイバラのなかをくぐって斜面のてっぺんまでさつとよじのぼれることをビーバーさんは知っていました。そしてなにより、魔女のそりがどちらへむかつたのか見さだめておきたかったのです。ほかのみんなは、ほら穴のなかで、どうなることかと待っていました。

五分ほど待ったでしょうか。音が聞こえてきて、みんなはとてもしました。何人かの声がしたのです。

「ああ」と、ルーシーは思いました。「見つかつちやつたんだ。魔女につかまつた！」

その少しあとに、ほら穴のすぐ外からみんなに呼びかけるビーバーさんの大声が聞こえたときには、みんなとてもおどろきました。

「だいじょうぶだよ。出ておいで、おまえ。出ておいで、アダムのむすこさん、イブのむすめさんたち。だいじょうぶだ。ちがったよ、あの女、ちがう！」

もちろん、これは文法的にまちがった言いかたですが、興奮するとビーバーさんはこんな話しかたをするので、ナルニアではね——私たちの世界では、ふつうビーバーはぜんぜん話しませんけれど。

そこで、ビーバー夫人と子どもたちは、どつとほら穴から出てきました。みんな日光に目をパチパチさせ、土だらけで、かなりむれた感じで、髪もぼさぼさで、どろんとした目をしていました。

「おいで！ 見に来てごらん！ こいつは魔女にとっては痛い一撃だぞ！ 魔力が弱ってきているんだ」
と、さけんだビーバーさんは、おどろかしそうなくらい大よろこびしていました。

「どういうことですか、ビーバーさん？」

みんなで谷の急な斜面をのぼっていくとき、ピーターが息を切らしながらたずねました。

「言わなかったかね。」ビーバーさんが答えました。「魔女のせいで、いつも冬なのにクリスマスは来なくなっちまったって？ 言わなかったかね？ ところがどっこい、見てごらん！」

そのとき、すっかり斜面の上までのぼりきっていたみんなは、見たのです。

そりがありました。鈴をつけたトナカイたちもいました。でも、魔女のトナカイたちよりもずっと大きく、毛の色は白ではなく茶色でした。そして、そりにすわっていた人物は、だれもが一目でだれだかわかる人でした。明るいまっ赤なローブを着て（ヒイラギの赤い実のよう

うに明るい色です）、内側に毛皮がついたフードをかぶり、滝のように胸にひろがるりっぱな白ひげを生やした大きな人でした。



ナルニアに來ないと会えない人ですが、それでも、だれもが知っている人でした。私たちの世界でも——つまり、たんすのとびらのこちら側の世界でも——その人の絵を見たり、話を聞いたりしているからです。でも、ナルニアで実際に会ってみると、全然ちがう感じがします。私たちの世界では、サンタクロースの絵は、ただのごきげんなおもしろい人のようにえがかれていますが、こうして本物を目の前にしてみると、全然ちがうのです。実際にその前に立ってみると、とても大きくて、陽気で、本当に生きているので、子どもたちは感動のあまり動けなくなっていました。会えてとてもうれしかったのですが、おごそかな気分にもなったのです。

「とうとうやってきたよ」と、サンタさんは言いました。「魔女のせいで、なかなか入れなかったが、ようやく入りこめた。アスランが動いている。魔女の魔法が弱まっているんだ。」

ルーシーは、おごそかにじつとしているときにだけやってくるあの深いよろこびのふるえが、さあつと体じゅうを走りぬけるのを感じました。

「さあて」と、サンタさん。「みんなにプレゼントをあげよう。ビーバー夫人には、もつといい新品のミシンだ。通りがかりにお宅にとどけておくよ。」

ビーバー夫人は、あしを折り曲げて、女らしくおじぎをしながら言いました。

「もうしわけございませんが、ドアにかぎがかかっております。」

「かぎだの、錠だのは、わしには関係ないよ。それから、ビーバーさん、あなたは、家に帰ったら、新しいダムが完成しているのをごらんになるだろうて。修理もすんで、水もれするところはぜんぶなくなつて、新しい水門がついているよ。」

ビーバーさんは、とてもうれしくなつて大きな口をあけたのですが、なんと書いていいかわかりませんでした。

「ピーター、アダムのむすこよ」と、サンタさん。

「はい」と、ピーター。

「これがおまえさんへのプレゼントだ。こいつは、おもちゃじゃない、本物の武器だ。これを使うときに、まもなくやってこよう。しつかり持っているのだぞ。」

そう言うとき、サンタさんはピーターに、たてと剣をわたしました。

たては銀色で、まっ赤なライオンがうしろ足で立ちあがった絵がえがかれていました。つんだばかりの熟したイチゴのような明るい赤でした。

剣のつかは金でできていて、さややベルトなど必要なものがすべてついていましたし、ピーターが使うのにちょうどいい大きさと重さでした。ピーターはだまつてうやうやしくこれらの贈り物を受け取りましたが、それというのも、これはとても重大な贈り物だと感じたからでした。

「イブのむすめ、スーザンよ」と、サンタさん。「これをおまえさんにあげよう。」

そう言うとき、サンタさんはスーザンに弓と、矢がいっぱい入った矢筒と、小さな象牙の角笛を手わたしました。

「弓を使うのは、どうしても必要なときだけだぞ」と、サンタさんは念おしました。「おまえさんに、戦で戦ってもらおうというわけじゃないからな。射れば、まず、はずれっこなしだ。それから、この角笛をくちびるにあててふけば、おまえさんがどこにしようと、助けが来るだろうて。」

最後にサンタさんは言いました。

「イブのむすめ、ルーシーよ。」

ルーシーが進み出ました。サンタさんはルーシーに、ガラスでできているような小びん（ダイヤモンドでできているという話もあとで語られるようになりますが）と、小さな短剣をあたえました。サンタさんはこう言いました。

「このびんには、太陽の山に生える火の花のしるからできた薬が入っている。もしおまえさんかお友だちが傷ついたら、これを数てきたら

してやれば、なおる。それから短剣^{たんけん}は、やむをえないときの護身用^{ごしんよう}だ。おまえさんも、戦^{いくさ}には参加^{さんか}せんからな。」
「どうしてでしょうか」と、ルーシーはたずねました。「あたし——わからないけど、あたしだって勇気^{ゆうき}を出^だせるとおもいます。」
「そういう問題^{もんだい}じゃない」と、サンタさんは言^いいました。「女^{おんな}の人^{ひと}が戦^{たたか}うと、戦^{いくさ}は、みにくいものになる。さあて。」



ここで、ふつとサンタさんはきびしい表情をやわらげました。

「さあ、とりあえず、みんなにこれを食べてもらわなきゃな！」

サンタさんが取り出したのは（背中にかついだ大きな袋から出したのだと思うのですが、実際に出すところを見た人はいませんでした）、大きなおぼんで、その上に五つのティーカップのセット、小鉢に盛られた角砂糖、小さな器に入ったクリーム、しゅうしゅう湯気をあげてかんかんに熱い特大のティーポットがのっていました。

それから、サンタさんが、

「メリークリスマス！ まことの王さま、ばんざい！」

ときけば、むちをピシリと鳴らすと、サンタさんもトナカイもそりもみんな、たちどころに消えてしまいました。あつ消えてしまふ、と思間もありませんでした。

ピーターが剣をさやからぬいてビーバーさんに見せていたときに、ビーバー夫人が言いました。

「さて、さて！ そんなところで立ち話をしていたら、お茶が冷めてしまいますよ。まったく男の人というのは。さ、おぼんを運ぶお手伝いをしてちょうだい。朝ごはんにしましょう。パン切りナイフをもつてこようと思いついていて、ほんとによかったわ。」

そこで、みんなは急な斜面をおりて、ほら穴にもどり、ビーバーさんはパンとハムを切つてサンドイッチにし、ビーバー夫人はお茶をついで、みんなでおいしく朝ごはんをいただきました。

でも、食べおわるとすぐに、ビーバーさんは言いました。

「さあ、出発の時間だ。」

いっぽう、エドマンドはさんざんな目にあっていました。こびとがその用意をしに行ったとき、きつと魔女は以前のようにやさしくしてくれると思っていたのに、ひとことも言葉をかけてくれなかったのです。

とうとうエドマンドが勇気をふりしぼって、

「どうか陛下、ターキツシュ・デイライトを少しだけませんか？ あもう、陛下は……陛下は……この前、そうおっしゃって……」

と言うと、魔女は「だまっている、ばかもの！」と、答えました。それから、どうやら気が変わったらしく、まるでひとりごつのように、こうつぶやきました。

「でも、とちゅうでこのガキに気をうしなわれてもこまるし。」

そして、もう一度手をたたくと、別のこびとがあらわれました。

「この人間に、食べ物と飲み物を持ってきておやり」と、魔女。

こびとは立ち去ると、まもなく鉄のおわんに水を入れて、鉄のお皿にかわいたパンの大きなかたまりをのせて持ってきました。こびとはエドマンドの足もとにそれらを置きながら、いやな感じでやりと笑っていました。

「小さな王子さまへ、ターキツシュ・デイライトでござあい。へ、へ、へ！」

「いらないよ。カチカチのパンなんか」と、エドマンドはふくれつつらをしました。

しかし、魔女があまりにおそろしい表情を顔にうかべて、キツとこちらをふりかえったので、エドマンドはごめんなさいと言ってパンにかじりつきました。あまりにもカチカチだったので、なかなかのみくだせませんでした。

「こんど、いつまたパンを食べられるかわからぬのだから、ありがたいと思って食べ」と、魔女は言いました。

エドマンドがまだもぐもぐやっているうちに、最初のこびとがもどってきて、そりの用意ができましたと告げました。

白の魔女は立ちあがり、エドマンドについてこいと命じて出ていきました。

中庭に出ると、また雪が降っていましたが、魔女はそんなことを気にもとめずに、そりの自分の横の席にエドマンドをすわらせました。

しかし、出発前に魔女の秘密警察長官のモーグリムを呼んだので、モーグリムがそりの横へ巨大な犬のようにはねてきました。

魔女は言いました。

「いちばん足の速いオオカミをつれて、ビーバーの家へ急行せよ。そして、そこにいる者をみな殺しにするのだ。もし、もぬけのからであつたら、全速力で石舞台へ行け。だが、見られないようにして行くのだ。そこで、わたくしが行くまで身をひそめている。わたくしはそのあいだに何キロも西へ進み、川を横切れる道を見つけねばならない。おまえたちは、あの人間どもが石舞台に着くより先にやつらに追いつくのだ。見つけたらどうすればよいか、わかっているな！」

「わかつております、女王さま。」

オオカミはうなりました。そしてただちに、疾走する馬のようにすばやく、雪の暗やみのなかへ消えていきました。

数分後には、モーグリムは別のオオカミたちをつれて、ダムまで来ており、ビーバーの家をさがしてクンクンとかぎまわっていました。

でも、もちろん、家を見つけても、なかは空でした。

その夜、もし天気がよかつたら、オオカミたちは足あとを見つけて、ビーバー夫妻と子どもたちはおそろしい目にあつたことでしょう。

まずまちがいなく、ほら穴にたどり着く前に追いつかれていたところです。でも、雪がまた降りはじめてくれたので、においは消え、足あとも見えなくなっていたのです。

いっぽう、こびとはトナカイたちにむちを当て、そりに乗った魔女とエドマンドは城の門を飛び出して、冷たい闇のなかへと進んでいきましました。

これは、コートを着ていないエドマンドにとって、ひどい旅でした。十五分も行かないうちに、エドマンドの体の前はすっかり雪だらけになってしまったのです。はらつても、はらつても、またすぐに新しい雪がどんどんつもってしまうので、くたびれて、はらいのけるのもやめました。そのうちに、服のなかまでぐつしよりとぬれてしまいました。

ああ、なんとみじめなエドマンド！ もはや、魔女がエドマンドを王さまにしてくれそうには思えませんでした。魔女がいい人でやさしくて、本当は正しい側なんだと信じこもうとして自分に言いきかせてきたことはみんな、今となってはばかげていたように思えました。今、たった今、きょうだいたちに会えるなら、なにを手ばなしてもいいと思いました——ピーターでもいいから会いたい！

こうなると、なにもかも夢で、今すぐにも目がさめるはずだと思いこむぐらいしかできません。実際、何時間も進むにつれて、なにもかも夢のように思えてきました。

このエドマンドのつらい旅は、私が何ページも何ページも書いたとしても、とても言いあらわせないほど長くつづいたのですが、時間はしよって、雪がやんで朝になってもまだそりは朝日をあびて進んでいた、というところへ話をうつしましょう。まだまだ旅はつづいており、聞こえる音といえば、あいかわらずシューとそりが雪をかきわけける音、トナカイの馬具がキイキイときしむ音ばかりでした。そしてついに、魔女が言いました。

「これはなんだ？ とまれ！」

そりはとまりました。

魔女が朝ごはんのことを言ってくれないかしらと、エドモンドはどれほどねがったことでしょう！

でも、とまったのは、まったくほかのわけがあつたからでした。少し先にある木の根もとで、楽しそうな集まりがひらかれていたのです。リスのお父さんとお母さんと子どもたち、それから森の精霊サテュロスふたりと、こびとひとりと、一匹のキツネのおじいさんが、テーブルを囲んでこしかけにすわっていました。

みんながなにを食べているのか、エドモンドにはよく見えませんでしたがおいしそうなにおいがして、ヒイラギの葉のかざりものがあるようでしたし、プラムがいつぱい入ったクリスマスケーキが見えたような気がしなくてもありません。

そりがとまったとき、見るからにいちばん年寄りのキツネが、ちようど立ちあがつて右の前足でグラスをかかげて、これからなにか言うとしていたようでした。でも、そりがとまって、だれが乗っているのかわかると、みんなの顔から笑顔がすうつと消えてしまいました。お父さんリスは、口に食べ物を運んでいたフォークをとちゆうでとめ、サテュロスのひとりには口にフォークを入れたところとまり、赤ちゃんリスたちはこわくて泣きはじめました。

「これはどういうことだ？」

魔女の女王がたずねました。だれも返事をしません。

「言え、虫けらども！ さもないと、わがこびとがむちを使つて、おまえたちに舌がないのかたしかめようぞ。このようにがつがつと、勝手に、むだな食事をしていとはどういうことだ？ どこでそれを手に入れた？」

「どうか、陛下」と、キツネが言いました。「いただいたのです。もし、陛下の健康に祝杯をあげるおゆるしをいただければ――」

「だれからもらつた？」と、魔女。

「サ、サ、サ、サンタクロースからです。」

「なんだと？」

魔女はわめいて、そりからとびおりと、おびえきつていゝ動物たちにつかつかと近づきました。

「こんなところにいたはずがない！　ありえぬ！　よくもおまえたち……いやいや。うそをついたとみとめれば、ゆるしてやろう。」
その瞬間、幼いリスの一匹がすっかりおかしくなつてしまいました。

「サンタさん、来たもん——来たもん——来たもん！」

子リスは、小さなスプーンでテーブルをたたきながら、キーキー声をあげました。

魔女がくちびるをガツとかみしめたために、その白いほおに、血がひとしずく、ぴしりと飛ぶのをエドマンドは見ました。魔女は杖をふりあげました。



「ああ、やめて、やめて、どうかやめて！」

エドマンドはさけびましたが、そのさけび声もむなしく、魔女は杖をふりおろし、そこにいた楽しそうな一団はたちまち石像に変わってしまい、みんなが囲むテーブルも、その上のお皿やクリスマスケーキも石になってしまったのです。（そのうちのひとり、石のフオークを石の口へ運ぼうとするところで永遠にとまってしまいました。）

「そして、おまえは、」

と、魔女は、そりにもどつてくるなりエドマンドの顔を目が回るほどひっぱたいて言いました。

「スパイやうらぎりものをゆるしてくれとたのんだりするとどうなるか、これで思い知るがいい。進め！」

このときエドマンドは、この物語のなかではじめて、自分以外のだれかをかわいそうに思つたのでした。これから先何年も何年も、あの小さな石の像たちが、昼は口もきけず、夜は暗いなかで、ずっといつまでもあそこにすわりつづけ、やがては、コケがむして、ついには顔がぼろぼろとくずれ落ちてしまうのだと思うだけでかわいそうになったのです。

ふたたび、そりはどんどん進んでいきました。やがてエドマンドは、そりがけたてる雪が、昨日の夜じゆう降つていた雪よりもずっと水っぽいことに気がつききました。同時に気がついたのは、それほど寒くなくなってきたことです。しかも、霧が出てきました。じつのところ、刻一刻と、霧が濃くなり、あたたかくなつてきていました。

そのうえ、そりは、今までのような走りっぷりではなくなつてきていました。最初は、トナカイがつかれたのかと思いましたが、そのうちに、それが本当の理由ではないことにエドマンドは気がつきました。そりは、石にぶつかっているかのように、ガクンとなり、横すべりし、はげしく上下にゆれていたのです。こびとがかわいそうなトナカイにどんなにむちを当てようと、そりはどんどんおそくなつていきました。

あちらこちらで、なんだか気になるふしぎな音もしていましたが、そりがすべる音、がたがたとゆれる音、こびとがトナカイをどなりつ

ける声のせいで、エドマンドにはそれがなんだかわかりませんでした。とつぜん、そりがガシツとなにかに引つかかつてしまつてまつたく動けなくなり、一瞬しんとしました。その沈黙のなかで、ついにその音がはつきり聞こえました。

ふしぎな、気持ちのよい、さらさら、ぴちゃぴちゃという音——とは言つても、それほどふしぎな音でもありません。だつて前に聞いたことがある音なのです——どこで聞いたのか、思い出せさえしたらいいのに！ そのとき、ふいにエドマンドは思い出しました。

それは、水のせせらぐ音だつたのです。

目には見えないけれど、あたり一面、さらさら、ぴちゃぴちゃ、ぶくぶく、ぱしゃぱしゃと音がしていて、（遠くでは）ごうごうと流れてさえいるようです。

こおりつく寒さがおわたつたのだとわかると、エドマンドの心臓は（なぜかわかりませんが）どきんと、とびあがりました。しかも、すぐ近くでは、あちこちの木々の枝から、ぽたん、ぽたん、ぽたんと水滴がしたたり落ちているではありませんか。ちょうど一本の木に目をやつたとき、その木から大きな雪のかたまりがどきつと落ちて、エドマンドはナルニアに足をふみ入れてからはじめてモミの木の濃い緑色を見ました。でも、それ以上耳をかたむけたり見つめたりする時間はありませんでした。魔女がこう言つたのです。

「ぼうつとするな、ばかもの！ 手伝え！」

もちろん、エドマンドは言うとおりにしなければなりませんでした。

エドマンドは雪——もうすつかり、ぐじゃぐじゃに解けていました——のなかに足をふみ入れ、どろだらけの穴にはまつたそりをこびとが引き出そうとしているのに手を貸しました。ようやく引き出すと、こびとはトナカイにずいぶん乱暴な仕打ちをしてふたたびそりを動かし、少し先へ進ませました。

雪はもうすつかり解けていて、地面のあちらこちらから緑の草がちらほらと見えはじめていました。エドマンドのように雪の世界を長いことじいつと見つめてきた者でなければ、はてしない白がおわつてついにこうした緑の点々が見えてくることがどんなにほつとすることか、

なかなかわからないでしょう。

しばらくして、また、そりがとまりました。

「だめです、陛下」と、こびと。「こんなに雪が解けてしまつては、そりでは進めません。」

「では、歩くしかあるまい」と、魔女。

「歩いていては追いつけませんよ。」こびとはぶつぶつと言いました。「やつらのほうが先に出てますからね。」

「おまえはわたくしに意見するののか、どれいのくせに？」と、魔女。「言われたとおりにしろ。その人間の手をうしろ手にしぼり、なわの先を持て。それからむちを持て。そして、トナカイの馬具を切れ。トナカイどもは勝手に家に帰るであらう。」

こびとは言われたとおりにし、数分後にエドマンドはうしろ手にしぼられたまま、思い切りせきたてられて歩かされていきました。ぐじやぐじやの雪や、どろや、ぬれた草で足をすべらせ、すべるたびにこびとにののしられ、ときにはむちでたたかれました。魔女はこびととうしろから歩き、「急げ！ 急げ！」と言いつづけていました。

刻一刻と、あちこちに見えていた緑の面積が大きくなり、雪の面積が小さくなっていきました。刻一刻と、より多くの木々が雪の衣をはらい落としました。

そのうちに、見わたすかぎり白だった世界に、モミの木の深緑や、はだかのカシやブナやニレの木の黒くごつごつした枝が見えてきました。やがて、霧が白から金色に変わったかと思うと、まもなくすっかり晴れわたりました。

気持ちのよい日光がさんさんと森の地面にさしこみ、頭上には木々のこずえのあいだから青空がのぞきました。

そのうちに、もつとすばらしいことが起こりました。ふと角を曲がって、白樺で囲まれた空き地に出ると、その地面はあたり一面、小さな黄色の花でおおわれていたのです。

キンポウゲです。水の音が大きくなってきました。しばらくして三人は、本当に流れている小さな川をわたりました。わたった先には、

マツユキソウ（スノードロップ）が生えていました。

その花を見ようとエドマンドが顔をそちらにむけると、「よそ見をするな！」と、こびとが言つて、なわをいやらしくぐいつと引っぱりました。

でも、もちろん、それぐらいのことでエドマンドが花を見られなくなることはありませんでした。五分もすると、こんどは古い木の根もとにクロッカスが十二本ほど生えているではありませんか。金とむらさきと白のクロッカスです。

それから、水の音よりも、もつとすてきな音が聞こえました。歩いている道のすぐそばの木の枝から、小鳥がとつぜんさえずったのです。それにこたえて、少しはなれたところから別の小鳥がさえずりました。

まるでそれが合図であつたかのように、あちらこちらからピーピーピヨピヨ、どつと鳴きだして合唱になつたかと思うと、五分もしないうちに森じゅうに小鳥の歌が鳴りひびきました。どこに目をむけても、小鳥たちが枝移りをしたり、頭の上を飛んだり、追いかけてあつたり、つつきあつたり、くちばしで羽づくろいをしたりしているのが見えます。

「急げ！急げ！」と、魔女が言いました。

もはや霧は、かげも形もありませんでした。空はどんどん青くすみわたり、ときどき白い雲がすうつと通りすぎることもありました。ひろい野原にはサクラソウ（プリムローズ）がさいっていました。そよ風がふいて、ゆれる枝からしずくを飛ばし、冷たくてかぐわしいにおいを、歩く三人の顔に運びました。

木々はすっかり生き生きとしてきました。カラマツとカバノキは緑でおおわれ、キングサリの木からは金色の花房がたれさがりました。やがて、ブナの木がうすくてすきとおった葉をのばしました。その下を通ると、光もまた緑になりました。ハチがその光の通り道をブンブンと横切りました。

こびとが急にとまって言いました。

「雪^{ゆき}が解^とけただけじゃありません。春^{はる}になったのです。どうしましょう？ あなたさまの冬^{ふゆ}がやぶられたんですよ！ こいつはアスランのしわざです。」

「おまえたちのどちらであれ、その名前^{なまえ}をもう一度^{いちど}言^いった者^{もの}は——」

と、魔女^{まじよ}が言^いいました。

「即刻^{そつこく}、殺^{ころ}す。」

12

ピーターの初陣^{ういじん}

こびとと魔女^{まじよ}がそんなことを言^いっているあいだ、ずっと遠^とくでは、ビーバー夫妻^{ふさい}と子どもたちが、すてきな夢^{ゆめ}のような世界^{せかい}を、何時間^{なんじかん}も歩^{ある}きつづけていました。

みんな、コートはずつと前^{まえ}にぬぎすてていました。さつきまで、おたがい、

「見^みて！ カワセミだよ。」

「あら、ツリガネソウだわ！」

「このあまいかおりは、なにかな？」

「ね、あのツグミの声^{こえ}を聞^きいて！」

などと言^いいあっていたのに、今^{いま}はそれさえやめてしまつて、楽^{たの}しい気分^{きぶん}にひたりながら、だまつて歩^{ある}きつづけていました。

あたたかい日^ひだまりをぬけて、すずしい緑^{みどり}の雑木林^{ぞうきばやし}に入^{はい}り、コケの生^はえたひろい空地^{あち}に出^でると、そこには背^せの高いニレの木^きが頭上^{ずじょう}高くに葉^はっぱの屋根^{やね}をかかげていました。そこから先^{さき}は、あたり一面^{いちめん}アカスグリの花^{はな}がさきみだれているところに出^でたり、サンザシのあまいかおりがむせぶほどいつぱいにひろがつたしげみに出^でたりしました。

冬^{ふゆ}が消^きえうせて、数時間^{すうじかん}のうちに森全体^{もりぜんたい}が一月^{がつ}から五月^{がつ}に変わ^かつてしまつたのを見^みて、みんなはエドマンドと同じく^{おな}、あつけにとられて

いました。アスランがやってくるとうなるのだということを、みんなは（魔女のように）はつきりとわかつていませんでした。でも、はてしない冬を生み出したのが魔女の魔法であることは知っていましたから、このふしぎな春がはじまったということは、魔女のたくらみがおかしくなつて、かなりだめになつてゐるのだとわかりました。

雪がどんどん解けていくと、魔女がもうそりを使えないということもわかりましたので、それからあまり急がずに、休みもたびたび、ゆつくり取ることになりました。もちろん、みんなすでにずいぶんくたびれていたのですが、へばつてしまつたというわけではありません。ただ、一日じゅう外ではたらいでいた者が一日のおわりに感じるように、けだるくて、ぼうつとして、心がおだやかになつていました。スーザンは、片方のかかちに小さなまめができていました。

大きな川沿いの道からは、とつくにはなれていました。石舞台に行くには少し右（つまり、少し南）へ行かなければならなかつたからです。たとえば右へ行かなくてよかつたとしても、いったん雪解けがはじまつてしまうと、谷の川沿いの道は使えなかつたでしょう。雪がどつと解けて、川がたちまち氾濫して、すばらしくごうごうなるような、とどろく黄色の洪水が起こつて、道をのみこんでしまつたはずだからです。

さて、太陽は低く落ち、その光は赤みがかつて、かげが長くなり、花はそろそろ閉じようかなと思ひはじめていました。

「もうすぐだよ。」

ビーバーさんはそう言うのと、ふかふかの、はずむようなコケをふみしめ（つかれた足には気持ちのよいものでした）、背の高い木だけがあちらこちらにぼつりぼつりと生えている、とても急な坂をのぼつていきました。長かつた一日が暮れようというときに、こうやつて坂道をのぼつたので、みんな、はあはあと息が切れました。ちょうどルーシーが、もう一度ちゃんとこしをおろしてお休みしないと上まで行けないんじゃないかしらと思ひはじめたとき、ふと気がつけば、みんなは丘のてっぺんにいたのでした。そこで見えたのは、こんな景色でした。

そこは緑の原っぱでした。どちらをむいても、ずっと森がひろがっています。ただし、まっすぐ前、東の方向はちがいました。はるか東に、なにかきらきらするものが見えるのです。

「うわあ。海だ！」

ピーターがスーザンにささやきました。

この丘の頂上のひろびろとした原っぱのまんなかにあったのが、石舞台です。それは、四本の石のあしにささえられた、灰色の大きくてがんじょうな石の厚い板でした。とても古めかしいもので、いたるところに読めない文字のような奇妙な線や形がぎざまれています。その線や形を見ると、ふしぎな気持ちになります。

つぎにみんなが見たのは、原っぱの片はしに張られている大きなテントでした。りっぱなテントで、とくに黄色の絹のようなテントの布、紅の綱、象牙色の留め杭が、夕日に映えてきれいでした。その上に高くのびたさおには、うしろ足で立ちあがった赤いライオンがえがかれた旗が、はるかな海からみんなの顔にふきつける潮風にぱたぱたとはためいていました。それを見あげていると、右手から音楽が聞こえてきました。ふりむくと、みんなが会いにやってきた相手が、そこにいました。

動物たちがむらがるまんやかに、アスランが立っていたのです。



動物たちは半月形に隊列を作ってアスランを取りかこんでおり、弦楽器を手にした木の精の女の人たちや泉の精の女の人たちもいました。
(私たちの世界ではドリユアス、ナーイアスと呼ばれる妖精たちです。) 音楽を奏でていたのは、このひとたちだったのです。四人の大きな
ケンタウロスもいました。下半身の馬になっているところは、イングランドの大きな農馬のようで、上半身の人の姿のところは、いかめしくも
美しい巨人のようでした。一角獣もいれば、人の頭をした牡牛もあり、ペリカンも、ワシも、巨大な犬もいました。アスランのとなりには
二頭のヒョウがひかえ、一頭がアスランの王冠を、もう一頭が王の旗を持っていました。
けれども、アスラン自身に対しては、ビーバー夫妻も子どもたちも、お会いしてどうしたらいいのか、なにを言ったらいいのかわかりま

せんでした。ナルニアに行つたことのない人たちは、善でありながらおそろしいものなんてありえないと思います。子どもたちもこれまでそう考えていたかもしれませんが、今、そんなこともありうるのだと、思い知りました。

子どもたちは、アスランの顔を見ようとしたのに、黄金のたてがみと、王さまらしい、おごそかで威厳のある大きな目をちらりと見るのがせいじっぱいで、とてもアスランを見つめられず、わなわたとふるえあがつてしまったのです。

「どうぞ前へ」と、ビーバーさんが言いました。

「いえいえ」と、ピーターがささやきました。「お先にどうぞ。」

「いや。動物よりもアダムのみすこさんが先です。」ビーバーさんがささやきかえしました。

「スーザン、」ピーターがささやきました。「きみはどう？ レイデイズ・ファーストだ。」

「なに言ってるの、いちばん年上は、あなたでしょ」と、スーザンがささやきました。

そして、当然ながら、こんなことをつづけていればいるほど、みんなますますこちない思いになりました。そこでついにピーターが、自分がなんとかしなければならぬと思ひたりしました。ピーターは剣をぬくと高くかかげて敬礼し、あわただしくみんなに言いました。

「行くぞ。しやんとしろ。」

ピーターは、ライオンの前に歩み出て言いました。

「ただいま、まいりました、アスラン。」

「よく来た、ピーター、アダムのみすこよ」と、アスラン。「よく来た、スーザンとルーシー、イブのみすめたちよ。よく来た、おすビーバーとめすビーバー。」

その声は深くて朗々としていて、どういうわけかみんなをおちつかせました。みんな、ようやくうれしくて静かな心持ちになり、そこに立つてなにも言わないでいても、どぎまぎしなくなりました。

「だが、四人めはどこだ？」

アスランは、たずねました。

「みんなをうらぎって、白の魔女の味方をしたんです、おお、アスランよ。」

ビーバーさんが言うのと、ピーターは思わず、こうつぶやきました。

「それはぼくのせいでもあるんです、アスラン。ぼくが弟をしかりつけたから、それでへんなふうになってしまったんです。」

アスランはピーターをゆるしも責めもせず、ただ大きな、まじろぎしない目で、じつとピーターを見つめて立っていました。なんにも言うべきことはないのだと、みんなは感じました。

「どうか、アスラン」と、ルーシー。「エドマンドを救うために、なにかできませんか？」

「あらゆる手をつくそう」と、アスラン。「だが、思いのほか、むずかしいかもしれぬ。」

それからアスランは、またしばらくだまりました。

そのときまで、ルーシーは、アスランの顔はなんて威厳があつて、強く、おだやかなんだろうと思っていました。が、今ふいに、悲しうでもあるなと感じました。でもつぎの瞬間、その表情はすっかり消えていました。

ライオンはたてがみをふるって、前足と前足を打ちあわせて（「こわい足だわ」と、ルーシーは思いました。「ベルベットみたいにやわらかくなっているからいいけれど！」）、それからこう言いました。

「まずは、ごちそうのしたくだ。ご婦人がた、このイブのむすめたちをテントにおつれし、お世話をなさい。」

女の子たちが立ち去ると、アスランはその前足を——ベルベットのようになっても、とても重たい足でした——ピーターの肩に置いて言いました。

「おいで、アダムのむすこよ。きみが王となる城を遠くから見せてあげよう。」

そこでピーターは、ぬき身の剣をにぎったまま、ライオンといつしよに丘の頂上の東のはしへ行きました。
すると、美しい光景が目に入ってきました。ちょうど太陽が背後でしずもうとしていました。つまり、下にひろがる国全体が——森から、
丘から、谷から、銀色のへびのようによろとのびていく大河の下流にいたるまで——夕焼けの光に照らされ、かがやいていたので
す。それらのむこう、何キロも先には、海があり、海のむこうには空があつて、ちょうど夕映えでバラ色に染まった雲がいつぱいうかんで
いました。そして、ナルニアの大地が海に出会うところ——つまり、大河の河口付近には——小さな丘の上でなにかが光っていました。
それは、城でした。

そうです、ピーターのうしろにある夕日から差す光が、城の窓という窓にきらきらと反射していたのです。ピーターには、大きな星がひ
とつ、海辺にうかんでいるように見えました。



「あれこそが、」と、アスラン。「四つの玉座があるケア・パラベルだ。その玉座のひとつにきみが王としてすわらねばならない。きみにあれを見せたのは、きみがいちばん年上で、ほかのみんなをしたがえる最高の王となるからだ。」

やはりピーターは、なにも言いませんでした。というのも、そのとき、ふしぎな音がとつぜん、しじまをやぶったからです。軍隊ラツパのようでしたが、もつと深く美しい音でした。

「妹さんの角笛だ。」

アスランはピーターに低い声で言いました。あまりに低かったので、ライオンをネコとくらべるのが失礼でなければ、ネコのようにごろごろとのどを鳴らしたのかと思えるほどでした。

しばらくのあいだ、ピーターには、わけがわかりませんでした。それでも、ほかの生き物たちがみんな前へ進んでいくのを目にし、アスランが前足をふって、

「もどれ！ 王子にはじめての手がらを立てさせてやれ」

と言うのを聞いたとき、ようやく事態がのみこめて、全速力でテントへかけつけました。

おそろしい光景が目飛びこんできました。

泉の精と木の精たちがあちらこちらへにげまどっていました。ルーシーは短いあしで、けんめいにピーターのほうにかけてきましたが、その顔は紙のようにまっ白でした。スーザンは？ と見れば、一本の木を目標してダッシュして、木にとびついてぶらさがりましたが、なにやら大きな灰色のけものに追われているではありませんか。

はじめ、ピーターは、クマかなと思ひ、それからシェパード犬に似ていると思いました。犬にしては大きすぎます。やつと、それはオオカミだとわかりました。

オオカミがうしろ足で立ち、前足で木の幹をひっかき、歯をむき出してうなっているのです。背中の中はすべて逆立っています。スーザ

ンはふたつめの大きな枝までしか、のぼれていません。片足が、がぶりと食らいつこうとする歯の数センチ先にぶらさがっています。どうしてもっと高くのぼらないんだ、もつとしつかりと足をかけろとピーターは思いましたが、スーザンが気をうしないかけていることに気がつきました。もし気をうしなったら、落っこちてしまいます。

ピーターは、あまり勇かなな気持ちになれませんでした。それどころか、気分が悪くなりそうでした。でも、やらねばならないことは、やらねばなりません。

ピーターは、まっすぐ怪物に突進し、そのわき腹めがけて剣をふるいましたが、空ぶりでした。オオカミには当たっていません。オオカミは、ものすごいいきおいでふりかえり、燃える目をして、口を大きくあけて、怒りのあまり、ほえました。ほえずにいられないほど怒りくるっていなければ、きつとピーターののどにがぶりとかみついていたことでしょう。

ほえてくれたので、ピーターにはひよいと身をしずめて、野獣の前足のあいだから心臓に達するまで、ぐさりと剣をつきさす時間がありました。ただ、なにもかも、あつというまの出来事で、考える間もありませんでした。

それから、まるで悪夢のような、おそろしい、混乱した瞬間がやってきました。剣をぐいぐい引っぱったのですが、オオカミは生きているのやら、死んでいるのやら、そのむき出しの歯がピーターのひたいにがつんと当たり、ピーターは血だらけ毛だらけで汗だくになって、なにがなにやらわかりませんでした。

しばらくして、ピーターは、怪物が横たわって死んでいることに気がつきました。剣はもうぬけています。ピーターは背をのぼし、顔や目から汗をぬぐいました。もう、へとへとでした。

ややあつて、スーザンが木からおりてきました。スーザンとピーターは顔を見あわせると、がくがくとうちふるえて、思わずおたがいにキスをしたり泣いたりしました。ナルニアではそういうことをしてもはずかしくはなかったのです。

「急げ！ 急げ！」

アスランのさけび声がしました。

「ケンタウロスよ！ ワシよ！ やぶのなかにオオカミがもう一匹いるぞ。そこだ——うしろだ。今、飛び出していった。追え、みんな。やつは主人の魔女のところへ行くぞ。このチャンスをつかんで魔女を見つけ出し、四人めのアダムのむすこを救え。」
だれよりも速い十二、三の生き物が、すぐにひづめをとどろかせ、つばさを打ち鳴らして、どんどん暗くなつていく闇のなかへ消えていきました。

ピーターが、息切れしたままふりかえると、すぐ近くにアスランがいるのを見えました。

「剣をぬぐい忘れているぞ」と、アスラン。

そのとおりでした。きらめく刃を見てみると、オオカミの毛や血でよごれています。ピーターは顔を赤らめました。身をかがめて、草で剣をきれいにぬぐい、上着でふいて、しめり気をすっかり取りました。

「それをこちらにわたしてひざまずきなさい、アダムのむすこよ」と、アスラン。

ピーターが剣をわたすと、アスランは刃の平たい部分でピーターの肩をたたいて、「立て、オオカミ退治の騎士、サー・ピーターよ」と言つて、ピーターを騎士にしました。それから、こう言いました。

「なにがあらうと、剣をぬぐうのを忘れるな。」

時^{とき}のはじまりからある、深遠^{しんえん}なる魔法^{まほう}

さて、話を^{はなし}エドマンドにもどしましょう。もう歩^{ある}けないというエドマンドをむりやり追^おいたてて歩^{ある}かせていた魔法^{まじよ}は、とうとう、モミの木^きやイチイの木^きでおおわれた暗^{くら}い谷^{たに}で立^たちどまりました。

エドマンドは顔^{かお}を地面^{じめん}につけて、うつむけにへたりこんで、このまま寝^ねかしておいてくれさえすれば、どうなろうとかまわないとばかりに動^{うご}かなくなりました。もう、ふらふらで、おなががすいてのどがかわいていることも、わからないほどでした。

魔法^{まじよ}とこびとは、すぐ近^{ちか}くでひそひそと話^{はな}しています。

「いいえ」と、こびと。「もうむだです、女王^{じようおう}陛下^{へいか}。やつらは今^{いま}ごろ石^{いし}舞台^{ぶたい}に着^ついているはずです。」

「モーグリムが、においでわれらの居^い場所^{ばしょ}をつきとめ、知^しらせをとどけてくれるかもしれぬ」と、魔法^{まじよ}。

「であつても、よい知^しらせではないでしょう。」

「ケア・パラベルの四^よつの玉座^{ぎよくざ}が三^{さん}つうまつたところでどうというのだ？ それでは予言^{よげん}は成^じ就^{じゆ}せぬ。」

「あいつが来^きたとあつては、そんな予言^{よげん}は問^{もん}題^{だい}ではありませんまい？」と、こびと。まだ、アスランの名^な前^{まえ}を主^{しゅ}人^{じん}に言^いつてはならないと考^{かん}えていたのです。

「あいつは、いつまでもナルニアにはおるまい。あいつがいなくなつたら——ケア・パラベルにいる三人^{さんにん}をおそうのだ。」

「ですが、こいつは」と、エドマンドをけつてこびとが言いました。「生かしておいて、取り引きしたほうがよさそうですね。」

「ほう！　それで、やつらに助け出させようというのか。」

魔女は、ばかにしたようにこびとに言いました。

「それなら、やるべきことを、さつさとやってしまったほうがようございましょう。」

「石舞台でやりたいところだ。あそこが正式な場所なのだ。これまでもずっとあそこでなされてきたことだ。」

「石舞台がその本来の使いかたをされるのは、ずっと先のことになりそうですね」と、こびと。

「そうだな」と、魔女は言い、それから、「では、はじめるとしよう」とつづけました。

その瞬間、一匹のオオカミが、うなり声をあげながら、ふたりのもとに飛びこんできました。

「見つけました。あいつといっしょに、みんな石舞台にいます。長官モーグリムがやられました。私は、やぶにかくれてすべて見ておりました。アダムのむすこのひとりが、長官を殺しました。にげてください！　にげて！」

「いや、にげる必要はない」と、魔女は言いました。

「急いで行け。味方全員を呼びよせ、大至急ここへわたくしに会いに来るように言え。巨人たち、オオカミ人間、われらの味方につく木の精たちを呼び出せ。死食鬼、化け物、人食い鬼、牛の頭をした怪物ミノタウロスを呼び出せ。ざんこく族、鬼婆、妖怪、毒キノコ界の連中を呼び出せ。戦うぞ。ふん！　わたくしにはまだ魔法の杖があるではないか？　やつらの軍勢など、やってくるなり、石に変えてやるわ。すぐに行け。そのあいだに、わたくしにはここで少しすませておくことがある。」

大きな野獣は一礼すると、向きを変えて、走り去りました。

「さてと！」と、魔女。「台がないから——ううむ。木の幹にしばらくがよい。」

エドマンドはむりやり乱暴に引き起こされました。それからこびとが、エドマンドの背を木におしつけて、ぎゅつとしばりました。

魔女が上に着ていたマントをぬぐのが見えました。下から出てきた腕はむき出しで、ひどくまっ白でした。うつそうとしたこの谷はあまりに暗くてほとんどなにも見えないのに、その異様に白い腕だけは、闇のなかでくつきりと見えました。

「いけにえの準備をせよ」と、魔女。

こびとはエドマンドのえりのボタンをはずし、シャツを首のうしろでつかむと、ぐいと引きおろしました。それからエドマンドの髪の毛をつかんで、あごがつき出るようにうしろに引っかかりました。

そのとき、エドマンドはふしぎな音を聞きました。

シャツ、シャツ、シャツという音です。なんなのか、しばらくわかりませんでした。はっと思いましたが、これは、ナイフを研ぐ音です！ 魔女はエドマンドを殺そうとしているのです！

まさにその瞬間、あちらこちらから大きなさけび声が聞こえました。パッカパッカというひづめの音と、バタバタと空を打つつばさの音——魔女の悲鳴——あたりは騒然となりました。

しばらくして、エドマンドは、自分をしばっていたなわが解かれたのに気がつきました。強い腕にだきかかえられ、あちこちから親切そうな大声がこう言うのが聞こえました——

「横にしてやれ。」——「ワインを飲ませよう。」——「これを飲みなさい。」——「ゆっくり。」——「すぐによくなくなるから。」そのうちに、エドマンドに話しかけているのではなく、おたがいに話しあっているひとたちの声が聞こえてきました。

「だれが魔女をやっつけた？」

「きみだと思ったけど。」

「魔女の手からナイフをたたき落としたあと、見うしなった——こびとを追いかけていたんだ——まさか、魔女にげられたんじゃないだろうな？」

「——なにもかもいつぺんに氣をつけてはいられないよ——それはなんだい？ ああ、ごめん、ただの古い切り株だ！」

ちようどそこで、エドマンドはふつと氣をうしなつてしまいました。

すぐに半人半馬と一角獣とシカと鳥たち（おわかりのように、前の章でアスランが送りこんだ救出部隊です）は、エドマンドを運んで石舞台にもどるために出発しました。でも、みんなが立ち去ったあとにこの谷で起こったことを見たとしたら、さぞかしおどろいたことでしょう。

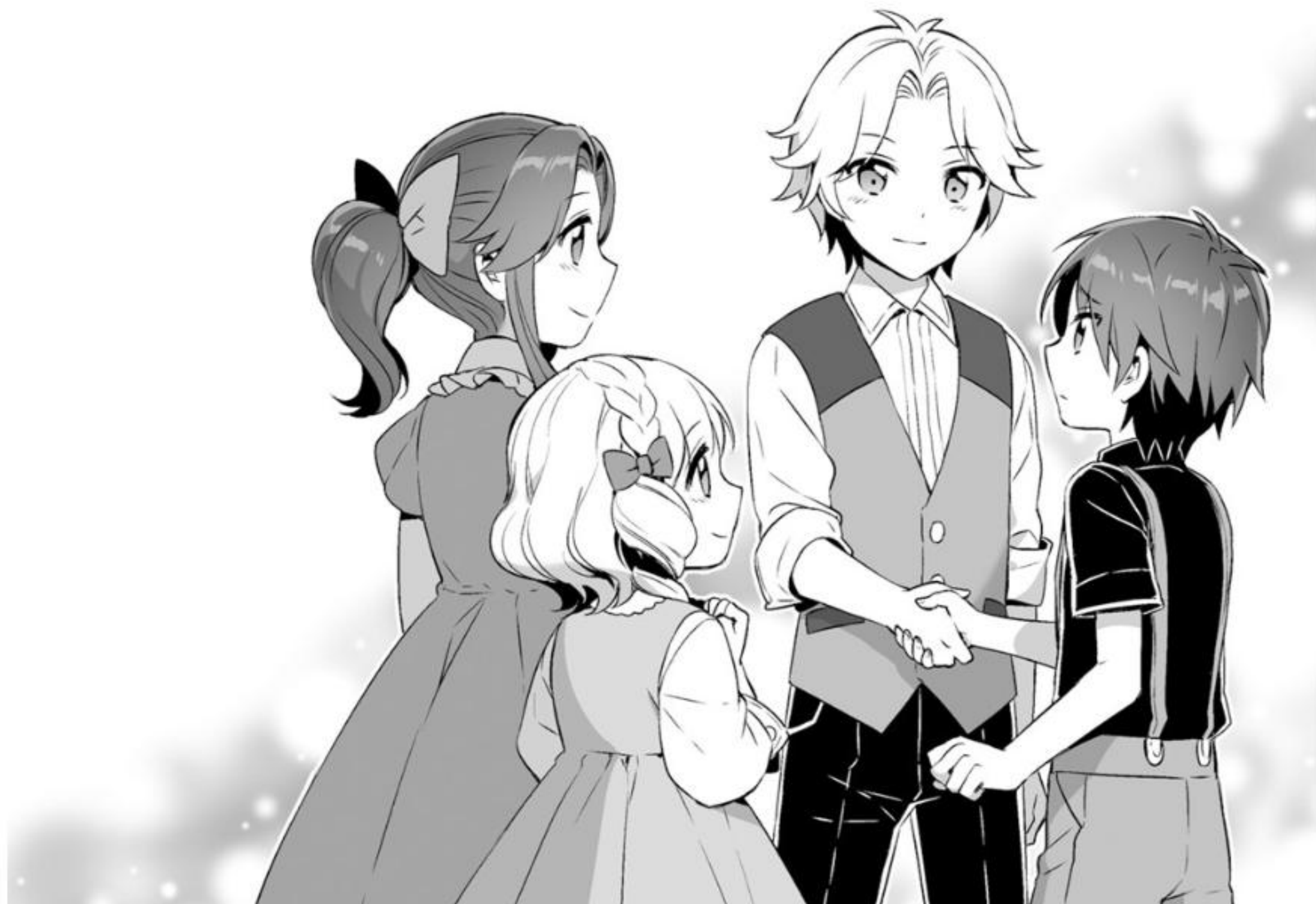
あたりはすつかり静まりかえり、月がこうこうと明るくなりました。もし、そこにいたら、月明かりに照らされた古い木の切り株と、ずいぶん大きな岩とが、見えたことでしょう。でも、じつと見つづけていたら、その切り株と岩には少しへんなところがあるのだんだん氣がついたはずです。そのうち、この切り株は、まるで地面の上で丸くなっている太った小男におどろくほど似ていると思つたことでしょう。さらに長いあいだ見つめていたら、切り株が大きな岩のところに歩いていつて、話しかけるのが見えたでしょう。

というのも、大きな岩と切り株は、じつは魔女とこびとだったのです。ものの姿を変えてしまうのは魔女の魔法であり、手からナイフをたたき落とされた瞬間、魔女には魔法を使うだけのおちつきがあつたのです。魔法の杖もしつかりにぎっていましたが、最初に耳に入つたのは、つぎの朝、エドマンド以外の子どもたちが目をさますと（テントのなかのクッションの山に寝ていたので）、最初に耳に入つたのは、ビーバー夫人の声でした。弟のエドマンドが助かつて、ゆうべおそくキャンプに運びこまれた、そして今はアスランのところにいる、というのです。

三人は朝ごはんをすませるとすぐに出かけて、アスランとエドマンドがふたりきりで露にぬれた草の上を散歩しているのを目にしました。アスランがなにを語っていたのか、だれにも聞こえませんでしたし、みなさんにお伝えしなくてもいいことですが、エドマンドにとっては決して忘れられない会話でした。

ほかのみんなが近づくと、アスランはふりかえつてむかえて、エドマンドを引きあわせました。

「きみたちのきょうだいだ」と、アスラン。「そして——すぎたことは言わなくてもよろしい。」
エドマンドはみんなと順番にあくしゅをして、ひとりひとりに「ごめんなさい」と言いました。そしてみんなは「いいんだよ」と、答えました。



それからみんなは、もうすっかり仲直りができたことがよくわかるようなことを、なにか——なにかふつうの、自然なことを——言いたくてたまらなかったのですが、もちろん、なんて言っているのかわかりませんでした。

でも、それでぎこちなくなってしまうひまもなく、ヒヨウがアスランのところへやってきて言いました。

「陛下、敵の使者が面会を求めています。」

「通せ」と、アスラン。

ヒヨウは立ち去り、すぐに魔女のこびとをつれてもどつてきました。

「伝言はなんだ、大地のむすこよ？」

アスランはこびとにたずねました。

「ナルニアの女王にして、ローン諸島の女帝は、おまえにも女王にも利益となる事がらについて話すべく、女王自身がここへ来る際の身の安全の保障を求めておられる。」

「ナルニアの女王だと！」と、ビーバーさん。「よくも、いけしやあしやあと——」

「静まれ、ビーバー」と、アスラン。「あらゆる名前は、その正当なる持ち主のもとに、やがてかえされよう。それまで議論はすまい。おまえの主人に伝えるがよい、大地のむすこよ、魔法の杖をあの大らかな木のところに置いてくるなら、その身の安全を約束すると。」

こびとはこれに同意し、二頭のヒヨウがこびとにつきそつて立ち去り、この条件がきちんと実行されるか見とどけに行きました。

「でも、魔女があのだ頭のヒヨウを石に変えちゃったらどうするの？」

ルーシーがピーターにささやきました。

同じことをヒヨウたちも考えていたようです。いずれにせよ、立ち去るとき、ヒヨウたちの毛はすっかり逆立っていて、しつぽは——見知らぬ犬に出会ったネコみたい——ピンとおっ立っていたのです。

「だいじょうぶだよ。」ピーターは、ささやきかえました。「でなきや、アスランが行かせるはずがないもの。」

数分後、魔女その人が、丘の頂上に歩いてやってきて、アスランの前につかつかと歩み出ました。これまで魔女を見たことがなかった三人の子どもたちは、その顔を見て背すじがこおりつく思いがしました。そこにいた動物たちみんなから低いうなり声がもれました。明るく太陽が照っているのに、みんな、ふいに寒さを感じたのです。

すっかりおちついていようように見えたのは、アスランと魔女その人だけでした。そのふたつの顔——黄金の顔と死んだように白い顔——がこんなに近くにあるのを見るのは、なんとも奇妙なことでした。と言っても、魔女はアスランの目をしつかり見すえていたわけではありません。とりわけビーバー夫人は、そのことに気がつきました。

「そこにうらぎりものがいるぞ、アスラン」と、魔女は言いました。

もちろん、そこにいたみんなは、エドマンドのことを言っているのだとわかりました。でも、エドマンドは、これまでのひどい経験と今朝アスランと交わした会話のおかげで、自分勝手な考えは捨てていました。エドマンドは、アスランをじつと見つめつづけていました。魔女がなにを言おうと気にならないようすでした。

「どうかな」と、アスラン。「この子が悪いことをしたのは、おまえに対してではない。」

「深遠なる魔法のことを忘れたのか？」魔女がたずねました。

「忘れたということにしよう。」

アスランは重々しく答えると、つづけました。

「その深遠なる魔法のことをみんなに話してくれ。」

「話せだど？」

そう言った魔女の声は急にかん高くなりました。

「すぐそこにある、その石舞台に書かれていることを話せだど？」

秘密の丘の固い石に深く深く彫りつけられた文字で書かれたことを話せ

だど？ 海のかなたの皇帝の笏杖（皇帝の身分を示す杖）に彫られたことを話せだど？ 少なくともおまえは、ナルニアができたときに、

皇帝がナルニアにかけた魔法のことを知っているはずだ。その魔法のおきてによつて、どんなうらぎりものもわたくしのえじきとなり、一回のうらぎり行為について、わたくしにはひとり殺す権利がある、と。」

「へえ」と、ビーバーさん。「それで、自分が女王だと思いこんじまったってわけだ。皇帝の死刑執行人だもんな。」

「静まれ、ビーバー。」アスランは、とても低くうなりながら言いました。

「だから、魔女はつづけました。「その人間はわたくしのものだ。その命はわたくしのものだ。その血はわたくしのものだ。」

「では、取りに來てみる。」人の頭をした牡牛が、とどろくような大声で言いました。

魔女は、まるで犬が齒をむき出してうなるような、ざんこくそうな笑みをうかべて言いました。

「ばかものめ。おまえらの主人が力づくでわが権利をうばえるとも思っているのか？ そいつは、深遠なる魔法のことをもつとずっとよくわかつている。おきてが定めるとおりにわたくしに血があたえられなければ、ナルニアはひっくりかえり、火と水のなかでほろびるとわかつているのだ。」

「まさにそのとおりだ」と、アスラン。「否定はしない。」

「ねえ、アスラン！ どうかかならないのかしら——だって、まさか、そんなことないわよね？ その深遠なる魔法をどうにかできないの？ それをとめるために、なにかできないの？」

スーザンがライオンの耳にささやきました。

「皇帝の魔法をとめるだど？」

アスランは、こわい顔をしてスーザンをふりかえりました。それで、もうその提案をする者はいなくなりました。

アスランの反対側^{はんたいがわ}にいたエドマンドは、じつとアスランの顔^{かお}を見つづけていました。胸^{むね}がつまるような感じ^{かんじ}がして、なにか言^いわなければならぬのではないかと思^{おも}いました。でも、しばらくして、自分^{じぶん}はただ待^まって、言^いわれたことをするべきだと思^{おも}いました。

「さがれ、みな^{もの}の者^{もの}」と、アスラン。「魔女^{まじよ}とふたりだけで話^{はなし}をする。」

みんな、その言葉^{ことば}にしたがいました。おそろしい待^まち時間^{じかん}でした。ライオンと魔女^{まじよ}がなにをひそひそとしんけんに話^{はなし}しあっているのだらうと、みんな、やきもきしました。

ルーシーが「ああ、エドマンド！」と言^いって、泣^なきだしました。ピーターは、みんなに背^せをむけて、遠^とく^{とお}の海^{うみ}をながめました。ビーバー夫妻^{ふさい}は、頭^{あたま}をたれたまま、おたがいの両手^{りょうて}を取りあいました。半人半馬^{ケンタウロス}は、いらいらと、ひづめをふみ鳴^なりました。

でも、最後^{さいご}にはみんな、しーんとして、ミツバチがぶんぶんと飛^とんでも、下^{した}の森^{もり}で鳥^{とり}が鳴^ないても、風^{かぜ}で葉^はがゆれても、どんな小^{ちい}さな音^{おと}も聞^ききのがさないほど静^{しず}まりかえったのですが、それでもアスランと白^{しろ}の魔女^{まじよ}の話^{はなし}はつづきました。

ついにアスランの声^{こえ}が聞^きこえてきました。

「みんな、もどつてきてよろしい。決着^{けつちやく}はついた。魔女^{まじよ}は、きみたちのきょうだいの血^ちを要求^{ようきゅう}することをあきらめた。」
あたかも、じつと息^{いき}をこらえていたみんながまた息^{いき}をしはじめたかのような音^{おと}が丘^{おか}じゅうにひろがり、がやがやと話^{はなし}し声^{こえ}がしました。

魔女^{まじよ}は、はげしいよろこびの表情^{ひょうじょう}をうかべて立^たち去^さりかけて、立^たちどまつてこう言^いいました。

「だが、この約束^{やくそく}がまもられるという保証^{ほしょう}はあるのか？」

「ガオーオウー！」

アスランが、玉座^{ぎよくざ}から立^たちあがらんばかりになつて、ほえました。

その大^{おお}きな口^{くち}はどんどん大^{おお}きくなり、そのほえ声^{こえ}もどんどん大^{おお}きくなつたので、口^{くち}をぽかんとあけてしばらく見^みつめていた魔女^{まじよ}は、スカートのすそを持ちあげると、命^{いのち}からがら、ほうほうの体^{てい}でにげていきました。

魔女がいなくなるとすぐに、アスランは言いました。

「ただちにここから立ち去らねばならぬ。ここは、ほかの目的に使われる。今晚はベルーナの浅瀬で野営しよう。」

もちろん、みんなは、魔女とどんな取り決めをしたのかアスランに聞いてみたくてしかたありませんでしたが、アスランの表情はきびしく、そのほえ声でまだ耳がじんじんとしていたので、だれひとり聞こうとする者はいませんでした。

日ざしが強くなつて草がかわいていたので、丘の頂上のテントの外で食事を取り、そのあとテントをたたんだり、荷造りをしたりと、しばらくいそがしくなりました。午後二時になる前に、一同は、北東を目指し、ゆるゆると行進をはじめました。ベルーナの浅瀬は、すぐそこです。

旅のはじめのうちに、アスランは、ピーターに作戦を説明しました。

「このあたりで魔女が仕事をおわらせしだい、魔女の一群は、まずまちがいなく、魔女の館にもどつて、包囲戦の準備をするだろう。むりかもしれぬが、できれば魔女のじやまをして、館にもどらせないようにするのだ。」

それから、戦いのふたつの作戦のあらましを話しました。森で魔女の軍と戦う方法と、魔女の城を攻撃する方法です。そしてそのあいだじゅう、どうやって作戦を指揮するかピーターに教え、「ケンタウロスをこれこれの場所に配置しろ」「魔女がしかじかのことをしていない

か、だれか行かせてさぐらせろ」というように命じつづけるものですから、とうとうピーターは言いました。

「でも、アスラン、あなたもいつしよにいらつしやるんでしよう？」

「それはどうなるかわからん。」

アスランは、指示をつづけました。

そのあとアスランはひとりきりで歩いていましたが、そのようすをよく見かけたのは、スーザンとルーシーでした。アスランは、あまり口をきかず、さびしそうに見えました。

谷底がひろがって、川はばがひろく、流れが浅くなっている場所まで来ても、まだ夕方にはなっていないませんでした。ここが、ベルーナの浅瀬です。アスランは、川のこちら側の岸でとまれと合図しました。けれども、ピーターが言いました。

「むこう側でキャンプしたほうがよくないでしょうか。夜討ちをかけられるといけませんから。」

ほかのことを考えていたらしいアスランは、そのりっぱなたてがみをびくりとゆらして、ねむりからさめたように言いました。

「うん？　なんだって？」

そこでピーターは、さつきと同じことを、すつかり言い直しました。

「いや。」アスランは、どうでもいいというような、つかれた声で言いました。「いや。今宵、夜討ちはない。」

それから、深いため息をつきました。しかし、すぐに、こう言いそえました。

「だが、よくぞ思いついた。それこそ戦士の考えるべきことだ。しかし、本当に気にせんでよい。」

そこで、みんなはテントを張りにかかりました。

アスランの気分は、その晩みんなにうつりました。ピーターは自分だけで戦うことを思うとおちつきませんでしたし、アスランがいないかもしれないという話はたいへんなショックでした。

その晩の夕ごはんは、静かな食事でした。昨晚、いや今朝ともずいぶんちがうとだれもが感じていました。まるで、はじまつたばかりのいい時代がもうおわろうとしているかのようでした。

その感じは、スーザンにも伝わって、床に入っても寝つけませんでした。羊を数えたり、何度も寝がえりを打ったりして横になっていると、ルーシーが長いため息をついて、暗やみのなか、すぐそばで寝がえりを打つ音が聞こえました。

「あなたも、ねむれないの？」と、スーザン。

「うん」と、ルーシー。「スーザン、寝てるのかと思った。ねえ！」

「なあに？」

「ものすごくこわいの。なにかがみんなの上におおいかぶさっているみたいなのがする。」

「そうなの？　じつを言くと、私もよ。」

「アスランにね」と、ルーシー。「アスランになにかひどいことが起こるんじゃないかな。でなきや、アスランがなにかこわいことをするんじゃないかな。」

今日の午後じゅうずつと、アスランはようすがおかしかったわ。ルーシー！　戦いのおきにいつしよにいられないことについて、アスラン、なんて言っただけ？　まさか、今晚こっそりぬけ出して、私たちを置いてけぼりにしたりしないわよね？」

「今、どこにいるのかな？」と、ルーシー。「このテントのなかかな？」

「ちがうと思うわ。」

「スーザン！　外に出てあたりを見てみよう。会えるかもしれない。」

「そうね。そうしましょう」と、スーザン。「ここで目をさましたまま横になっっているより、そうしたほうがいいわね。」

そうつと、そうつと、ふたりの女の子は、ねむっているひとたちのあいだを手探りで進み、テントから外へはい出しました。月が明るく、

川のせせらぎが石にあたる音以外、なにもかもとても静かでした。とつぜん、スーザンがルーシーの腕を取って言いました。

「見て！」

キャンプの遠くのはし、ちょうど木々が生えはじめているところで、アスランがのっそりと森のなかへ入っていくのが見えました。ひとことも言わずに、ふたりはあとをつけました。

アスランは谷の川からはなれて、急な坂道をのぼり、少し右にそれていきました。あきらかに今日の午後、石舞台がある丘からおりてきた、まさにその道です。

どんどんとアスランは、ふたりの前を歩いていきます。木かげに入ったり、青白い月光のなかに出たりして進むアスランを、ふたりは露でしつとりと足をぬらしながら追いました。

いつものアスランとは、どこかようすがちがっていました。しつぽと頭を低くたれて、ひどくつかれているかのように、のっそりと歩いていました。やがて、身のかくしようなひろい空き地へ出たところで、アスランは立ちどまってあたりを見まわしました。

今さらにげかくれしてもしかたありませんでしたので、ふたりはアスランのところへやってきました。近くまで来るとアスランが言いましました。

「ああ、子どもたち、子どもたち、なぜあとをついてきた？」

「ねむれなかったの」

と、ルーシーが言いました。そして、それ以上言わなくても、アスランはふたりの考えていることをわかつてくれると感じました。

「おねがいです。いっしょに行ってもいいですか。どちらへいらつしやるにせよ。」

スーザンがたずねました。

「うむ——」

と、アスランは考^{かん}えているようすでした。それから、こうつづけました。

「今^{こん}晩^{ばん}は連^つれがいてくれるとうれしい。そうだな。私^{わたし}が命^{めい}じたときにとまって、そのあとは私^{わたし}ひとりで行^いかせてくれると約^{やく}束^{そく}するなら、来^きてもよろしい。」

「ああ、ありがとう、ありがとう。ついていきます」と、スーザンとルーシーは言^いいました。

一同^{いちどう}はふたたび前^{ぜん}進^{しん}し、ふたりはそれぞれアスランの両^{りょう}わきについて歩^{ある}きました。

でも、なんてゆつくり歩^{ある}くことでしよう！ 堂^{どう}々^{どう}とした大^{おお}きな頭^{あたま}はがつくりとうつむいて、鼻^{はな}が草^{くさ}にさわらんばかりです。

そのうちにアスランはつまずいて、低^{ひく}いうめき声^{こえ}をあげました。

「アスラン！ アスランったら！」と、ルーシー。「どうしたの？ 教^{おし}えて？」

「具合^{ぐあい}が悪いの、アスラン？」と、スーザン。

「いや」と、アスラン。「悲^{かな}しくて心^{こころ}細^{ほそ}いのだよ。たてがみに手^てを置^おいてくれ。きみたちがいつしよだと感^{かん}じられるように。そうやって歩^{ある}いていこう。」

そこでふたりは、ゆるしがなければこわくて決^{けつ}してできなかつたけれど、はじめて会^あったときからずっとやってみたくてたまらなかつたことをやりました。

美^{うつく}しい毛^けの海^{うみ}に冷^{つめ}たい両^{りょう}手^てをふかぶかとうずめて、毛^け並^なみをなでたのです。そうしながら、いつしよに歩^{ある}いていきました。

やがて、石^{いし}舞^ぶ台^{たい}がある丘^{おか}の坂^{さか}道^{みち}をあがっていることに気^きづきました。ずっと上^{うへ}まで木^きが生^はえている斜^{しゃ}面^{めん}をのぼり、最^{さい}後^ごの木^きまで来^きたところ（あたりにしげみがある木^きです）で、アスランは立^たちどまって言^いいました。

「ああ、子^こどもたち、子^こどもたち。きみたちはここまでだ。どんなことがあっても、姿^{すがた}を見^みせてはならないよ。さようなら。」

すると、ふたりの女^{おんな}の子^こは（どうしてだかわからないまま）とてもはげしく泣^ないて、アスランにしがみつぎ、あちこちにキスをしました。

たてがみにも、鼻^{はな}にも、前足^{まえあし}にも、大^{おお}きな悲^{かな}しそうな目^めにも。



それからアスランは、ふたりに背をむけて、丘の頂上へ歩いていきました。ルーシーとスーザンはしげみのなかにしゃがんで、アスランのうしろ姿を見おくりましたが、ふたりが目にしたのは、つぎのようなことでした。

石舞台のまわりにたくさんの人だかりがしていて、月が照っているにもかかわらず、多くの生き物が不吉に赤く燃えて黒い煙をたてるた、いまつをかかけていました。

それにしてもまあ、なんという連中でしょう！

おそろしい牙をした人食い鬼、オオカミども、牛の頭をした男たち、悪い木の精、毒をもつ植物の精がおり、そのほかの生き物のようすはあまりにこわくてお伝えできません。そのようすを書いたりしたら、きつと大人たちはこんなこわい本を読んではいけないと言うことでしょう――毛の生えたざんこく族、鬼婆、夢魔、吸霊魔、まつ黒な恐怖族、強力な風の精イフリート、いたずら小鬼、ちつぽけで鼻のとんがった天邪鬼オークニー、大きな毛むくじやらのウーズ、双頭の巨人エティンといった連中ばかりなのですから。

実際のところ、魔女の味方全員が、オオカミから魔女の命令を聞いて集まっていたのです。そのまんなか、石舞台の近くに、魔女その人が立っていました。

大きなライオンがのっしのっしと近づいてくるのを見ると、化け物たちはほえ、おじけづいたようなわけのわからぬさけびをあげました。最初は、魔女でさえ、おそれおののいたように見えました。それから魔女は、気を取り直して、けたたましい笑い声をあげました。

「ばかものめ！」魔女はさけびました。「ばかものが来たわ。しばらくあげろ。」

ルーシーとスーザンは息を殺して、アスランがほえて、敵におそいかかるのを待ちました。

でも、そうはなりませんでした。四人の鬼婆が、にやにやして意地の悪い目つきをしながら、それでも（最初のうちは）へっぴりごしで、ちゃんとしばれるかびくびくしながら、アスランに近づいてきました。

「しばれと言うに！」白の魔女がくりかえしました。

鬼婆^{おにばば}どもは、アスランにおどりかかり、一切抵抗^{いつさいていこう}をしないとわかったら、勝利^{しょうり}のさけびをあげました。それから、悪い^{わる}こびとやサルどもと
いったほかの者^{もの}たちが走りよって手を貸^かし、よってたかつて大きなライオンをあおむけにひっくりかえして、四本^{よんぽん}の足をひとつにしばりあ
げ、まるで、なにか勇ましい^{いさ}ことでもしでかしたかのようにさけんだり、歓声^{かんせい}をあげたりしました。

もしアスランがその気^きになりさえすれば、前足^{まえあし}一本^{いっぽん}でみんなを打ち殺^{ころ}してしまうことだってできたのです。ところがアスランは、ぎゅう
ぎゅうとしばりあげられ、なわが体^{からだ}に食^くいこんでも、声^{こえ}ひとつあげませんでした。一同^{いちどう}は、アスランを石舞台^{いしぶたい}のほうへ引きずっていこうと
しました。

「待^まて！」と、魔女^{まじよ}。「まず、毛^けを刈^かってしまえ。」

人食^{ひとく}い鬼^{おに}が、大ばさみを持^もって前^{まえ}に出てきて、アスランの頭^{あたま}のそばにしやがみこむと、どつと、いやらしい笑^{わら}い声^{こえ}がどよめきとなつて起^お
こりました。チョキ、チョキ、チョキと大ばさみが動^{うご}き、どさつと黄金^{おうごん}の巻^まき毛^げが地面^{じめん}に落^おちました。

それから、人食^{ひとく}い鬼^{おに}がうしろにさがると、かくれ場所^{ばしょ}から見^みまもっていた女^{おんな}の子^こたちには、たてがみがなくなつたアスランの顔^{かお}がずいぶ
ん小^{ちい}さく変^かわつたように見^みえました。敵^{てき}にもまた、それがわかつたようです。

「しよせんは、でつかいネコじゃねえか！」だれかが、さけびました。

「こんなものを、おれたちはこわがつていたのか？」と、別^{べつ}の者^{もの}。

それから一同^{いちどう}は、アスランをばかにして、まわりにむらがつて、

「ネコちゃん、ネコちゃん！ あーら、かわいそうに。」

「今日^{きょう}はなん匹^{びき}、ネズミをつかまえた？」

「ミルクを飲^のむかい、にゃんこちゃん？」

などと、はやしたてました。

「なんてことを。けだものだわ。けだもの！」

ルーシーは、涙をぼろぼろこぼしながら言いました。

でも、最初のショックがすぎると、アスランのさっぱりとした顔は、以前よりももっと勇ましく、もっと美しく、もっとがまん強いように、ルーシーには見えました。

「口輪をはめろ！」と、魔女がさけびました。

連中が口輪をはめようとしているそのときでさえ、アスランががぶりとひとかみすれば、二、三人の手はなくなっていたことでしょう。でも、アスランはなにもませんでした。

それで、いよいよ、連中は調子づいたようです。今や、だれもかれもがアスランに手を出していました。アスランがしばらくあげられたあとも近づくのをこわがっていた者たちでさえ、強気になって、わつとアスランにむらがつたものですから、しばらくは、ふたりの女の子たちからアスランが見えなくなるほどでした。

それほど大ぜいで、よつてたかつてアスランをけつたり、なぐつたり、つばをはきかけたり、からかったりしたのでした。

ついに、暴徒たちは思う存分やることをやって、しばらく口輪をはめられたライオンを引っぱったり押したりしながら、石舞台のころへ引きずっていきました。あまりに大きかったので、その場所に着いてからも、石舞台の上にあげるのが一苦労でした。上にあげると、もつとなわをかけ、きつくしばりあげました。

「ひきよう者！ ひきよう者！」スーザンは泣きました。「あんなにしてまで、まだアスランがこわいの？」

平たい石の上にアスランがしばらくつけられると（がんじがらめで、なわだらけになっていました）、一同はしんと静まりかえりました。

四人の鬼婆が、四本のたいまつをかがけて、石舞台の四すみに立ちました。魔女は、昨晚アスランではなくエドマンドにナイフをふるおうとしたときに腕まくりをして見せた、あの腕をまたむき出して見せました。それからナイフを研ぎはじめました。たいまつがナイフに

あたると、まるでその刃が鋼鉄ではなく石できているかのようにな女の子たちには見えませんでした。それは、見たこともない邪悪な形をしていました。

いよいよ魔女が近よつてきました。アスランの頭の横に立ちます。魔女の顔は興奮してびくびく引きつっていましたが、じつと空を見あげたままのアスランの顔は、あいかわらずおだやかで、怒るでもおそれるでもなく、ただ少し悲しそうでした。

それから、魔女は、一撃をくわえる直前に、かがみこんで、ふるえる声で言いました。

「さあ、勝ったのは、だれだ？　ばかものめ、こんなことで、人間のうらざりものを救えんとも思つたのか？　さあ、約束どおり、あいつのかわりに、おまえを殺してやる。それで、深遠なる魔法はおさまるわけだ。だが、おまえが死んだら、だれがわたくしのじやまをやる？　あいつを殺すじやまはなくなるのだ。だれが、この手から、あいつを救い出す？　おまえは、わたくしにナルニアを永遠にあたえたのだ。おまえはその命をうしない、しかもやつた命を救えない。そう知って、絶望して死ね。」

スーザンとルーシーは、殺しの瞬間そのものを見ませんでした。とても見るにしのびなく、目をおおってしまったのです。

時^{とき}がはじまるより前^{まえ}の、もつと深遠^{しんえん}なる魔法^{まほう}

ふたりの女^{おんな}の子^こが手^てで顔^{かお}をおおって、しげみのなかでまだしやがんでいるときに、魔女^{まじよ}がさけぶ声^{こえ}が聞^きこえました。

「さあ！ みんなついてくるがよい。戦^{いくさ}のかたをつけるぞ！ 大^{おお}ばかものあの^{おお}大ネコ^{おお}が死^しんだ今^{いま}となつては、人間^{にんげん}という害虫^{がいちゅう}やうらざりものどもをひねりつぶすのに手間^{てま}はかからぬ。」

このとき、女^{おんな}の子^こたちは、ほんのしばらくのあいだ、たいへん危険^{きけん}な状態^{じょうたい}にありました。

というのも、この胸^{むね}の悪^{わる}くなるような化け物^{ばけもの}の群^むれが、けたたましいさけび声^{こえ}をあげ、ピーという笛^{ふえ}や、かん高^{だか}い音^{おと}の角笛^{つのぶえ}を鳴^ならしながら、丘^{おか}の頂上^{ちやうじやう}からどつとおりてきて、ふたりのかくれている場所^{ばしょ}を通^{とお}りすぎて坂^{さか}をかけおりていったからです。妖怪^{ようかい}が冷^{つめ}たい風^{かぜ}のようにそばを通^{とお}りすぎていったのが感^{かん}じられましたし、牛男^{ミノタウロス}どものパツカパツカと走る足^{あし}の下^{した}で地面^{じめん}がゆれるのも感^{かん}じられました。頭^{あたま}の上^{うへ}では、けがらわしいつばさが突風^{とつふう}を起^{おこ}し、ハゲワシや巨大^{きよだい}なコウモリが空^{そら}をまつ黒^{くろ}にして通^{とお}りました。

ほかのときだったら、スーザンとルーシーはこわくてぶるぶるえたでしょうが、今は悲^{かな}しいのと、くやしいのと、アスランが死^しんだおそろしさとで、心^{こころ}がいつぱいになつていて、危険^{きけん}だとは、あまり思^{おも}いませんでした。

森^{もり}がふたたびしーんと静^{しず}まるとすぐに、ふたりは丘^{おか}の頂上^{ちやうじやう}の原^{はら}っぱへと、はい出^だしていきました。

月^{つき}は低^{ひく}くなつていて、うすい雲^{くも}がその前^{まえ}を流^{なが}れていましたが、しばらくたアスランが死^しんで横^{よこ}たわっている姿^{すがた}は見^みえました。

ふたりとも、ぬれた草にひざまずいて、アスランの冷たい顔にキスをし、まだのこつていた美しい毛並みをなでて、もうこれ以上泣けないというくらいに泣きました。それからおたがいを見て、ただたださびしくておたがいの手を取り、また泣きました。それから、だまっつてしまいました。とうとう、ルーシーが言いました。

「あのひどい口輪、見てられない。はずせないかな？」

ふたりはやつてみました。手がかじかんでいましたし、今は夜のなかでもいちばん暗い時刻だったので、ずいぶんあれこれやつてみたあげく、ようやくうまくいきました。

口輪がはずれた顔を見ると、ふたりはまた泣きだしてしまい、その顔にキスをし、なでて、できるかぎり血や泡をふきとつてあげました。言葉にできないほど、さびしく、切なく、おそろしい顔でした。

「なわも、はずしてあげられるかしら？」

すぐにスーザンが言いました。でも、敵どもは、ただひたすら苦しめるためだけに、ぎゅうぎゅう、なわをしめつけていましたので、女の子たちには結び目をどうしてもほどくことができませんでした。

この本を読んでいるみなさんには、あの夜のスーザンとルーシーほど、みじめになってほしくないと思いますが、もしみなさんがそんな気持ちになって——一晩じゅうねむらずに、涙がかれるまで泣きとおしたりしたら——最後にはある種の静けさがやつてくるものだとかわかるでしょう。もう、なにも起こりはしないという気になるのです。

少なくとも、このふたりには、そんな気がしていました。この死んだような静けさのなかで、何時間も何時間もすぎていったように感じられ、自分たちがどんどん冷えていることにも気がつきませんでした。

しかし、ついにルーシーがふたつのことに気がつきました。ひとつは、丘の東側の空が一時間前よりも少し明るくなってきたということ。もうひとつは、足もとの草になにか小さな動くものがあるということです。

最初は、^{さいしょ}氣にもとめていませんでした。そんなことがなんだというのでしょうか？ もう^{いま}今となつては、なににもかも、どうでもいいのです！ でも、そんなルーシーにも、とうとう、それがなんであれ、^{いしぶたい}石舞台のあしをあがつてきていることがわかりました。そして^{いま}今や、アスランの体の上をうごめいているのです。ルーシーは^{かお}顔を^{ちか}近づけて、よく^み見てみました。それは、^{ちい}小さな^{はいいろ}灰色をしているものでした。
^{いしぶたい}石舞台の反対側で、

「きやあ！ いやだあ！ ^{きも}気持ち悪い^{ちい}小さなネズミがアスランの体^{からだ}じゅうをはいまわっているわ。あっちへ行^いけ、こら」と、スーザンが、手をあげて追^おいはらおうとしました。

「^ま待って！」

じつと見ていたルーシーが言^いいました。

「ネズミたちがなにしてるか、わかる？」

ふたりの女^{おんな}の子は、身^みをかがめて見^みつめました。

「ええ」と、スーザン。「でも、へんね！ なわを食^くいちぎってるなんて！」

「やつぱり」と、ルーシー。「味方^{みかた}のネズミさんなんだよ。かわいそうに。アスランが死^しんだってわからないんだね。なわをほどいてあげたほうがいいって思^{おも}ってるのね。」

もう、ずいぶん明^{あか}るくなってきました。

ふたりの女^{おんな}の子^こは、どちらもはじめて、おたがいの白^{しろ}い顔^{かお}に気^きづきました。ネズミがなわをかじっているのも見^みえました。何^{なん}十^{じゅう}匹^{びき}、いや



何百匹という野ネズミです。そして、一本、また一本と、なわはとうとう、すっかりかじり切られました。

東の空が白んで、星々がかすんでいきました——東の水平線のすぐ上に低くかかった特別大きな星だけが、かがやいていました。明けの明星です。夜じゅう寒かったけれど、さらにぐつと冷えこんできました。ネズミたちは、ちよろちよると走り去っていきました。

女の子たちは、かみ切られたなわののこりをかたづけました。なわが取れたアスランは、いつものアスランらしく見えました。刻一刻と明るさが増して、はつきりと見えるようになればなるほど、その死んだ顔は、より気高く見えました。

裏の森で、小鳥がクツクツと鳴きました。何時間も何時間も静かだったので、ふたりはびくつとしました。すると、別の鳥がそれにこたえました。やがて、いたるところで鳥たちが鳴きだしました。

もう、すっかり夜が明けて、早朝となっていたのでした。

「寒い」と、ルーシー。

「私もよ。少し歩こうか」と、スーザン。

ふたりは丘の東のはしまで歩いて、下を見おろしました。大きな明けの明星は、ほとんど消えかかっていました。国じゅうがどんより暗く見えたが、遠くのほう、ナルニアの大地の果てにある海は、青白く見えました。しだいに、空がうつすらと赤らんできました。

ふたりはあたたまろうとして、死んだアスランと東の峰のあいだを、いくどとなく行き来しました。そのせいで、まあ、なんと足がつかれてしまったことでしょう。とうとう、ふたりは歩みをとめて、海のほうをながめてたたずみました。そして、ちようどケア・パラボルの城があるのがわかったとき、海と空が出会う線に沿って赤が黄金色に変わっていき、とてもゆつくりと太陽のはしが見えてきました。

その瞬間、うしろのほうから大きな音が聞こえました——巨人が巨大な皿を割ったかのような、耳をつんぎく、バキツバキツというものすごい音です。

「いったいなに？」

ルーシーがスーザンの腕にすがりついて言いました。

「こ、こわくてうしろをむけないわ」と、スーザン。「なにかひどいことが起こっているのよ。」

「やつら、アスランになにかもつとひどいことをしているんだわ」と、ルーシー。

「さ、見るわよ！」

そう言うところでは、スーザンを引っぱって、くるりとふりかえりました。

日の出によつて、なにもかも変わって見えました——あらゆる色合いがちがつて見え、かげも消えていたもので、しばらくはたいへんなことが起こったのだとわかりませんでした。

やがて、はつと気づきました。石舞台が、はしからはしまでまっふたつに割れているではありませんか。しかも、アスランの姿がありません。

「ええっ！」

ふたりの女の子は、石舞台にかけもどりながらさけびました。

「ああ、ひどい。なきがらは、ほうつておいてくれてもよかったのに。」

ルーシーはすすり泣きました。

「だれの仕業？　どうということ？　魔法なの？」

スーザンがさけびました。

「そうだ！」うしろから大声がしました。「さらなる魔法だ。」

ふたりはあたりを見ました。そこには、朝日をあびて、これまで以上に大きく見えるアスランが、たてがみをゆらして（たてがみは、また生えそろうていたのです）すつくと立っていました。

「あつ、アスラン！」

ふたりともさけんで、うれしいのと同じくらいこわい気持ちになって、アスランをじつと見あげました。

「じゃあ、死んだんじゃないやなかったの、アスラン？」と、ルーシー。

「今は死んでいない」と、アスラン。

「まさか——まさか——ゆー……？」

スーザンは、ふるえる声でたずねました。「うれしい」という言葉が言えなかったのです。アスランは黄金の頭をさげて、スーザンのおでこをなめました。その息のあたたかさと、アスランの毛特有のこつてりとした感じのにおいが、スーザンをつつみこみました。

「うれしいに見えるかな？」と、アスラン。

「わあ、本物だ。本物だわ！ ああ、アスラン！」

ルーシーがさけび、ふたりの女の子はアスランにだきつき、キスをしまくりました。

「でも、こういうことなの？」少しおちついてから、スーザンがたずねました。

「つまり、」と、アスラン。「魔女は深遠なる魔法を知ってはいたが、魔女の知らないもつと古い、もつと深遠な魔法があつたのだ。魔女が知っていたのは、時のはじまりまでだ。ところが、もつと先までさかのぼって、時がはじまるより以前の静けさと暗さまで見とおすことができたとしたら、そこにちがった魔法が読みとれたはずだ。うらぎりをしたことがない者が自ら進んで犠牲となり、うらぎりもののかわり

に死ねば、石舞台は割れ、死それ自体がくつがえされるということがわかっただろう。さあ、これで——」

「すてき。これで、なあに？」ルーシーはとびあがって、手をたたきながら言いました。

「ああ、子どもたち」と、アスラン。「力がもどつてきているのを感じるんだ。さあ、子どもたち、つかまえられるなら、私をつかまえてごらん。」

アスランは、ほんのしばらく、とても明るい目をして、手足をふるわせ、しつぽを体に打ちつけるようにふりながら立っていました。が、とつぜんふたりの頭の上を高くとびこえ、石舞台の反対側に着地しました。ルーシーはわけもわからず笑いながら、石舞台によじのぼってアスランをつかまえようとしました。アスランはふたたびジャンプしました。

ものすごい追いかけてはまりました。アスランはふたりに追いかけて、ぐるぐると丘の上を走りまわり、うんと引きはなしたかと思えば、もう少しでしつぽにさわれそうなところで身をかわしたり、ふたりのあいだをすりぬけたり、大きくて美しくベルベットのようになやわらかい前足でふたりを空中に放り投げては受けとめたりしました。そして、いきなり立ちどまるものだから、みんないつしよにもんどりうつて、毛や腕やあしがごちゃまぜになつて、楽しく大笑いしました。

ナルニア以外ではだれも経験したことのないようなおふぎけでした。アスランと遊ぶのは、かみなりと遊ぶ感じに近いのか、小さな子ネコと遊ぶ感じに近いのか、ルーシーにはわかりませんでした。おかしかったのは、とうとうみんなが息を切らしながらいつしよに横になつて日光をあびていると、ふたりの女の子にはもう、つかれたとか、おなかがすいたとか、のどがかわいたとか、ちつとも感じられなくなつていたということです。

「さて。」やがてアスランが言いました。「仕事にもどろう。私は、ほえたい気分だ。きみたちは、指で耳をふさいでいたほうがよからう。」ふたりは言われたとおりにしました。アスランは立ちあがつて、ほえるために口をあけると、その顔はあまりにおそろしくなつたので、ふたりには見ていられませんでした。ふたりが見たのは、アスランの前にあつた木々が、牧場の草が風になびくように、ほえ声のいきおいでしなつたことでした。

ほえおわつてから、アスランが言いました。

「これから長い旅になる。私に乗りなさい。」

アスランがうずくまつてくれたので、女の子たちは、アスランのあたたかい金色の背中にのぼり、スーザンが前になつてそのたてがみに

しつかりしがみつки、ルーシーはうしろでスーズンにしつかりしがみつきました。

アスランが、ぐいっと立ちあがると、ふたりは大波に乗るように高く持ちあがりました。それからアスランは、どんな馬よりも速く飛び出して、丘をくだり、深い森へと入っていきました。

アスランに乗るなんて、きつとナルニアでふたりに起こった最高にすばらしいことだったでしょう。みなさんは、全速力で走る馬に乗ったことがありますか？　ちよつと想像してみてください。パツカパツカという重たいひづめの音や、馬が口につけている道具がチャラチャラと鳴る音のかわりに、ほとんど音のしない大きな前足がタツタツと進むのを想像してください。そして、馬の黒や灰色や栗毛の背中のかわりに、やわらかくふかふかの黄金の毛並みと、風でうしろになびくたてがみを想像してください。それから、最速の競走馬の二倍ぐらいの速さで進んでいると思ってください。そのうえ、ただ乗っていればよくて、道案内もいらなければ、つかれることもないのです。

アスランは、どんどんとかけてゆき、足をふみはずすこともなければ、ためらうこともなく、木の幹のあいだをみごとにすいすいとぬつて進み、しげみやイバラや小川を飛びこし、大きな川は歩いてわたり、もつと大きな川は泳いでいきました。

しかも、進んでいくのは、道路でも公園でもなく、なだらかな草地でもありません。かけぬけていったのは、まさに春のナルニアでした。おごそかなブナのはやし、カシの木に囲まれた日当たりのいい空き地を横切り、まっ白な桜の花さく野生の果樹園をぬけ、とどろく滝をすぎ、コケの生えた岩場をすぎ、こだまがひびくほら穴をすぎ、一面のハリエニシダがかがやく風のふく坂道をのぼり、ヒースの生いしげる山の肩をこえ、目のくらむような絶壁に沿って進み、それからジャングルのような谷深くへどんどん、どんどん、どんどんおりていつて、青い花々のさく草原のある谷間に出ました。

さらに走りつづけて、陽が高くなったころには、急な斜面から城を見おろすところまで来ていました。

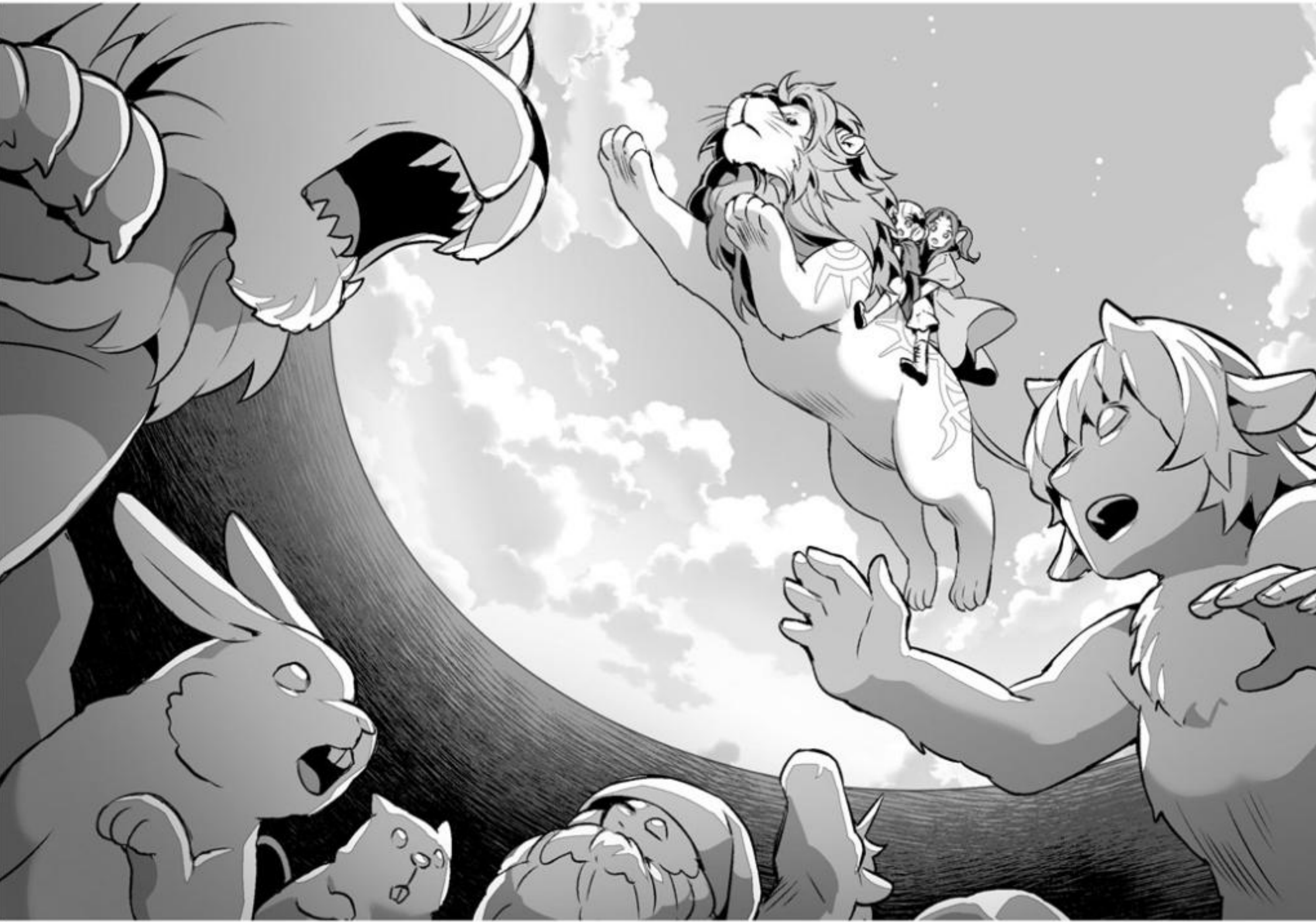
城は、みんなのいるところからは、小さなおもちやのように見えませんでした。あちこち、とんがった塔があるようすをしています。でも、アスランがものすごい速さでかけおりていったので、刻一刻と城は大きくなり、気がついたときには、もう城と同じ高さまでおりていました。

そうになると、城しろはもはや、おもちゃではなく、いかめしく目めの前まえにそびえたっていました。

城壁じょうへきの上からこちらを見る者ものはなく、門もんはぴたりと閉とざされていました。それでも、アスランは、少しもスピードを落おとすことなく、弾だん丸がんのように城しろにまっすぐつつこんでいきました。

「魔女まじよのすみかだ！ さあ、子どもたち、しっかりとつかまっていなさい。」

つぎの瞬間しゅんかん、世界せかいじゅうがひっくりかえったようになり、子どもたちはまるで自分じぶんたちの体からだの中身なかみを置おいてきてしまったように感じかんしました。というのも、アスランがこれまでにないほどの大きなジャンプをするために、一瞬身いつしゆんみがまえてから、飛とびあがったのでした——そう、あたかも空そらを飛とぶように——城しろのかべの上うえをひらりと。



スーザンとルーシーが、息を切らしながらも、けがひとつなく、アスランの背中からどうとところがり落ちたのは、石がしきつめられた大きな庭のまんなかでした。あたりには、像がいっぱい立っていました。

16

石像に起こったこと

「なんてとこかしら！」ルーシーがさげびました。「この石の動物たち——人もいるわ！　まるで——まるで博物館みたい。」

「しっ」と、スーザン。「アスランがなにかしてるわ。」

そのとおりでした。アスランは石のライオンのところへさつと飛んでいくと、息をふきかけました。それから、少しも待たずに——さながら自分のしつぽを追いかけるネコのように——すばやく動きまわり、石のこびとにも息をふきかけました。

みなさんも覚えているでしょう。ライオンから少しはなれたところに、背をむけて立っていた像です。

つぎにアスランは、こびとのむこうで石になっている背の高い木の精に飛びかかり、ぱつと横をむいて右側の石のウサギに息をかけ、二頭の半人半馬のほうへ急ぎました。そのとき、ルーシーが言いました。

「ねえ、スーザン！　ほら！　あのライオンを見て。」

みなさんのなかには、火のないだんろに新聞紙のきれはしを置いて、マッチで火をつけるのを見たことがある人もいますでしょう。火がついた一瞬は、なにも起こっていないように見えるのですが、やがて新聞紙のはしに小さな炎のすじがすうつと走ります。

それと同じで、アスランが石のライオンに息をふきかけたときはなにも変わらないように見えたのですが、やがて小さな金色のすじが白い大理石の背中にすうつと走りはじめ——ぱつとひろがると——ちょうど炎が紙切れをなめつくすように、ライオンの体じゅうをなめつくして全身が金色になりました。

そのうちに、うしろ半分はまだどう見ても石なのに、そのライオンがたてがみをふると、重たい石のひだが波のようにゆれて生きた毛となりました。それから、ライオンは、あたたかい息をする大きな赤い口をあけ、ものすごいのびをしました。このころには、うしろ足も生きかえっていて、ライオンは片方のうしろ足をあげて体をかきました。そうして、アスランに目をとめると、走って追いかけて、そのまわりでじやれつき、うれしがって鼻を鳴らし、とびあがってアスランの顔をなめました。

もちろん、女の子たちの目は、そのライオンをじつと追っていました。でも、あたりの光景があまりにすばらしかったので、やがてそのライオンのことも忘れてしまいました。あちこちで像が生きかえっていたのです。

中庭は、もはや博物館のようではありませんでした。むしろ動物園のようでした。動物たちがアスランのあとを追いかけて、まわりを取りかこんでおどりまわるので、アスランが見えなくなるほどでした。あの死んだような白さのかわりに、中庭には燃え立つような色がたくさんありました。

ケンタウロス 半人半馬のおなかのぴかぴかした栗色、一角獣の角の藍色、鳥たちの羽の目のくらむような極彩色、キツネや犬やサテュロスの赤茶色、こびとのくつ下の黄色とぼうしのまっ赤。カバノキの木の精は銀色でしたし、ブナの木の前はあざやかな、すきとおるような緑色で、カラマツの精は明るすぎて黄色にも見える緑色をしていました。

そして、死んだような沈黙のかわりに、中庭じゅうに、しあわせそうな、メーメー、キャンキャン、ワンワン、キーキー、クークー、ヒーーンといった鳴き声がこだましており、足をふみならしたり、さけんだり、歓声をあげたり、歌ったり笑ったりで、たいへんなさわぎとなりました。

「あらら。」スーザンの声色こわいろが変わりました。「見て！ あれつて——だいじょうぶかしら？」
ルーシーがそちらのほうを見ると、アスランが、ちょうど石の巨人の足もとに息をふきかけているところでした。
「だいじょうぶだよ！」アスランが楽しそうに言いました。「足がもとにもどれば、そのほかもすっかりもどるさ。」
「そういうことを言っただけじゃないんだけど」と、スーザンはルーシーに耳打ちしました。
でも、アスランがスーザンの言うことを聞いたとしても、もう今となつては手おくれでした。巨人の足からどんどん変化が上のほうにつ
たわっていました。今はもう、巨人は足を動かしています。一分後、肩からこん棒をおろして、目をこすつて言いました。
「なんてこった！ ねむっちまったらしい。さあて。地面をちよろちよろ走り回っていた、あのいまましい小さな魔女はどこだ。足もと
にいたんだが。」



でも、本当はなにが起こったのかをみんなが下からさげんで教えてあげると、巨人は耳に手を当ててもう一度聞き直して理解し、アスランに深々と頭をさげました。あまり低くさげるものだから、頭が干し草の山につきそうなぐらいでした。そして巨人は、何度もぼうしに手をやって、その正直そうな、ごつい顔いっぱいには笑みをうかべました。（巨人というのは、今ではあまり見かけませんし、きげんのよい巨人というのはかなりめずらしいので、みなさんはきつと満面の笑みをうかべた巨人なんて見たことがないでしょう。一見の価値あります。）「さあ、館のなかに入るぞ！」と、アスラン。「しつかりやれよ、みんな。♪二階も一階も♪奥方さまの部屋も♪だ！」

アスランはみんなの知っているわらべ歌の一節を歌いました。

「すみずみまで調べろ。どこに面白いそうな囚われ人がかくされているか、わかったものではない。」

そうしてみんなは、どつとなかに押し入って、数分間は、あの暗くて、ひどい、息のつまるような古い城じゆうに、窓があく音や、みんながおたがいに呼びあう声がこだましました。

「地下牢を忘れるな——このドアをあけるのに手を貸してくれ！——ここにも小さならせん階段があるぞ——おつと！——ここにかわいそうなカンガルーがいる。アスランを呼べ——ふうー！——ここはなんてにおいだ——落とし戸に気をつけろ——ここだ！——この階段のおどり場にまたどつさりいるぞ！」

しかし、なによりすばらしかったのは、ルーシーがさけびながら二階にかけあがってきたときです。

「アスラン！ アスラン！ タムナスさんを見つけたわ。ねえ、すぐに来て。」

一分後、ルーシーと小さなフォーンは、おたがいの両手を取りあつて大よろこびでぐるぐるとおどりました。この小さなフォーンは、像になつていたからといって少しも弱つておらず、もちろんルーシーの話を夢中で聞きました。

でも、とうとう、魔女の城の家捜しはおわりました。城じゆう、がらんとして、すべてのドアや窓があけはなたれ、光とかぐわしい春の空気が、それをひどく必要としていた暗くまがましい場所にあふれるように流れこみました。像だったのが動けるようになった者たちの

集団は、また中庭にもどってきました。そのときです、だれか（タムナスさんだと思えます）がこう言ったのは――

「でも、どうやって出るの？」

というのも、アスランは城壁を飛びこえて入ってきたので、門にはまだ、かぎがかかっていたからです。

「だいじょうぶだ」

と、アスランは言いました。そして、うしろ足で立ちあがると、さっきの巨人に大声でほえました。

「おおい！ その背の高いきみ。きみの名前は？」

「ジャイアント・ゴロゴロバフィンと申します、閣下。」

巨人は、もう一度ぼうしに手をあてて言いました。

「では、ジャイアント・ゴロゴロバフィンくん」と、アスラン。「ここからわれわれを出してくれるかな？」

「おやすいごようでさ、閣下」と、ジャイアント・ゴロゴロバフィンは言いました。「門からずっとさがっててくださいよ、ちつこいみな

さん。」

それから、巨人は門のところへのっしのっしと歩いていつて――バン――バン――バン――と大きなこん棒をふりおろしました。

門は最初の一撃できしみ、二度めで割れて、三度めでばらばらになりました。

つぎに、巨人が左右の塔にしがみついて、しばらくバシン、ドスンとやるうちに、左右の塔も、それにつづく両側の城壁のかなりの部分

も、ガラガラガツシャーンとくずれて、こなごなのがれきの山になってしまいました。

砂ぼこりがおさまってから、がれきだらけのそっけない石の中庭に立って、門の割れめから、外のすがすがしい景色が見えたのはなんだ

かへんな感じでした。門の外には、草原、風にそよぐ木々、きらきら流れる森の小川があつて、そのむこうに青い山がつづき、さらにその

むこうに大空がひろがっていました。

「うへえ、なんてひでえ汗だ。運動不足のせいだ。若いご婦人のどなたか、ハンカチをお持ちじゃないかな？」

巨人は、世界一大きな汽車のようにシュポと息をはき出しながら言いました。

「ええ、持ってるわ。」

ルーシーは、つま先立って、できるだけ高くハンカチをかがけました。

「ありがとう、おじょうちゃん。」

ジャイアント・ゴロゴロバフィンは身をかがめました。つぎの瞬間、ルーシーは巨人の人さし指と親指でつままれて空中に持ちあげられたので、かなりこわい思いをしました。でも、ルーシーが巨人の顔に近づくと、巨人はふいにびくつとして、ルーシーをそつと地面にもどしてつぶやきました。

「なんてこった！ おじょうちゃんのほうをつまんじまった。ごめんよお、おじょうちゃん、あんたをハンカチとまちがえたよ！」

「いえ、いえ。」ルーシーは笑いながら言いました。

「はい、どうぞ！」

こんどこそ巨人はハンカチを受けとることができましたが、それはちょうど、みなさんにとっての豆つぶぐらいの大きさしかなかったの
で、巨人がまじめくさって大きな赤ら顔をそれでごしごしふいているのを見てルーシーは言いました。

「そんなのじゃ、あまりお役に立たなかったわね、ゴロゴロバフィンさん。」

「いえいえ、とんでもものうございます。」巨人は礼儀正しく言いました。「こんなすてきなハンカチにお目にかかったことはございません。とてもきれいで、とても便利で、とても——なんと申したらよいか、わかりませんが。」

「なんてすてきな巨人さんかしら！」

ルーシーは、タムナスさんに言いました。

「ええ、そうですとも」と、フオーン。「バフィン族は、むかしからすてきなんですよ。ナルニアの巨人族のなかで、いちばんりっぱな家柄です。あまりかしこくはないかもしれませんがね（かしこい巨人には会ったことがありますよ）、でも古い家柄です。伝統があるんです。別の巨人なら、魔女が石にしたりしなかったでしょう。」

このとき、アスランが両の前足を打って、静粛を求めました。

「今日の仕事はまだおわっていない」と、アスラン。「寝る前にいよいよ魔女をやっつけてしまうなら、ピーターたちが戦っている場所をただちに見つけなければならぬ。」

「われわれも戦に参加するのだな！」いちばん大きな半人半馬が言いました。

「もちろん」と、アスラン。「それも今すぐにだ！ 足のおそい者——すなわち、子どもたち、こびと、小動物——は、足の速い者——す

なわち、ライオン、ケンタウロス、一角獣、馬、巨人、ワシ——の背中に乗るのだ。鼻のきく者は、われわれライオンとともに先頭に立ち、戦の場所をかぎあててくれ。しつかりやれ、隊に分かれるのだ。」

一同は歓声をあげ、大さわぎしながら隊に分かれました。いちばんはしやいでいたのは、もう一頭のライオンでした。いそがしいふりをしながらあちこちかけまわっていましたが、それというのも、会う者みんなにこう言いたいがためでした。

「ねえ、聞いた？ われわれライオンって言ってたよ。つまり、アスランとぼくのことだ。われわれライオンだつてさ。これだから、アスランって好きなんだよ。えこひいきもしなければ、よそよそしくもしない。われわれライオンだつてさ。つまり、アスランとぼくのことだよ。」

そんなことを言いつづけたものですから、とうとうアスランはこのライオンにこびと三人、木の精ひとり、ウサギ二匹にハリネズミ一匹を乗せました。それでようやく、このライオンもさほどうるさくなくなつたのです。

すべての準備ができると（動物たちをちゃんとした順番にならばせるために、本当にアスランの役に立ったのは大きな牧羊犬でした）、

みんなは城のかべの割れめから出発しました。

最初はアスランともう一頭のライオンと犬たちがクンクンとかぎまわりながら進みましたが、とつぜん、大きな犬がおいをかぎつけ、見つけたぞとほえました。

そうになると、あつというまでした。すぐに犬、ライオン、オオカミ、その他の狩りをする動物たちみんなも、地面に鼻をつけながら全速力で進みました。そのうしろ八百メートルほどにわたってひろがっていたそのほかの者たちも、できるだけ急いであとを追いました。

まるでイングランドのキツネ狩りのようなけたたましきでしたが、ときどき、獲物を見つけた犬たちのほえ声のほかに、もう一頭のライオンのほえ声や、ときにはアスラン自身のもつと深くてもつとおそろしいほえ声も加わりましたから、キツネ狩りよりも大音響でした。

おいが近くなればなるほど、みんな、どんどん速くなりました。そうして、せまくて曲がりくねった谷の最後のカーブまで来たとき、ルーシーはこうした騒音のなかに別の音を聞きました。

その音を聞くと、ルーシーはなんだか気分が悪くなりました。それは、どなる声、悲鳴、それに金属同士がぶつかる音でした。せまい谷からみんなが出てきたところですが、その理由がわかりました。ピーターとエドマンドが、アスランの味方の軍とともに、昨

晩ルーシーが目にしたおそろしい大ぜいの生き物たちと必死で戦っていたのです。

昼間の光のなかで見ると、化け物どもは、いつそう気味悪く、なおさら邪悪で、ますますみにくく見えました。それに、昨晩よりもずっと多いようです。ピーターの軍は——ルーシーに背をむけていましたが——おそろしく少ないように見えました。しかも、戦場のあちこ

ちに像が点々とありましたから、魔女が魔法の杖を使ったにちがいありません。でも、今は使っていないようです。魔女は、あの石のナイフで戦っているのです。

魔女の相手は、ピーターでした。ふたりとも必死で戦っているのです、いったいなにがどうなっているのか、ルーシーにはよくわかりませんでした。石のナイフとピーターの剣があまりにもすばやくきらめき、ナイフが三本、剣が三本あるように見えたのです。

このふたりが戦場のまんなかについて、両側にずうつと戦線がひろがっていました。どこを見ても、おぞましいことが起こっていました。「私の背中からおりなさい、子どもたち」

と、アスランがさけびました。スーザンとルーシーは、ころがるようにしておりました。

すると、ひと声、西の街灯から東の海辺まで、ナルニアじゅうをゆるがす雄叫びをあげて、この偉大なるけものは、白の魔女に飛びかかりました。

そのときルーシーは見ました――魔女が一瞬、アスランのほうへ顔をあげ、恐怖とおどろきの表情をうかべたのを。

それからアスランと魔女は組みあったままたおれましたが、魔女が下になっていました。それと同時に、アスランが魔女の城からつれてきた勇ましい動物たちが、いつせいに敵にむかつてしやにむに突撃をかけました。こびとたちは戦用のおのをふるい、犬たちは牙をむき、巨人はこん棒をふり回し（しかも、その足で何十人という敵をふみつぶしました）、一角獣はその角で、半人半馬は剣とひづめで戦いました。

先に戦ってつかれていたピーターの軍隊は歓声をあげ、新たにやってきた者たちはときの声をあげ、敵どもはきやあと悲鳴をあげて、わけのわからぬことを口走り、森には戦いの音がひびきわたりました。

戦^{たたか}いは、アスランたちが到着^{とうちやく}して数分^{すうぶん}後^ごにはおわっていました。

敵^{てき}のほとんどは、アスランとその仲間^{なかま}たちの最初^{さいしょ}の突撃^{とつげき}でたおされ、命^{いのち}を取りとめた連中^{れんちゆう}は、魔女^{まじよ}が死^しんだのを見^みると、降参^{こうさん}するか、にげ出^だすかしました。

ルーシーが気^きづいてみると、ピーターとアスランが、もう、あくしゅをしていました。ピーターのようすがすっかり変^かわっているのが、ルーシーにはふしぎに思^{おも}えました。その顔^{かお}は青^{あお}ざめて、きびしく、急^{きゆう}に年^{とし}をとったように見^みえました。

「エドマンドのおかげです、アスラン。」

ピーターは言^いっていました。

「エドマンドがいなければ、やられていたと思^{おも}います。魔女^{まじよ}は、ぼくらの仲間^{なかま}の戦士^{せんし}たちを、つぎつぎに石^{いし}に変^かえていたのに、エドマンドはひるみませんでした。三人^{にん}の人食^{ひとく}い鬼^{おに}をたおし、魔女^{まじよ}があなたのお付^つきのヒョウの一頭^{とう}をちようど像^{ぞう}に変^かえているところへかけつけました。魔女^{まじよ}のところに着^ついたとき、エドマンドは、ほかの者^{もの}たちのようにいきなり魔女^{まじよ}にかかっていつてむなしく像^{ぞう}にされてしまうようなことをせず、頭^{あたま}をはたらかせて、剣^{けん}を魔法^{まほう}の杖^{つえ}にふりおろして、こなごなにしたのです。いったん魔法^{まほう}の杖^{つえ}がこわれると、こちらに勝^かちめがで出てきました——もうすでに、かなりやられてはいましたが。エドマンドはひどい傷^{きず}を負^おっています。手当^{てあ}てをしに行^いきましょう。」

みんなは、戦場から少しはなれたところで、ビーバー夫人の手当てを受けているエドマンドを見つけました。血まみれで、はあはあと口をあけていて、その顔はひどい土気色をしていました。

「急ぐのだ、ルーシー」と、アスラン。

そのとき、ルーシーはクリスマスプレゼントにもらったあの貴重な薬のことをようやく思い出しました。

ルーシーの両手はふるえてしまつてなかなかふたをあけられませんでした。ついになんとかあけて、お兄さんの口にぽたりぽたりと薬をそそぎました。



ルーシーがまだじつとエドマンドの青白い顔をのぞきこんで薬の効果があるのかなと思っていると、

「ほかにも傷ついているひとたちがいる」

と、アスランが言いました。

「ええ、そうね。でも、ちよつと待つて。」

ルーシーは、むつとして言いました。

「イブのむすめよ。ほかの者たちも死にかけているのだ。エドマンドのせいで、死者が増えてよいのか？」

アスランは、いつもより重々しい声で言いました。

「ごめんなさい、アスラン。」

ルーシーは、立ちあがってアスランとともに行きました。

それから三十分は大いそがしでした——ルーシーがけが人の世話をしているあいだに、アスランは石になってしまった者たちをもとにもどしたのです。

ついにエドマンドのところにもどつてこられるようになったときには、エドマンドは自分の足で立ちあがって、傷がなおっているばかりか、さつきより——いえ、もうずっとむかしから、そもそもひどい学校生活がはじまってエドマンドがおかしくなつて以来、こんなエドマンドを見たことがないというくらい元気そうでした。

じつのところ、魔女から悪いことを教わっておかしなことになつてしまふ以前の、よい顔になつていました。もとの本当のエドマンドにもどり、人の顔をまともに見ることができるようになつていたのです。戦いがくりひろげられたその場所で、アスランは、エドマンドを騎士にする儀式をおこないました。

ルーシーはスーザンにささやきました。

「エドは知ってるの？ アスランがエドのために、なにをしたか？

魔女との取り決めが、本当はなんだったか？」

「しー！ いいえ。もちろん知らないわ」と、スーザン。

「教えてあげたほうがいいんじゃない？」と、ルーシー。

「そんなことないわ。エドには、つらすぎるでしょう。あなた、エドの身になって考えてごらんさい。」

「でも、知っておくべきだと思うな」

と、ルーシーは言いました。でも、そのとき、じやまが入り、この話はそれきりになりました。

その晩は、そのまま外で寝ました。どうやってアスランがみんなに食事を用意してくれたのかわかりません。でも、どうにかこうにか、みんなは夜八時ごろ、草にこしをおろして、すてきな紅茶と軽食をいただくことができました。あくる日、一同は、大きな川に沿って東へ行進をはじめました。そして、そのつぎの日には、夕方の軽食の時間ごろに、ついに河口に着いたのでした。

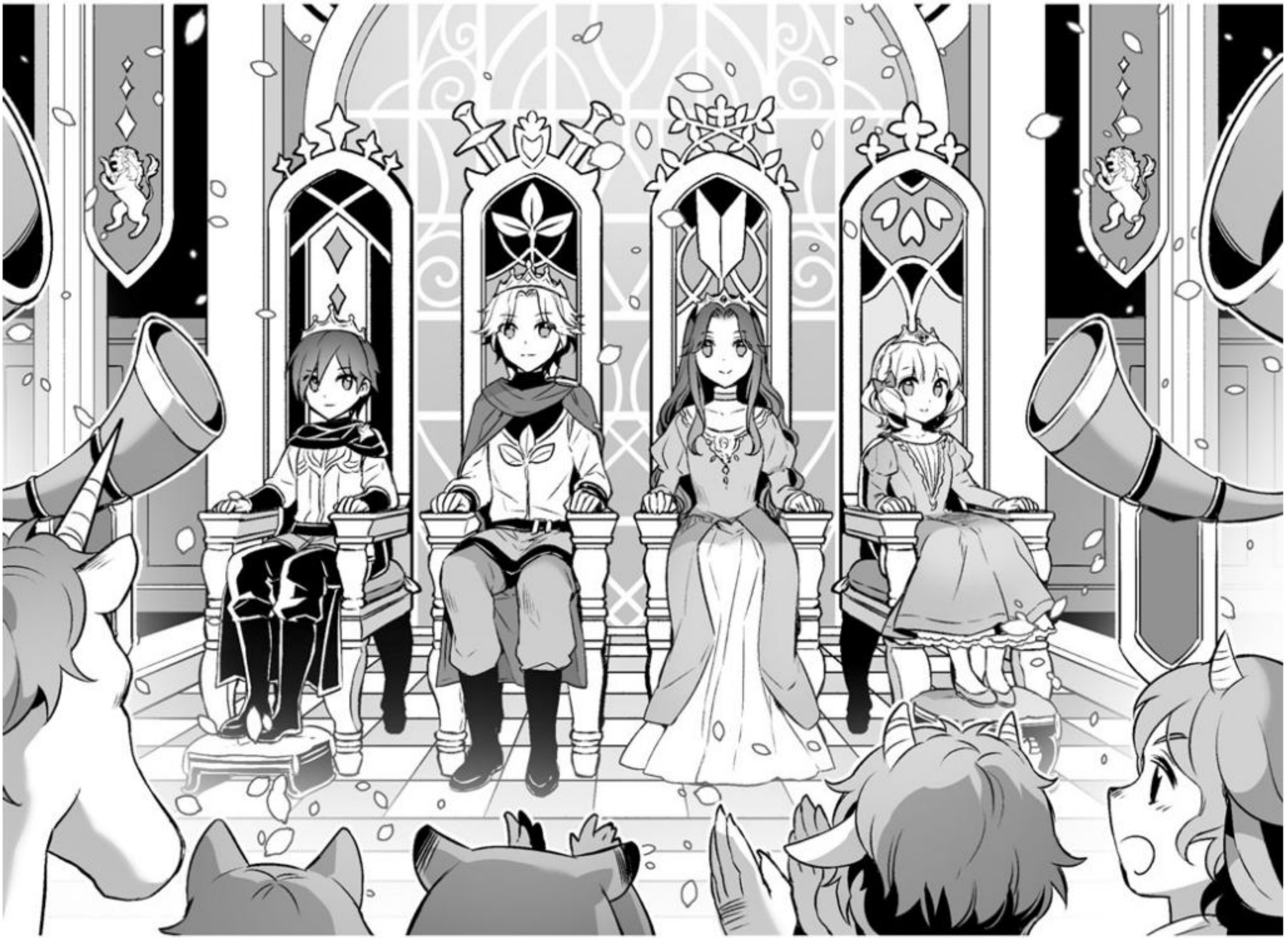
ケア・パラベルの城が小さな丘の上に高くそびえていました。

目の前には砂浜がひろがり、岩や、潮だまりや、海藻があり、海のおいがして、どこまでもつづいていく浜辺に、青緑の波がいつまでも寄せてはくだけていました。そして、ほら、カモメの鳴き声がします！ みなさん、カモメの声を聞いたことがありますか？ 聞いたことがある人は思い出してみてください。

その晩、夕食後、四人の子どもたちはみんなふたたび浜辺へ出てきて、くつやくつ下をぬいで、足の指のあいだで砂を感じました。でもつぎの日は、もつとおごそかでした。というのも、ケア・パラベルの大広間で――すばらしい広間で、屋根は象牙、西のかべにはクジャクの羽根がかかっており、東のドアは海に面していました――そこに味方の者がずらりとならぶなか、ラッパのひびきに合せて、アスランがおごそかに四人に冠をさずけたからです。

四人がアスランにみちびかれて四つの玉座にすわると、

「王^{おう}ピーターばんざい！ 女王^{じょおう}スーザンばんざい！ 王^{おう}エドマンドばんざい！ 女王^{じょおう}ルーシーばんざい！」
という、耳^{みみ}をつんざくようなよろこびの声^{こえ}があがりました。



「いったんナルニアの王や女王となったら、つねに王であり、女王だ。しつかりたのむぞ、アダムのむすこたち！ しつかりたのむぞ、イブのむすめたち！」

と、アスランは言いました。

すると、あけはなたれていた東のドアから、岸近くまで泳いできた男女の人魚たちの声がして、新しい王や女王たちのために歌を歌ってくれました。

こうして、子どもたちは玉座にすわり、笏杖を手にして、味方全員にほうびを取らせ、栄誉をさずけました。そのなかには、フォーンのタムナス、ビーバー夫妻、ジャイアント・ゴロゴロバフィン、ヒョウたち、よい半人半馬たち、よいこびとたち、そして例のライオンもありました。

その夜、ケア・パラベルでは大宴会となり、飲めや歌えのお祭りさわぎで、金色がきらめき、ワインが流れ、城じゅうの音楽にこたえて、聞いたこともないような、心をゆさぶる、あまい音楽を、海に住む人たちが奏でました。

ところが、こうしたよろこびの最中に、アスランだけがそつと立ち去っていきました。アスランがいないと気づいたとき、王たちと女王たちは、なにも言いませんでした。というのも、ビーバーさんが、こう忠告していたからです。「アスランはあらわれたり、消えたりするものです」と。「ある日アスランに会えても、つぎの日には会えなくなります。しばらくのうちはいいやなんです——もちろん、よその国のめんどろも、みてやらなければなりませんね。だいじょうぶです。何度でも来てくれますよ。ただ、むり強いしてはなりません。アスランは野生なのですから。人に飼われるようなライオンではないのです。」

そしてようやく、みなさんにもおわかりのように、このお話はほとんど（すつかりではありませんが）おしまいまでできました。ふたりの王さまとふたりの女王さまは、じょうずにナルニアをおさめ、その治世は長くしあわせにつづきました。

最初のうちは、白の魔女の残党をさがし出して、やつつけることで大いそがしでした。実際、長いこと、森のおくに敵がひそんでいると

いう知らせが絶えなかつたのです。こちらでお化けが出た、あちらでだれか殺されたとさわぎがあり、ある月にはオオカミ人間が目撃され、つぎの月には鬼婆のうわさがあるといった具合でした。でも、ついには、そうしたいまいましい連中は根だやしにされました。

そして、王たちと女王たちは、よい法律をつくり、平和をたもち、善良な木々が不必要に切られないようにし、幼いこびとや幼いサテュロスはむりに学校に行かなくてもよいようにしてやり、おせっかいや、でしやばりはやめさせるようにして、みんながおたがいに仲良くらせるようにしました。おそろしい巨人たち（ジャイアント・ゴロゴロバフィンとはまったく別の種族です）が国境をこえてやってきたときには、ナルニアの北へ追いかえました。それから、海のむこうの国々と友好関係をむすび、国の元首として訪問しあいました。そうして何年もたつと、子どもたち自身が成長して変わっていきました。ピーターは背が高く、厚い胸をした、偉大な武将となり、英雄王ピーターと呼ばれました。

スーザンは背が高く、足もとにとどくかというくらい長い黒髪をした優雅な女性となりましたので、海のかなたの国王たちが、大使をよこして、結婚の申しこみをしました。そして、やさしき女王スーザンと呼ばれました。

エドマンドは、ピーターより重々しく物静かになり、考えの深い、判断力に富んだ男になりました。そして、正義王エドマンドと呼ばれました。

けれども、ルーシーは、というと、いつまでも陽気な金髪のおじょうさんで、近隣の王子さまという王子さまからお妃になつてくださいと申しこまれました。ナルニアのひとたちは、勇ましき女王ルーシーと呼ばれました。

こうして四人は、とても楽しくくらし、こちらの世界の暮らしのことを思い出すようなことがあつたとしても、それはただ夢を思い出すようなものにすぎませんでした。

ある年、タムナスさん（今では中年のフオーンとなり、堂々たる体つきになっていました）が、川をくだつて四人に会いに来て、白い牡蠣がまたあらわれたと知らせてくれました——つかまえたら願いをかなえてくれるというあの白いシカです。

そこで、ふたりの王とふたりの女王は、宮廷の主だった家来を引きつれ、角笛を持ち、獵犬をともなつて、西の森に白ジカ狩りに出かけました。狩りはじめてまもなく、シカが見つかりました。たいへんな速さで、荒れ地であろうと平地であろうと、どんなところでもつっ走って行くので、ついに家来たちの馬はみんなへたばつて、四人だけが追いかけていくことになりました。四人は、シカが馬についていけないやぶに入っていくのを見ました。そこで、王ピーターが言いました。（王と女王になつてずいぶんたつので、話しかたもすっかり変わったしまいました。）

「かたがた、ここで馬をおり、やぶのなかまで、あのけものを追つていこうではないか。かくも気高き獲物を追つたためしはかつてない。」

「はい」と、三人。「それがようございましょう。」

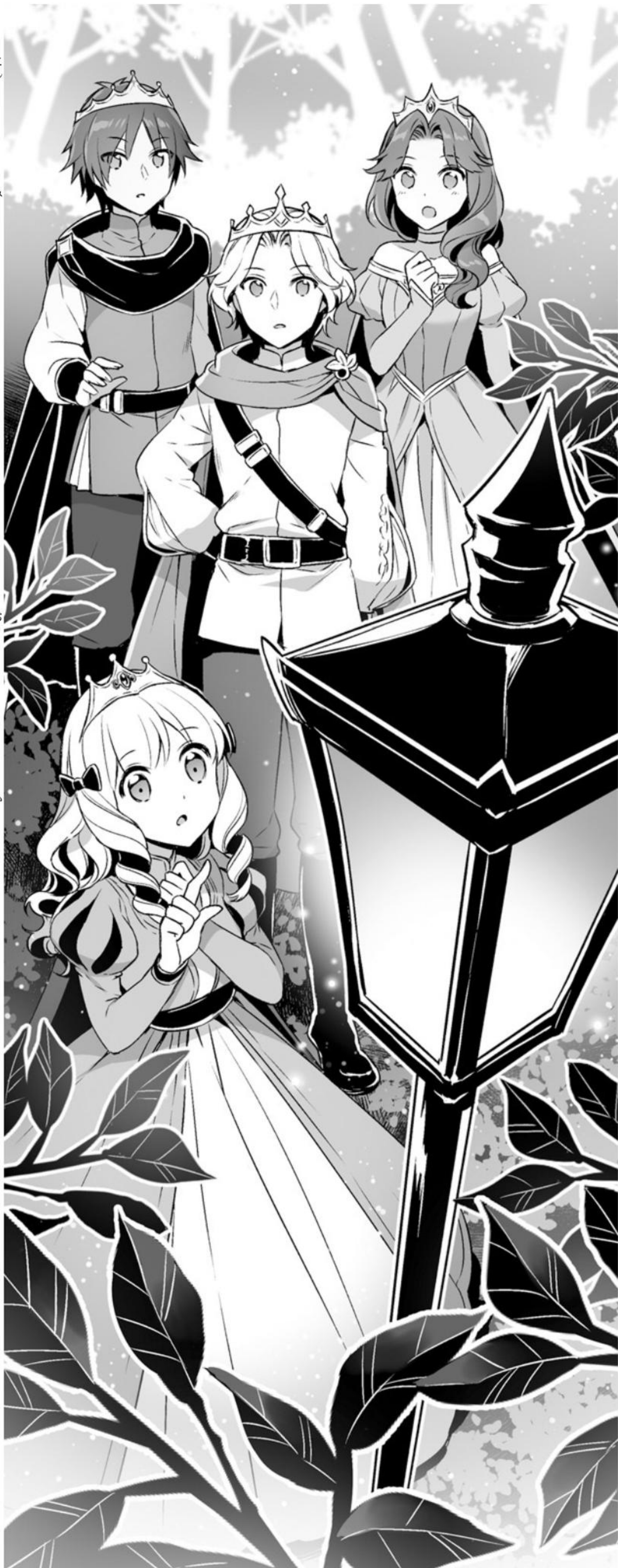
そこで四人は馬をおり、馬を木々にむすびつけて、深い森へ歩いて入つていきました。なかへ入るや、女王スーザンが言いました。

「みなさまがた、おどろきの珍事です。これは鉄でできた木でございましょうか。」

「女王陛下」と、王エドマンドが言いました。「上のほうまでよくごらんになれば、おわかりになります。先にランプのついた鉄の柱です。」

「まこと、ふしぎなる装置だ」と、王ピーター。「かくも木々が密集しているところにランプをかかげるとは。しかも、あのように高くあつては、だれにも光が見えぬではないか！」

「陛下」と、女王ルーシー。「おそらくは、この柱とランプがここに立てられたとき、このあたりの木々はもつと小さく、あるいは少なく、あるいは、なにもなかったのではないでしうか。これは、できてまもない森ですが、この鉄の柱は古うございますもの。」



四人はそれを見あげて、たたずみました。やがて、王エドマンドが言いました。

「なぜか知らねど、この柱の上のランプをうちながめると、ふしぎな思いにかられる。かようなものがかつて見たことがあるような。まるで夢、いや夢のなかの夢で——」

「陛下」と、みんながこたえました。「われらもまた同じ思いにかられます。」

「しかも」と、女王ルーシー。「この柱とランプを通りすぎれば、まかふしぎな冒険をすることになるか、さもなくば、われらの運命ががらりと変わる気がしてなりませぬ。」

「女王陛下」と、王エドマンド。「わが胸にもそのような思いがあります。」

「私もだ、弟よ」と、王ピーター。

「わたくしもです」と、女王スーザン。「それゆえ、早々に馬のもとにもどり、白ジカを追うのはやめましょう。」

「女王陛下」と、王ピーター。「その儀はどうかゆるされたい。われら四人がナルニアの王と女王になって以来、戦や冒険や武勲や正義の実践といっためざましきことに、いったん手を染めておきながら、とちゅうであきらめたということはない。はじめたことはかならずやりとげてまいった。」

「姉上」と、女王ルーシー。「兄上のおおせのとおりです。おそれや胸さわぎゆえに、今狩っている気高きけものからすごすごと手をひくのは、はじとなりましょう。」

「同感だ」と、王エドマンド。「それに、この胸さわぎがなにを意味するのか、ぜひ知りたい。ナルニア一の宝石とひきかえにしても、あきらめることはすまいぞ。」

「では、アスランの名にかけて」と、女王スーザン。「みなさまがたがさように思しめすなら、このまま進んで、われらにふりかかる冒険を受け入れましょう。」

こうして、王と女王らは、しげみに入り、二十歩も歩かないうちに、今見たのは街灯だと思いました。さらに二十歩も歩かないうちに、枝をかきわけ進んでいるのではなく、コートの中を進んでいることに気づきました。

つぎの瞬間、みんなは、たんすのとびらから、がらんとした部屋へころがり出ていました。もはや、狩りの服を着た王や女王ではなく、むかしの服を着た、ただのピーター、スーザン、エドマンド、ルーシーとなっていました。

しかも、それは、みんながたんすにかくれに入^{はい}った、まさにあの日^ひ、あの時刻^{じこく}でした。

マクリーデイさんと訪問客^{ほうもんきやく}たちは、まだ廊下^{ろうか}で話^{はな}しています。でもさいわいなことに、このがらんとした部屋^{へや}へは入^{はい}ってこなかったので、子どもたちはつかまりませんでした。

どうしてたんすからコートが四着^{ちやく}なくなっているのか？ そのことを教授^{きやうじゆ}に説明^{せつめい}しなければいけないと子どもたちが思^{おも}わなかったら、このお話^{はなし}はここでおわっていたことでしょう。

教授^{きやうじゆ}は、とてもしつぱな人^{ひと}ですので、子どもたちの話^{はなし}を聞^きいて、「ばかなことを言^いつてはいけない」とか、「うそをついてはいけない」などと言^いわず、なにもかもすつかり信^{しん}じてくださいました。

「いやいや」と、教授^{きやうじゆ}はおつしやいました。「たんすのとびらを通^{とお}つて、コートを取^とりにもどろうとしてもむだだろうな。その行^いきかたではナルニアへはもどれんよ。それに、たとえ、もどれたとしても、コートは今^{いま}ごろ使^{つか}いものにならなくなっているさ！ え？ なんだつて？ そう、もちろん、いつかはまた、きみたちがナルニアへもどる日^ひがくる。いったんナルニアの王^{おう}となったら、つねにナルニアの王^{おう}なんだからね。だが、同じ方法^{おなほうほう}をもう一度^{いちど}やってみようとしなさんな。いや、それより、ナルニアへもどろうと思^{おも}つてはだめなんだ。思^{おも}わぬときに、ひよいと、もどれるものさ。それから、たとえきみたち同士^{どうし}であつたとしても、やたらにナルニアのことをしやべつてはいけない。よその人^{ひと}には絶対^{ぜったい}秘密^{ひみつ}だ。その人^{ひと}が同じような冒険^{ぼうけん}をしたとわかれればいいけどね。なんだつて？ どうやってわかるかつて？ そりやあ、だいじようぶ、わかるさ。そういう人^{ひと}つてのは、へんなことを言^いうからね。顔^{かお}つきがちがうのさ。それで秘密^{ひみつ}がばれてしまう。目^めをよく見^みひらいておきたまえ。やれやれ、最近^{さいきん}の学校^{がっこう}じゃ、いったいなにを教^{おし}えているんだろうねえ？」

ここで、たんすの冒険^{ぼうけん}は本^{ほん}当^{とう}におわりとなります。でも、もし教授^{きやうじゆ}のおつしやるとおりなら、これはまだ、ナルニアの冒険^{ぼうけん}のほんのはじまりにすぎなかったのです。

※本書には一部、差別的ととれる表現がふくまれています。作者が故人であること、作品が発表された当時の時代背景、文学性や芸術性などを考慮し、原文をそのまま訳して掲載しています。



訳者あとがき

C・S・ルイスが『ライオンと魔女と洋服だんす』（一九五〇）を書いたときは、つづきの話を書くことは考えていませんでした。けれども、やがて続編や前編が書かれ、七部作（一九五〇～五六）ができたようになりました。

六番めに発表された『魔法使いのおい』（一九五五）は『ライオンと魔女と洋服だんす』より前の世界をえがく話になっていきますので、ナルニア国での年代順に話をならべなおせば、最初は『魔法使いのおい』、二番めが『ライオンと魔女と洋服だんす』、三番めが『馬と少年』（一九五四）……というふうになります。でもやっぱり、ルーシーがたんすのとびらをあけて別世界を見つけるところからナルニアの物語ははじまると考えたほうがすつきりすると思います。

とびらのむこうに、こちらとはまったくちがう世界があると気づくこと、そしてそこには名前を聞いただけでふしぎな気持ちかわき起こる大きな存在があるとはじめて知ること、そうしたことが、作者にとって重要な意味をもっていたと考えられるからです。

そうして物語がいったんはじまると、『ナルニア国物語』の世界では時間なんてかんたんに逆もどります。『ライオンと魔女と洋服だんす』の最後でも、すっかり大人になってナルニア国をおさめていたはずのピーターたちが、また子どもにもどり、しかもマクレーディさんからにげようとしてたんすに飛びこんだ「まさにあの日、あの時刻」にもどってくるのですから、『ナルニア国物語』においては私たちの常識的な時間の感覚なんて通用しないと言わなければなりません。

そういう意味では、七部作のどの作品から読んでもかまわないとも言えるかもしれませんが。ルイスは、年代順に読みたいという男の子に、「きみの意見に賛成です」と手紙を書き送っています。（と同時に、「作者の意見は作品に対して大きな意味はもたない」とも書いています。）

作者のC・S・ルイスは、ケンブリッジ大学の英文学の教授で、キリスト教についての本をたくさん書いた神学者でもありました。ナルニア国で、人間の男の人のことを「アダムのむすこ」、女の人のことを「イブのむすめ」と呼ぶのは、キリスト教の『聖書』に、人間の最初の男の人がアダム、女の人がイブであつたと記されているからです。そのほかにもキリスト教との結びつきがたくさんあります。いちばん大切なのは、ルイス自身が子どもたちへの手紙で明かしているように、「アスランは、イエス・キリストを意味しています」ということでしょう。

みなさんは、イエス・キリストってどんな人か知っていますか？

イエス・キリストはキリスト教で救世主と呼ばれる人で、そのたんじょう日は、今でもクリスマスとして祝われています。「クリスマス」というのは、「キリスト（クリスト）」の「ミサ」という意味で、「ミサ」はもともと「お祝い」という意味です。

キリストはとてもよい人で、世の中の人々をすくおうとして教えをひろめました。でも、当時の政府から危険人物と見なされて捕らえられ、十字架にはりつけにされて、殺されてしまいました。ところが、悲しんだ女の人たちが、その墓をたずねると、墓はからっぽになっていました。奇跡が起こり、キリストは死をのりこえて復活したのです。キリストの復活を祝うお祭り（復活祭、英語圏ではイースター）はクリスマスより大切なお祭りで、たまごに色をぬってお祝いしたりします。

そうです。アスランの復活は、キリストの復活をイメージして書かれています。処刑前、アスランががつくりと気落ちしたようすで坂道をあがっていくときにスーザンとルーシーがあとを追いかけるのは、はりつけの場所であるゴルゴタの丘へ苦しい歩みを進めるキリス

トのあとを心配して追うエルサレムの女たちを思わせませす。

ルイスは、「ひきようなことをしてしまいうエドマンドは、キリストを裏切るユダと同じ」と記しています。キリストがユダのせいではりつけにあうように、アスランはエドマンドのせいで（エドマンドの身代わりとなつて）殺されるわけです。ただし、「ユダとちがつて、エドマンドは後悔し、ゆるされる」とも、ルイスは書いていますから、すつかり『聖書』の物語にかさねて読む必要はありません。

また、『石舞台は、モーセの十戒が記された石板を思わせる』ともルイスは記し、『旧約聖書』の古い信仰から『新約聖書』の新しい信仰へと世界がひろがることをイメージしたようです。

もちろん、こうしたことを知らなくても物語は楽しめますし、むしろ、そういう意味を知らなくとも、いつしよけんめいに読んでアスランのふしぎな力を感じるこそが正しい読みかたと言えるでしょう。作品中では、アスランの存在をもつとも敏感に感じとるのは、いちばん幼くて純粋な心をもつルーシーです。作者はそうしたすなおな心にうったえかけているのです。

ですからみなさんも、頭で理解して満足するだけでなく、心で感じることを大切にしながら、この本を読んでくださいね。

翻訳にあたっては、原作の英語の格調の高さをくずさないように気をつけて訳しました。英米の子どもたちが原文を読んで味わうとおり
の「楽しさ」——知らない世界に出会うときのわくわく感や、わからないことを理解したいと思う好奇心もふくめて——を大切にしました。
とくに原文の解釈には細心の注意をはらいしました。たとえば第十三章で、魔女が「深遠なる魔法のことを忘れたのか？」とたずねるとき、
これまでの訳ではアスランが「忘れてしまったようだな」とか「どうかな、忘れてしまったかもしれない」などと答えていたのですが、ア
スランが深遠なる魔法のことを忘れるはずがないのです。原文には「〜と仮定しよう (Let us say)」という表現がもちいられており、魔
女からみんなに説明させるために、アスランがあえて「忘れたということにしよう」と言っていることがわかります。

また、第十六章では、アスランが魔女の館で像にされていた生き物たちをたすけるとき、「しつかりやれよ、みんな。♪二階も一階も♪

奥^{おく}方^が様^{さま}の部^へ屋^やも♪だ！」と言^いいますが、こ^これ^れはGoosey Goosey Gander^{グーシーグーシーギヤンダー}とい^いうナ^なーサ^さリ^りー・ラ^らイ^いム^むの^いっ^っせ^っつ^つの^の一^い節^っで^っす^す。(メ^めロ^ろデ^でィ^いー^ーを^を次^{つぎ}の^の図^ずで^で示^{しめ}します。)
先^{せん}行^{こう}訳^{やく}では、た^ただ^だ命^{めい}令^{れい}して^いる^るだ^だけ^けに^にな^なっ^って^てい^いま^ます^すが、ア^あス^すラ^らン^んが^が上^{じょう}機^き嫌^{げん}にな^なっ^って^て口^{くち}ず^ずさん^{さん}で^でい^いる^るとい^いう^うこ^こと^とも^もわ^わか^かる^るよ^よう^うに^にと^と配^{はい}慮^りして^し訳^{やく}しま^まし^した^た。



アップ ステアーズ アンド ダウン ステアーズ アンド イン マイ レイ ディーズ チェイン バー
Up - stairs and down - stairs and in my la - dy's cham - ber.

訳注などはできるだけだけつけないようにして、読みやすさに配慮しました。かわりに、ここではいくつかの料理について解説しておきましょう。

第七章で、スーザンが料理しているじやがいも料理★は、ジャック・ポテトです。じやがいもの皮をむかず、切らずに丸ごと、ひたひたのお湯で煮て、やわらかくなったら、水を切って、鍋にふたをせずに、こげない程度に火に近いところに置いて余分な水分をとばします。イギリスの伝統的な料理法です。バターをのせると、とろとろに溶けておいしいのです。ベイクト・ポテトやジャケツト・ポテトとも呼びます。

ビーバー夫人が出してくれた「マーマレード・ロール」は、「マーマレード・ローリーポリー」とも呼ばれるイギリスの伝統的なデザートです。スエツト（ケンネ脂）をふくんだ生地を平たくのばして、マーマレードをぬって丸めて、焼きます。日本によくあるふわふわのスポンジ生地のロールケーキとはちがい、どっしりとした食感です。『ピーターラビット』にも、ジャムのかわりにネコを巻いて「ネコのローリーポリー・プディングを作ろう」なんていう話が出てきますが、ふつうはジャムやマーマレードなどをぬります。食べでのある生地（きじ）にたっぷりマーマレードが入った、あまーいデザートです。

さて、第二巻は、本作から一年後のお話です。ルーシーがはじめて学校の寄宿舎へ入ることになり、駅のプラットフォームで四人の子どもたちが汽車を待っていると、とつぜんナルニアの世界へもどってしまうのです。どうぞお楽しみに。

ナルニア国物語
②巻のお話は…

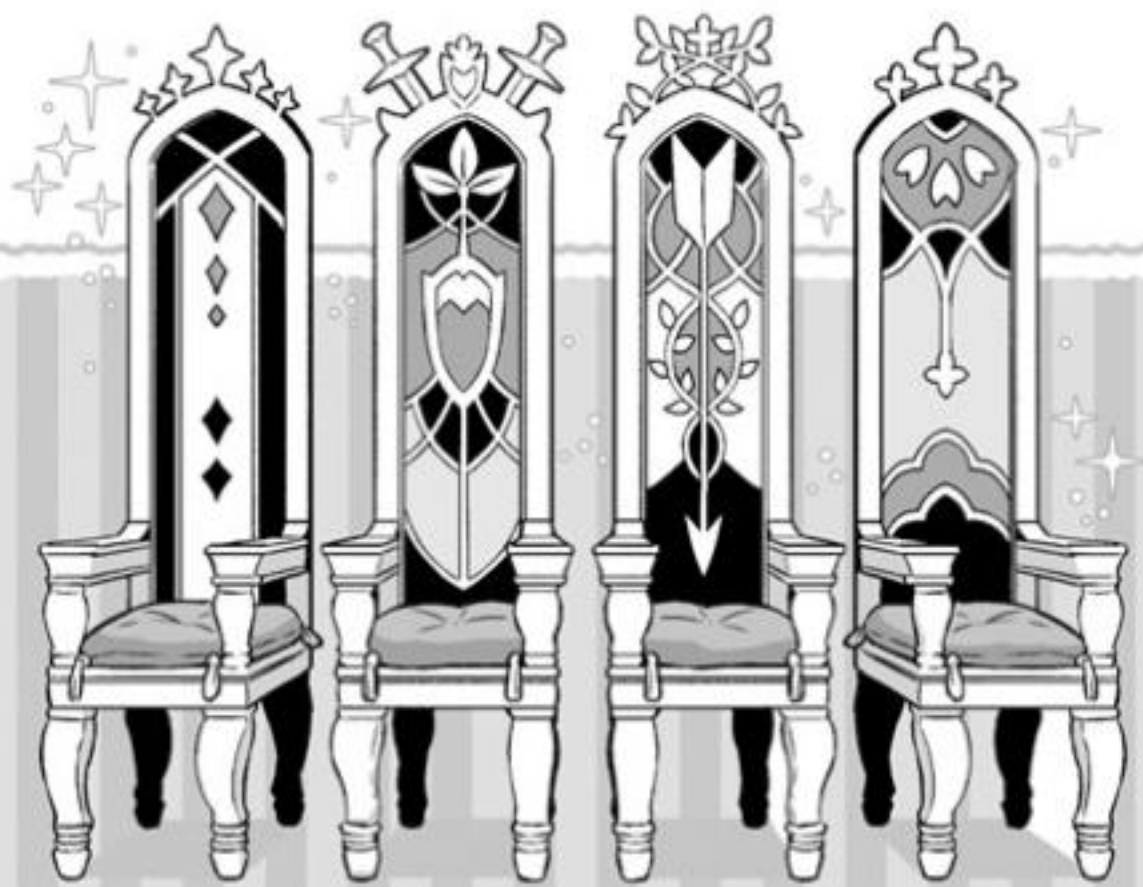
物語は、①巻の終わってから、一年後にはじまります。

夏休みも終わり、4人の兄妹たちは、教授の家を出て寄宿学校に行くことに。小さな駅に立って、なんだかつまらない気持ちで学校行きの列車を待っていると、ルーシーが「きゃあっ！」と悲鳴をあげました。

「だれかが魔法の力で、私たちを引っばってる！」

一瞬で、4人はまたナルニアに引きもどされてしまいます。でも、そこはみんなの知っているナルニアではありませんでした。4人が王様だった時代から1300年もの時がたった、未来のナルニアだったのです！

そのナルニアを統治するミラーズは、ひどく残虐な王で、自分の甥であるカスピアン王子を暗殺しようとたくらんでいるそうです。おまけに“白の魔女”を復活させようとする動きもあるらしく…。4人は、無事、ナルニアをよみがえらせることができるのでしょうか？



C・S・ルイス／作

1898～1963年。アイルランド系のイギリス人小説家で神学者。キリスト教の弁証家でもある。代表作は本シリーズで、その最終巻「さいごの戦い」でカーネギー賞を受賞。

河合祥一郎／訳

1960年生まれ。東京大学教授。訳書に『新訳 ふしぎの国のアリス』『新訳 ピーター・パン』『新訳 赤毛のアン 完全版』『新訳 星を知らないアイリーン おひめさまとゴブリンの物語』や「新訳 ドリトル先生」シリーズ（すべて角川つばさ文庫）など。公式ブログ <https://ameblo.jp/shoichiro-kawai/>

Nardack／絵

セーラームーンと魔法少女が大好きな、韓国在住の女性イラストレーター。『100年後も読まれる名作 美女と野獣』（小社刊）のイラストも担当。

しんやく
新訳
こくものがたり
ナルニア国物語
まじょ ようふく
①ライオンと魔女と洋服だんす

さく シー エス
作 C・S・ルイス

やく かわ いしょういちろう
訳 河合 祥 一郎

え ナ ル ダ ク
絵 Nardack

角川つばさ文庫

平成 29 年 10 月 20 日 発行

ver.004

©Shoichiro Kawai 2017

©Nardack 2017

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川つばさ文庫『新訳 ナルニア国物語 ①ライオンと魔女と洋服だんす』
平成 29 年 10 月 15 日初版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

<https://www.kadokawa.co.jp/>

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※ Japanese text only